

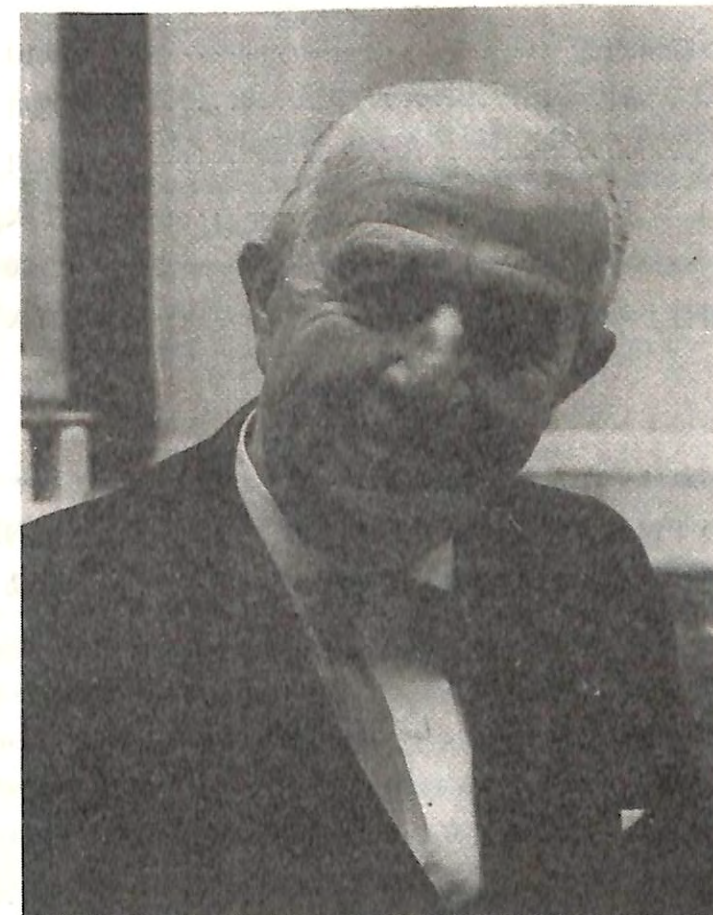
BULLETIN

第 11 号

フランソワ・ペルー教授追悼記念号

1988

日仏経済学会



(F・Perroux 1903.12.19~1987.6.2)

日 仏 経 済 学 会 ビ ュ ル タ ン

第 11 号 目 次

〈フランソワ・ペルー教授追悼記念号〉

(エッセー)

フランソワ・ペルーの経済思想	岡山 隆	1
巨星を悼む	西川 潤	5
経済学のクロードル	堀川 士良	7
IEDES「留学時代」そして F.Perroux 教授のこと	千代浦昌道	8
経済発展とペルー	勝俣 誠	10
ペルーにおける「異質性」の概念	清水 和巳	13

(論 文)

一経済学者の遍歴一かれはいかなる道を選んだか?	F・ペルー	16
フランソワ・ペルーの「構造」概念に関する一考察	竹内佐和子	29
仏・技術輸入関数と対仏・対米輸入関数と経済政策	諏訪 貞夫	35

(文献目録)

フランソワ・ペルー教授著作目録	46
-----------------------	----

(学会報告)

1987-88年の日仏経済学会(付会計報告)	93
------------------------------	----

(資料)

日仏会館図書室の新しい書誌情報サービス	96
---------------------------	----

(日仏経済学会会則)

.....	97
-------	----

(日仏経済学会会員名簿-1988年6月末現在)

.....	98
-------	----

(日仏経済学会役員名簿)

.....	102
-------	-----

(BULLETIN 登稿規定)

.....	103
-------	-----

フランソワ・ペルーの経済思想

岡 山 隆

(早稲田大学)

1987年6月3日に、なにげなく日本経済新聞をいつものように眺めていると、「仏経済学者ペルー氏死去」という報道が掲載されていた。1951年にパリ大学で、ペルー教授の講義をきいた思い出と共に、また一方では、私の心に大きな空白ができてしまったように感じた。

その全文はつぎのものであった。

「フランスの経済学者フランソワ・ペルー氏が2日パリで死去した。83才。リヨン生れ。コレージュ・ド・マリステで学び、1928〜37年リヨン大学、35〜55年パリ大学教授を務め、44年に応用経済科学研究所(後に応用数学経済科学研究所)を創設、雑誌「経済と社会」を発刊、ドイツの経済学者シュンペーターの経済学を発展させ、「ペルー学派」を築いた。

ペルー経済学は社会の構造的分析を特徴とし、権力関係など経済における非経済的要因の役割を重視し、第三世界の経済学者にも大きな影響を与えた。

著書には「シュンペーターの経済思想」(35年)、「20世紀の経済」(61年)、「経済進歩の一般理論」(56〜57年)などがある。(共同)

この記事ではば François Perroux フランソワ・ペルー教授の全貌が記されているし、小さい写真も入っていた。朝日、読売、毎日の各新聞も、同じ共同通信社をニュース源としているためほぼ同一のものが掲載されていた。この記事のうち、コレージュ・ド・マリステというのは正確には、リヨン(Lyon)にある Collège des Maristes (コレージュ・デ・マリスト) のことであり、カトリックの修道会が事業としてもっているミッション・スクールである。彼はこの高等学校で学んでからリヨン大学の文学部で哲学を、法学部で経済学を修得している。そして、経済学の大学教授資格試験に合格(Agrégé)されて、リヨン大学法学部の経済学教授を皮切りに教授職を続けられた。パリ大学法学部経済学、博士課程の経済学、パリ政治学院(Institut d'études politiques de Paris) 通称「シアンス・ポ」で経済学を1946〜52年まで講義をされた。さらに1955年からは Ecole pratique des hautes études (高等研究学校) の Directeur d'études (研究指導教授) をされた。この学校は大学院の研修課程に相当する演習(ゼミ)形成の授業を行っている。そして、遂に、フランスにおける最高学府である「コレージュ・ド・フランス」Collège de France の「経済分析」という講座の教授として1955〜76年まで講義をされておられた。

1903年12月19日に生まれ、83才の生涯のうち48年間教員をされていた。

1944年に応用経済科学研究所を創設すると同時に、初代の所長となり、雑誌「Economie Appliquée」を発行されている。この雑誌はフランス語、ドイツ語、英語、イタリア語などで論文を掲載し、フランス語の要約を付けている学術雑誌であり、時に特輯を組んだりして、世界的な経済学の水準を向上させるのに貢献している。また経済分析における数学の役割に注目し、社会科学のための数学を理学部数学科を出た新進の研究者を集めて研究させていた。世界の著名な経済学者がこの研究所を訪れ、その折にセミナーも開催された。こうして、応用数学経済科学研究所という名称になったのである。またロンドンに研究所の分室を設けて、ケインズ経済学のフランスへの紹介を始めとして、アングロサクソンの経済学との交流に努められてもいた。

研究所といえば、教育特権も合わせもった Institut d'études et de développement économique et social (経済・社会開発研究所) 所長を1960〜69年までされ、ここに「新興国」第3世界の学徒、研究者が

集まり、経済成長、経済援助、国際協調などの研究活動のセンターが形成され、これを指導されてもいた。

さらに、セネガルの首都に Institut de science économique de Dakar (ダカール経済科学研究所) を 1961年に創立された。

公務として、フランス政府から、イギリスで、国民所得計画の手法を研究するように命じられたのが1945年であり、この折に、ロンドンに「応用経済科学研究所」の分室を考え構想されたし、この調査研究は Le Revenu national, son calcul et signification “国民所得、その計算とその意義” (1947)、そして Les comptes de la nation “国民経済勘定” (1949) の著作となっている。大蔵省の調査方法に関する小委員会の委員長をされ (1952年)、また「経済社会審議会」Le Conseil économique et social の審議員を1959から69年まで10年にわたって勤められた。

学会関係では、International Association for Research in Income and Wealth と I' Institut international de statistique (国際統計学会) の理事をされ、国民所得審議会 Comité supérieur de rebvenu national にも属しておられた。

学士院 Académie 関係では、フランス海外領科学学士院 I' Académie des sciences d'outre-mer (1964年から) さらにイタリアの「トリノ科学学士院 I' Académie des sciences de Turin」の外国人会員でもあり、British Academy さらに南米ウルグアイ共和国の「経済学士院 I' Académie nationale d'économie de Montevideo」の通信会員でもあった。ベルギーの「ブラッセル科学・文芸王立学士院 I' Académie royale des lettres, sciences et arts de Bruxelles」の外国人準会員、スペインの「バロセロナ王立学士院 I' Académie royale de Barcelona」の会員と、ラテンの国々を中心として学術の面で高い評価を受けている。

加えて、多くの大学から名誉博士の称号を受け、その活躍は国際的であった。ブラジルのサンパウロ São Paulo 大学、ポルトガルのコインブラ Coimbra 大学、リスボン Lisbon 大学、ベルギーのリエージュ Liège 大学、西ドイツ共和国連邦のフランクフルト Frankfurt 大学、ガイアナのジョージタウン Georgetown 大学、アルゼンチンのコルドバ Cordoba 大学、ウルグアイのモンテビデオ Montevideo 大学、ペルーのリマ Lima 大学、コロンビアのバランキラ Barranquilla 大学とボゴタ Bogota 大学、チリーのサンチアゴ Santiago 大学、ルーマニアのブカレスト Bucurest 大学、スペインのバロセロナ Barcelona 大学がこの称号を贈呈している。

イタリアの「ナポリ科学・文芸協会 La Société des sciences et lettres de Naples」、ローマにある「リンチエイ・アカデミア Accademia di Lincei」の外国人会員であり、それに1967年にはフランスの精神科学・政治学学士院 I' Académie des sciences morales et politique 賞を受け、スウェーデンの「ストックホルム王立科学アカデミー I' Académie royale des sciences de Stockholm」の C.C.Soderstrom 金メダルを授賞されている。また the World Scientific Banking の Scientific Committee の委員長なども務められた。

国際的に活動し、国際的に高い評価を受けられているので当然各国から勲章を授与されている。フランスのレジオン・ドヌール・コマンドール Commandeur de la l'égion de' honneur, 国家功労大十字章 Grand Croix de l'ordre national du Mérite, 戦争十字章 Croix de guerre 39-45, 教育功労コマンドール Commandeur des Palmes académiques 勲章。それにまた、イタリア共和国功労章。ベルギー王冠勲章。セネガル国勲章、ギリシャ共和国名誉勲章を所持されている。

著書を追いながら、ペルー教授の研究のあとを辿ってみたい。「利潤論 “Le problème de profit,” Paris

Giard, 1926」を出されてからパリ大学に移られた。その頃、ヨーロッパは第2次大戦の開戦が迫っていた。

「資本主義と労働の共同体」Capitalisme et Communauté du Travail が1938年に翌1939年に「資本主義の技術 La Technique du capitalisme」出版され、続いて第2次大戦の真只中に「サンジカリズムと資本主義」、大著「価値 La valeur」が1943年に発表されている。資本主義、共同体、サンジカリズムというキー・ワードは、全生涯を通じての中心テーマとなっている。それは、学説史・思想史・哲学的なフランス社会主義の研究に裏打ちされている。ペルー教授の研究室で、サン＝シモン全集を見た時、私はこのことを知った。また、カトリシズムとくにドミニコ会および聖ドミニコの影響を受けておられた。資本主義は多くの欠陥を持つものとしながらも、これを評価し、活用すべきものでもあると見ている。資本主義には、生産システム、分配システム、制度的側面が一体となっており、一面、経済進歩は不平等ないし格差のなかで、これらを通して実行される。資本主義そのものもまた変化しつつある過度的な歴史現実として把握されている。こうした見解には、ペルー教授が大いに影響を受けたシュンペーター J.Schumpeter の「経済発展の理論」の仏訳の序文として書かれた長編の「La pensée économique de Joseph Schumpeter」(1935) および “La pensée économique de Joseph Schumpeter, les dynamiques du capitalisme,” Daroz, Genève, 1956 などに資本主義の革新、その担い手である企業者、その手段となる信用、投資、貯蓄の分析が加えられている。それに加えて、“全面的な動学”への展開として、経済要因に隣接している諸要因、情報、依存効果そして影響力の非対称性から生ずる“支配効果 l'effet de domination”へと分析手法を拡大させながらも、シュンペーターへの深い敬愛を示している。その後、「資本主義 Le capitalisme (1948)」という小冊子にペルーの資本主義研究が濃縮されている。

フランス政府の依頼で、イギリスをはじめとする国民経済計算、国民所得の研究についてはすでにのべたが、ケインズ Keynes をフランスの学会に紹介すると共に、批判を加えていった。国民所得の分析と同時に戦後フランス経済の再建、ないしヨーロッパ経済の復興のために行われた「マーシャル・プランあるいは世界にとって必要なヨーロッパ Le Plan Marshall ou l'Europe nécessaire au monde」(1948)と「第4次フランス経済計画 Le IVe Plan français」(1963)、「経済計画の数量手法 les techniques quantitatives de la planification」(1965)を研究および分析の対象とされてもいる。またマーシャル・プランからの延長ともいえるし、ペルーのなかにみられた共同体の思想との関連で、「ヨーロッパ共同体」「漕てしなきヨーロッパ L'Europe sans rivages」(1954)が生まれた。そこでは、経済よりも、政治ないし社会的要因を重視しており、極力「開かれた共同体」という視点から6カ国のヨーロッパ共同体を批判している。

さて、経済のめざすもの経済進歩ないし経済成長に関しても精力的な現状の分析と理論の提案を行っている。「経済進歩の理論 la Théorie du progrès économique」および「経済進歩の一般理論 la théorie générale du progrès économique」三分冊 (1957)がある。経済進歩のなかに「向上ないし改善」と「時間」の「二要素が相互に結合」して、社会学的な側面つまり教育、健康、文化に波及していくことを明らかにしている。「経済進歩 le progrès économique」(1968)もこうした延長線上にある。

1960年代はフランスの旧海外領が独立をしていった。この少し前から、東西の“鉄のカーテン”といわれた“冷たい戦争”が次第に“デタント”を迎えてきた。この時期に発行されたのが「平和的共存 la Coexistence pacifique」(1958)であり、共存の可能性を追求した大著2巻であった。独立を獲得した新しい国々の経済的發展を願いつつ旧来の経済関係を分析し、平和の構築を模索するのが「新興諸国の経済—工業化と国民国家の集団— L'économie des jeunes nations, Industrialisation et groupement des nations」(1962)である。

ここで、小さい著書で、哲学入門叢書に入っている「経済と社会—拘束、交換、贈与— Economie et Société —contrainte, échange, don—」(1960)をとりあげよう。まず、古典派のミル、マルクス、そしてワルラス、パレートの理論を批判的に最検討を加え、経済関係を交換のみに限るのは狭ますぎるとして経済財として拘束と贈与を取り上げている。均衡理論から成長、そして環境問題にも及んでいる。

1960年に598ページの大著「20世紀の経済 L'économie du XXe siècle」が登場する。ここにはペルー教授

が練ってきた多くの経済分析の手法が集大成されている。前述してきたものの他に、経済空間、経済成長の極ないし拠点、支配というもののなかに含まれる経済政策ないし経済計画の調整能力というものが組みこまれた構造分析の手法が呈示されている。この20世紀の経済という対象は、1966年から67年に渡って出版された3巻の「20世紀の企業と経済 l'Entreprise et l'Economie du XXe siècle」でより一層現実のそして多くのケースの分析を行っている。20世紀の経済の主演とも云える企業、巨大企業、多国籍企業を取り扱いもしている。ユネスコの出版として、1962年には「科学計画と経済・社会開発計画の統合 l'intégration du plan scientifique et du développement économique et social」がある。

1960年代に、経済・社会開発研究所の所長をしておられた。その研究所に多くの第三世界の学徒を迎えられていた。彼らとの接触を通して、経済成長、経済・社会開発、第三世界問題を分析され、従属学派や周辺経済分析にもきわめて多くの影響を与えておられる。その時期の著作を列举すると、「国家の独立 Indépendance de la nation」、「国民経済の“独立”と国家間の相互依存 “Indépendance” de l'économie nationale interdependance des nations」(1969)がある。ここでは括弧付きの独立に注目しよう。世界経済構造ないし世界経済体制のなかでそれぞれの国家経済は異質性を保ちうるのか、あるいは独自の経済構造が溶解していつてしまうのかを中心課題としている。拡大EC問題も文化面での独立性を保てるのかと分析している。こうした分析の延長は「インフレ、ドル、ユーロダラ Inflation, dollar, Euro-dollar」で、金融ことに国際金融と投資を取り扱っている。「国民経済の独立と国家の独立 Indépendance de l'économie nationale et interdependance des nations」(1974)もこのなかに入れてよい。

フランス社会主義とカトリシズムの強くみられる研究は「産業と集団的創造 Industrie et création collective」(1964)「パンと言葉 le Pain et la Parole」(1969)がある。

弁証法手法の社会科学面への適用を目指した「疎外と産業社会 Aliénation et Société industrielle」があり、「権力と経済 Pouvoir et Economie」(1973年)「大衆と階級 Masse et Classe」(1972年)そして「新たな開発の哲学をめざして Pour une philosophie du nouveau développement」(1982年)がある。この著書の標題を眺めただけでも、ペルー教授が経済分析において取りあげた中心的課題の手がかりと拡がりを知ることができる。

1951年にパリ大学の教室でペルー教授から突然質問され、私の乏しい語学力と学才で何を答えたか良くわからなかったが、先生は「どこで学び、どこから来たのか」と尋ねられた。「日本です」と答えたら、授業の終わりに「私の研究所へ一度来なさい」と云われた。

研究所(応用経済科学研究所)をおとずれると、所長室で迎えて下さり、机の上の一枚のクリスマス・カードを示された。それは、N.H.K.会長の古垣鉄太郎氏からのものであった。「毎年、一番早く受け取るクリスマス・カードが古垣さんからのものです」と微笑された。古垣氏とはリヨン大学での友人とのことであった。そして「日本からの学生がフランスに来たら、この研究所に紹介して下さい」とも付け加えられた。堀川マリさん、堀川士郎氏をはじめ、経済を学ぶ日本人が訪ねることになったのである。

先生は、他のパリ大学教授が当時黒いガウンを着用して講義をされているのに、紺の背広に、白い水玉模様の紺の蝶ネクタイで講壇に登られ、精力的に激しい語調の難しい講義であった。

ご家庭は病気がちだった奥様とのお2人でお子様になかったし、1950年代の終りから次第に難聴になられ、しかもそれが進行していつて、恵まれた私生活ではなかったようだった。しかし、きわめて暖かい人柄であった。

こうした生涯であったが、フランスでは時にノーベル経済学賞の候補にあげられたこともあった。しかしながらフランス・アカデミーの会員に選出されることがなかったのは、一面きわめて厳しい所であったためかも知れない。

しかし、シュンペーターの追悼で書かれている言葉だが、この言葉つまり「苦行僧のような」というのが、ペルー教授ご自身にもそのままではまるように私には思えるのです。

巨星を悼む

西 川 潤
(早稲田大学)

1987年6月2日、フランソワ・ペルー教授はパリで亡くなった。享年83歳であった。フランスのみならず、世界の経済学界の巨星墜つとの感を拭いがたい。日本でもペルーの訃報に接し、またその薫陶を受けた人びとの数は少ない数ではない。そこで、日仏経済学会では、“BULLETIN”の本11号を、ペルー教授追悼記念の特集号とすることにした。

ペルーの経済学は、フランス経済学の最良の3つの流れを汲んでいる。一つは、英米新古典派の定量的な分析にたいする社会の構造的分析の流れである。第二は、クルノーの数理経済学に発する数学の経済学への応用の流れである。そして第三は、サンシモンら初期社会主義者にはじまる理想主義的な経済学の流れである。

現代フランスを代表する経済学者は?と聞かれると私の頭にはすぐ何人かの親しい交遊関係をもつ人びとの顔が浮かんでくる。新古典派のアンリ・ギトン、未来論のジャン・フーラスチエ、人口学のアルフред・ソーヴィ、経済理論のマルシャル兄弟(ジャンとアンドレ)らの長老組から、未来論のジャック・ルスルヌ、さらにはミッテラン大統領の顧問クリスチャン・ソテールやジャック・アタリのような若手にいたるまで。しかしフランスの経済学の流れを総合的に表現する学者という、やはりペルーに指を屈したのものである。知的好奇心がさまざまな分野にわたり、つねに新しいものをとりこもうとするユニタリスト的社会科学者であること、厳密なデカルト的分析的手法を駆使すること、数学を用いてもそれが数学の遊戯に墮することなく人間と人間社会の本質を見きわめようとする姿勢をつらぬいていること、そしてその理論的影響力の大きさからいつて、ペルーはたんにフランスのみならず、当代一流の世界的経済学者として、自他ともに許していた。しかし、その理論体系はきわめて大きくフランス的香気につつまれていたといえることができる。

ペルーはもともとドイツの経済学者のシュンペーターの影響がつよい。大陸的な(英米普遍主義に対抗する意味での)経済学の伝統に立つ人である。1950年代にいち早く、応用経済科学研究所(Institut de Science Economie Appliquée-ISEA, 70年代に応用数理経済学研究所 Institut de Sciences Mathématiques et Economie Appliquée-ISMEAと改称)を設立し、雑誌“Economie Appliquée”“Economies et Sociétés”などを発刊し、かたわら高等学術研究院(Ecole Pratique des Hautes Etudes-EPHE)、次いでユレージュ・ド・フランスで教鞭をとり、ペルー学派を築いた。わたくしは1964~66年にEPHEで、ペルー教授のセミナーに出席したが、講義の題名は“今日のサンシモン主義-Le saint-simonisme d'aujourd'hui”で、集団的革新の思想と方法を論じたものであり(注)、そのときは講義の主題の重要性がよく理解できなかったが、68年の学生革命に遭遇するに及んで、はじめてサンシモン主義の思想的重要性に思い至り、教授の先見の明に舌を巻いたものだった。ペルー教授は耳が遠いので、いつも補聴器をつけておられた。学生の言うことにはあまり耳をかさず(じっさい聞こえないのかもしれない)、「耳の遠いのは大学者の条件ではなかろうか」などと悪童仲間と囁き合ったものである。

ペルーの経済学的な貢献は、さきに挙げた3つの流れの中でもとりわけ第一の、社会の構造的な把握の面に

堀川 士 良
(日本大学)

ある。すなわち彼は、たんなる国民総生産 (PNB) の増加としての経済成長 (croissance économique) から経済発展 (développement économique) を区分して、経済発展の条件をさぐった。経済発展は、経済成長のみならず自ら制度の交代を生み出すような精神的・社会的変化の総体である。資本主義的発展は、シュンペーターのいうような新結合 (innovations) と同時に、経済活動当事者間の支配-被支配 (dominant-domine) 関係、すなわち不平等性からも生じる。この関係が「権力」 (le pouvoir) 関係であり、ペルーは従来、「非経済的要因」とみなされてきた権力要因をも理論モデルにとり入れないかぎり、ケインズの「一般理論の一般化」、すなわち真の一般理論の構築は不可能だと主張した。

完全競争市場は、あらゆる経済主体間の支配的要因が排除された、いわば闘争のない世界である。だがじつは経済的世界は、不平等者同士の、支配者と被支配者間のさまざまな関係の総体にはかならない。ある支配経済は、企業間でも、国民経済間でも、支配効果をつうじて、自らの成長を保障する。この「支配経済の理論」 (théorie de domination) および、経済成長が、他単位から生産要素をうばってある極に集中されることにより実現すると考える「成長の極」 (pôle de croissance) 理論は、経済統合および低開発経済の理論に大きな影響を及ぼした。

すなわち、低開発経済とはたんに「遅れた」経済ではなく、むしろ先進経済の影響を受け、経済が「被支配化」「従属化 (dépendant)」され、経済諸部門が「非接合化 (inarticulé)」し、そして「不均衡化 (déséquilibre)」した独自の低開発メカニズムをそなえた経済なのである。ペルーの弟子たちの間からは、今日従属理論の代表者とされるエジプトのサミール・アミンやグルノーブル大学教授でアルジェリア経済計画の顧問をつとめたデスタンス・ド・ベルニスらが輩出した。

資本主義体制はこうして支配・不平等要因を内在した本質的に不安定な体制である。また、資本主義進展とともに、社会秩序を支える「非資本主義的」な制度、精神、つまり「名誉、喜び、愛情、他人の尊重」など人間生活における最も高貴な財が侵蝕され脅される傾向がある。国家はこのような不平等性、不安定性にたいして介入する傾向をつよめるが、それは官僚制を拡大させることになろう。それゆえ究極的には各人が自らの職業の場で創造的意欲と能力を発揮し、その効果が社会的に拡散し、一人一人の社会成員が進歩の過程に人間的意味づけ (signification) を与えていくような「調和的成長」の社会、すなわち、商品交換社会から「贈与」と「参加」を基礎とする社会への原理的転換が指向されなければならない。ペルーが「二〇世紀のサンシモン主義」とよぶこの人間集団の新たな再生の指向、これがフランス社会党の自主管理思想に息づいていることはいうまでもないことである。

こうしてペルーは、人間経済の目標として量の問題よりも質の問題を重視し、つねに人間を科学の中心にすえるフランス社会科学の最良の伝統の継承者、発展者として、大きな影響力を及ぼしてきた。

ペルー亡きあと、ISMEAの所長にはド・ベルニスが就任し、ペルー理論の新たな展開をはかろうとしている。また、「Economie Appliquée」 (tome XL, N°2, 1987) がペルーの遺稿を特集していることをつけ加えておきたい。本 BULLETIN では、この「Economie Appliquée」誌で公表されたペルーの貴重な自伝論文および著作目録を転載した。

その日、サクレ・クール教会のテラスから見降すパリの市街は、灰色の空の下で声もなく横たわっているかのように見えた。遠くセーヌ河の彼方に、パンテオンの優美なドームとパリ大学 I の屋根が望見できた。

ペルー教授の葬儀は、1987年6月5日、金曜日、午後4時、モンマルトルのサン・ピエール教会でおこなわれた。

Requiem eternam dona eis, Domine

主よ、魂の永遠の安らぎを彼らに与えたまえ

の歌声が薄暗い教会内に流れ、二百余の会葬者が故人の冥福を祈った。花束に埋もれた柩がなぜか小さく見えた。

教会の前庭で霊柩車の出発を待つ間に、隣に居合わせたアラブ人のエコノミストが興奮した口調で話していた。「今日のフランスが世界に誇れる経済学者は、ペルーとソーヴィの二人だけだ。それなのに会葬者がこんなに少ないのはどうしたことだ。ミッテラン大統領が来ても少しもおかしくない。まして友人のパールの姿が見えないのは理解に苦しむ。」同じような感想を抱いた人が少なからずいたのではないかと思われた。

わずか23歳で550頁を越す大著を出版したペルーは、おそらく現代のフランスで、もっとも多作で、もっとも特異な経済学者であったといえよう。

彼の膨大な著作の底に一貫して流れているのは、「吝嗇の経済」から「人間のための経済」への発展のヴィジョンである。「人間のための経済は、産業の従属的賃金労働者階級の圧力によってばかりでなく全民衆の圧力によって抑え難いものになった。この大きなうねりが侵食し、崩壊させる吝嗇の経済は、単に個人と企業の吝嗇の経済だけでなく、国家の吝嗇の経済でもある」。人間のための経済とは、「あらゆる物的・人的資源が経済的に完全に利用され、人間性の十分な開花のために必要な物質的条件を各人に与える」ような経済であり、その実現は、「富が存在しても、その富にわずらわされない人間同士の結びつきが可能であること、および富裕化の拘束と圧力にもかかわらず、人間社会が貧欲な人間性に対抗して真の繁栄を戦いとる能力をもつこと」を確信してはじめて可能なのである。「人間のための経済」は、商品社会を越えて、拘束と稀少性がともに根絶されるような最適社会のヴィジョンにつながるものでもある。したがってペルーの関心は、社会の純粋経済的側面に限定されず、独創的な経済理論を応用して、社会的・政治的側面にも分析の範囲を広げた。

このようなヴィジョンを持っていたペルーが、サン - シモン主義に興味を抱いても不思議ではない。『産業と集団創造』の中で、ペルーは「我々は多かれ少なかれサン - シモン主義者になっている」と述べ、サン - シモンと弟子たちは、歴史と科学に情熱を燃やした「前望的な思索家たち」であり、きわめて長い過去の延長線上で、また、それが正当化する諸計画の躍動の中で社会と経済を理解しようとする彼らの姿勢は、集団創造である産業化の意味を考えようとする時、現代でも実りあるものだとして高く評価する。「私の全生涯は、唯一の思想に要約される。それは、すべての人にもっとも自由な発展を保証することである」とサン - シモンはいった。彼と弟子たちによれば、人類は「精神の前進」を原理とする発展の中に巻き込まれており、精神の前進は歴史の活力であり、絶えず科学を前進させ、さらに激動状況の連続にもかかわらず、対他的な感情と人々の間の愛の力に、より多くの機会と効力を与えたのである。現代の経済思想は、発展、成長に注目し、拡散し、加速化する産業化に注目するから、サン - シモンの「発展」のテーマを現代的に再考することが必要であるとペルーは主張した。

ペルーがサン - シモン主義について語る時にみせたリリックで高揚した話法には、詩人クロードルの独特な

韻文を思わせるものがあったという。ピエール・ドルーアンが新聞によせて追悼文のタイトルは「経済学のロードエル」であった。

IEDES 留学時代、そして F.Perroux 教授のこと

千代浦 昌 道
(獨協大学)

1967年11月7日、冬の気配深まるパリの街。Censier-Daubentonの次のGobelinsでMairie d'Ivry行きのメトロを降りて、Bd, AragoをDenfert-Rochereauに向けて歩く。かなりの道のりを歩いた気がする。やっと見つけた右側の薄汚れた、それほど大きくない建物、これがあのIEDES(パリ大学経済社会発展研究所)かと何度も確かめてから中に入った。

建物の中にはかなりの数の学生がたむろして居たが、なにかちょっと落ち着かない、不思議な雰囲気が漂っていた。とにかく、入学手続きを済ませなければと、手近の学生に話かけて事務所の所在を聞いた。事務所の場所は分かったが、中にいるのはどうやら学生ばかりで、学校側の事務職の人間は一人もいないようであった。IEDESの建物は学生達に占領されていたのである。

その約一週間後に学生の占拠は解かれ、入学手続きを済ませたわたしは晴れてIEDESの第3過程の学生になった。学生の建物占領の原因はなんであったかといえば、当時のIEDES所長F.Perroux教授の専横的な研究所管理体制とカリキュラムの内容に対する不満であると聞かされた。しかし、とにかく初めてフランスの地を踏んで、右も左もよく分からず実用のフランス語の力も不十分なわたしには、IEDESの学生達から彼らの不満について十分な情報を得ることができなかったから、単に噂の程度に私の耳に入ったものをここに披露するに過ぎない。

第3課程の教育は、原則として総てゼミナール形式の120分授業で行われ、当時一週に最低10科目を選択しなければならなかった。第3課程の教育期間は、原則として1年間であるが、これを2年間に延長することができた。わたしのフランス政府からの給学費期間は1年間であったから、わたしは1年コースを選ばざるを得なかった。

科目の選択に当たっては、当時5つの主要コースが決められていて、学生はそこから一つのコースを選択し、それに沿った必修・選択科目の選択をしなければならなかった。5つのコースとは、次のようなものである。

- I Développement régional, aménagement du territoire
- II Techniques de planification et de programmation
- III Planification des ressources humaines
- IV Economie agricole et alimentaire
- V Economie industrielle et projets spécifiques d'investissements

わたしは、最後の《工業経済と特定投資プロジェクト》を選択した。このコースの必修科目は、次の6科目であった。

- 1) MM.L. Lebart et E. Achard 《Initiation aux techniques mathématiques》
- 2) M.B. Maldant 《Les modèles explicatifs de la croissance》

3) MM.R. Mercier et G. Matthys 《Méthodes modernes de programmation économique》

4) M.F. Rosenfeld 《Techniques d'analyse et d'évaluation des projets spécifiques d'investissements》

5) MM.P. Bourrières et M. Destribats 《Cas d'implantation d'industries en pays sous-développés》

6) M. Nguyen Huu Chau 《Les investissements dans les économies sous-développées》

いずれも、原則的には最初の数回は担当教授が科目内容の基準内容を講義し、その後は主要トピック別に学生をグループ分けし、トピック毎に研究成果の発表をさせるといった形を採るクラスが多かったが、中には担当教授の講義が一通り終ると、次には毎回科目テーマに関係する実務家を講師に連れてきて、違った話を聞かせるといった形式のクラスもあった。

MM.P. Bourrières et M. Destribatsのゼミでは、わたしたちのグループは《マダガスカルのセメント工業》に関する調査資料を渡され、この資料を検討して研究成果を報告することになった。このクラスに限らず、クラスでは教授や報告者への質問やら意見の発表は実に活発で、報告者よりもフロアの聴衆の演説会の様相を呈することさえあった。上述のコース分けて、このコースを選択した学生はだいたいいつも同じクラスに出席することになる。一クラスの聴講者数が30人位であったが、この内約半数がアフリカ・中近東の出身者、4分の1が旧仏領を中心とするアジア人、残り4分の1がフランス人とその他ヨーロッパ人というだいたい色分けであった。ちなみに、当時IEDESに在籍していた日本人学生はわたし一人で、それよりもちょっと以前に在籍していた日本人は西川潤という方だと事務所で知らされた。とにかく、講義や報告が終るや否や一斉に挙手が起こるのだが、その頻度が一番多かったのはアフリカ・中近東グループであった。かれらは、一度指名されるや中には20分以上もの大演説をぶつ者がいて驚いたが、それをまた教師も学生もとにかく根気よく耳を傾けている態度にも、一種の爽やかさを覚えたものである。

わたしの出席したゼミの中で、学生達に一番人気のあったのはベトナム人のNguyen Hun Chau教授の《低開発経済における投資》ゼミであった。実は、わたしも、授業が開始以前に既にChau先生を論文指導教授に決めて、書類を提出していた。ゼミのテーマが、わたしにとっては最も興味を引くものであったし、アジア人の先生という親近感からでもあった。Chau先生のゼミは、ほとんど先生の講義の形で行われたが、大変力の籠った、しかも分かりやすい講義であった。先生が演壇から降りて学生の座席の一つに座って話をされると、学生達は先生を取り囲むような形で講義に聴き入っていた。しかし、フランス人の教授達の話は概して、特に第三世界からの学生達の関心を引かなかったという印象を受けた。教師の話に面と向かって反論する学生がいたし、授業の後で学生達が集まって「あの教師の考え方は怪しからん」と息巻いていることもあった。特に中近東・北アフリカの学生にその傾向が強かったように思う。一度、授業であるフランス人教授が、アフリカ人学生に向かって、「日本も、百年前には貴君達の国と同じ状態だったのに今は先進国に近付きつつある」と言ったときには、わたしもなにか反論しようと思ったが、なにかから言ったらいいのかまとまらずに結局なにも言わなかった。

一週10科目ゼミの外に、Cité Universitaireで第1課程と第2課程の学生のために設けられていた《体育講義と実技》を随意に選択できた。単にもう一つ、特に第3課程の学生は補習授業として研究所所長のF.Perroux教授のCollege de France並びにEcole Pratique des Hautes Etudesにおける授業にできるだけ出席するという学校からの要請が出ていた。場所はどちらもCollège de Franceの大教室で、前者の科目名は《La promotion sociale》、後者《L'informatique et ses conséquences économiques et sociales》という最先端の内容のものであった。

わたしは、最初の数回出席したが、その際にはPerroux先生は実際には講義をされず、ご自分の教え子の若い教授が実際の講義をした。しかしPerroux先生は、講師の紹介をされてから演壇の前に置かれた机に横向きに座られて、講義中はメモを取られたり時々学生のほうをにこにこ笑いながら眺められたりしておられた。学生の質問には、自ら答えられることもあった。わたしは、フランスに着いたばかりの語学力のハンディキャップの上に内容がごく専門的であり、さらにわたしの滞仏目的の学問とはそれほどの関連がないものと判断し、そ

の後は出席しなかった。というのは表向きでの理由で、実はこれらのPerroux先生の授業はどちらも夕方5時45分からで、昼間の授業で疲れている上に腹が空いてしまい、おまけに講義の終わる頃には大学食堂が終ってしまう恐れがあったからである。留学中はあまり金がなかったから、Perroux教授の講義のために大学食堂の安い夕食を犠牲にするわけにはいけないと思ったからである。いま考えると、せめて半分かくらいの夕飯を犠牲にしてもPerroux先生の警咳に接しておけばよかったなどと悔やんでいる。少なくとも、この紙面でもう少しアカデミックな内容の思い出話を披露できたものと思う。

もう一つわたしにとって不幸なことは、前述のように、わたしがIEDESに初めて登校したとき、学生は所長のPerroux教授の研究所管理体制への不満からストライキをしていたことや、逆に教授連は講義の中で必ず、それもなにか皇帝陛下の御言葉を引用するような態度でPerroux教授の学説や用語の定義などを引用するところがあって、かえってわたしの心中にPerroux先生へのある種の反撥あるいは好ましくない先入観を植え付けてしまっていたようである。その結果、わたしはIEDESに留学するという貴重な機会を得ながら、その所長のF.Perroux教授の薫陶を受けることなく過ごしてしまった。

その後、翌年の1968年3月には、パリ大学ナンテール分校での学生ストライキから発して、遂には5月のゼネストへと、フランス全土を揺るがす戦後最大の政治変革期を迎えるに到ったのである。しかし、わたしにとっては、この騒ぎは既に前年のIEDESの学生ストライキから始まっていたのであり、《5月危機》はその延長線上の出来事に過ぎなかった。大方の学生達や労働者達の表面的な不満は、勿論ドゴール大統領の政治体制に向けられたものであったが、実際は、ドゴール体制が象徴するすべての権威主義的なものあるいは権力そのものに、ひとびとの批判は向けられていたのである。IEDESの学生ストはまさに、その歴史的イベントである《5月危機》の前哨戦であり、F.Perroux所長そのものの当面の攻撃目標であったのである。あの事件さえなかったら、わたしはフランスでもっと素直な気持ちでPerroux先生の警咳に接し、薫陶を受ける機会に恵まれたかもしれない。Perroux教授の亡くなられた現在、悔やむこと頻りである。

経済発展とペルー

勝 俣 誠
(明治学院大学)

今から6年以上も前のことだが、筆者は西アフリカに2年弱研究のために滞在する機会があった。研究上、所属した機関はダカール大学という西アフリカのフランス語系諸大学の中で最も伝統のあるものであった。

このアフリカ滞在の最大の目的は、世界の中で最も生産力が遅れているこの大陸に数年でも滞在することによって、そこの人々の政治の営みとその風景を見たり、感じたりすることによって、そもそも貧困とは何か、そして、経済学は貧困に対して何ができるのかを考えてみることであった。

当然ながら、こうした大胆な問は、今だ駆け出しの研究者である筆者にとって、手に負えそうにないものであったが、他方では、決して避けて通れない問に思えた。

帰国前後に筆者の中に漠然とした輪郭を持ちながらも、着実に感じ始めていた貧困についてのパラダイムは、主として次の2点であった。

- 1) 貧困の解消には経済成長が必要である。
- 2) しかし、その成長の中身とその実現の仕方は、それに住む当事者が選択していく。

ただ、こうした考えに至るのに、ダカール大学の経済学科との交流よりも、キャンパスの周辺ないし外部での体験が多くの示唆をもたらしてくれたことは特記されねばならない。

同学科の研究と教育の中心は、第1のパラダイムに基づいていたものの、第2の疑問が正面から取り組まれることはまずなかった。同僚の研究の雰囲気は、欧米の経済理論をいかに理解するかにも多大な努力が払われて、西アフリカ経済の蓄積のメカニズムの特質や制約条件を追求するという関心が必ずしも優先されていなかった。

このアフリカの現実を欧米が欧米のために使って来た眼鏡を通して観察するという研究・教育の他律性は、同学科はもとより、同大学における社会科学の使命が国家の開発行政を担う官吏の養成に重点を置き、その教育の一端が旧宗主国フランスからの派遣教員によって担われてきたという歴史的経緯に大きく依存していると思われる。

外部からの教員は、自分の得た知識を伝えることによって、アフリカ人の同僚は、やはり援助政策による旧宗主国での留学制度によって得た資格によって昇進し、アフリカ人学生は、彼等に教えられる課目を修了することによって高級官吏への道を準備するといったように、経済学が、キャンパスの外で展開する土くさいアフリカの現実と隔たったまま、一つの確立した制度として再生産されていくのである。

そこで、第二の間である。成長の中身とその方法は、自分達の学ぶ経済学では、分析に先立ち与えられる自明のものとして、アフリカという地域の現実の中で、再検討される余地はほとんどなくなってしまうのである。

以上は、筆者のささやかな西アフリカ滞在中に感じた、経済学において貧困とは何かという問に対する知的状況の印象であるが、ペルー教授こそは、この制度化された経済学から常に一定の距離を保ち、貧困のパラダイムという面倒な問を最後まで考え続けた数少ない経済学者であると思われる。

筆者はフランス留学時の今から14年も前、パリの世界不況に関する国際シンポジウムの会場で1回だけお会いし、その後、当時本として出版されていなかった数多くの論文の抜き刷りを送って下さった思い出しかない。そかしそれらの書を通して接することのできた教授の存在は、経済発展を第三世界と呼ばれる地域のコンテキストで考えている筆者にとって、多大なものであり続けている。

経済発展に関する分析の中で、ペルー教授が与えてくれた最も大きな功績は、分析の中心に、常に人間を総体として置くことがいかに大切かということを教えてくれていることである。

「人間を全体として経済分析の中に組み込む」とは何か。

この種の間でただちに予想される反論は、主として新古典派経済学に立つ側からのもので、経済学は反証可能な、計量・操作しうる諸概念から成り立つゆえに、科学としての地位を得ているのであって、ホモ・エコノミクスは、現実の人間そのものでないが、現実に近い姿として表わされた取り決めとして確定する以外に、理論構築は不可能である、というものであろう。

しかし、教授の書では（たとえば、L'économie du XXe siècle, 1969, Pouvoir et économie, 1972）、その反論を決して無視しているのではなく、経済現象とその表わし方 (représentation) その間の緊張関係の中に身を置くことによって、常に現実には耐える分析用具を鍛えなければならないという配慮が強く読み取れる。教授の創設した応用経済研究所が後に数学応用経済研究所と名を変え、数学で開発された技法を経済現象のより忠実な描写に生かそうとしたのは、この理由によるのである。

さて、経済発展における人間の位置とは実に遠大なテーマであるが、今日まで筆者が理解した教授の視点の特質が最もまとまって現われていると思われる“Pour une philosophie du nouveau développement, 1981年”を通して、2点のみに限定して記しておこう。

第一は、ペルー教授が経済発展の分析で登場させる人間は、時間の拡がりを持った (date ないし écoulement du temps irreversible) 人間であるということである。新古典派では、人間は市場において瞬間的に達成される均衡の中で受身の対応しか見せられない一経済主体にすぎないと考えられてきたが、教授にあっては、人間は、対立と協調が織りなす過去を生きてきた歴史的人間であり、この人間の生む労働とともに列挙され

る資本においても、時間的に形成されたききたものとして、人間の意思決定が大きく作用しているとしている。

この経済発展における歴史的人間像の回復は、低開発国といわれる地域において、経済の発展を決して単に労働と資本の最適な組み合わせからだけでなく、企画し、参加する人間の進歩という側面を強調した意味で、重要である。たとえば、貧困が今だ単に生産の予定としてしか把握されないとしたら、戦後、欧米を風靡した経済成長理論がなぜ他の地域で成功しなかったかの反省の次元にとどまるだけだが、貧困は、それを担う人間が物を作れない状態と定義するならば、経済発展が教育という長時間を要する投資を伴う人間形成の問題であり、また生産活動の参加は、当事者が体化した過去の刻印を理解することなしには実現しにくいという文化の問題となって立ち現われてくる。

第二は、経済発展の分析を空間という概念から接近することによって、通常純粋理論が設定する類似して、かつ同等の諸個人が介入する同質的空間たる市場を想定する代わりに、歴史的に形成され、力関係によって構造化された場を提示していることである。教授にとって、市場とは、何よりも、それを内包する社会と組織なくして存在し得ない概念であった (il n'y a pas marché sans société, sans organisation, p.59)。

したがって、市場はこれらの側面によって大きな制約を受けており、価格と量によって達成される均衡の場とするには余りに非現実的想定であるということになる。すでに教授は、1960年、Economie et société - contrainte, échange et don, で、日本では、岡山教授の手によって邦訳・紹介されているが、その中では、市場現象以外に、社会には、強制、贈与といった行為が存在し、経済活動に影響を与えていることを指摘していた。

もっとも、市場が必ず均衡に向かうという確信に基づいた新古典派に対する批判は、教授以外にも、1983年に亡くなったJ・ロビンソン女史などの経済学者からもなされて来ている。ロビンソン女史は、需給関係が敏感に作用する数少ない局面の一つとして、西アフリカのカカオ豆を引用しているが、それとて、均衡に向かう保証は全くないと述べている (季刊現代経済、第10号、1973年)。この点に関し、ココア豆の世界最大の生産国のコートディボワールを中心として、西アフリカの経済学者には、アビジャン学派と呼ばれる新古典派のアプローチのみで経済発展を考えようと統計資料の不足を嘆きながら、数式モデル作りに汲々としているグループが存在しているのは皮肉である。

さて経済発展を考える上で、こうした空間概念を設定することは、従来、必ずしも説明し得なかった低開発地域における多国籍企業の行動といった国民経済という空間をまたがる経済主体の解明、また市場というルールでなく、市場のあり方を決めるルールにおける力関係を分析することによって、生産物が社会的にどのように不平等に帰属していくかという分配メカニズムの考察に、きわめて重要な鍵を与えてくれている。

この他、ペルー教授が経済発展を考える上で有益な示唆を与えてくれているものとして、経済における希少性の定義、発展プロセスにおける不平等の存在と、それゆえ生まれる進歩へのダイナミズムなど枚挙のいとまがなく、その深い洞察力は筆者の理解不足を照らしてくれている。

実際、ペルー教授ほど、経済学に登場させる人間を、単に市場の前に孤独に対峙する経済主体としてでなく、制約の前には、団結することを知り、また自から変化し、創造していく能力を有するという多次元の側面から、描写することに腐心し、社会における経済の意味を生涯を通して問い続けた経済学者は少ない。経済発展の分析においても、いかにこの人間の可能性を、窒息させる代わりに、開花させるパラダイムを踏まえた理論を模索していくかは、研究者に残された重要な課題であろう。

ペルーにおける異質性の概念

清水和巳 (早稲田大学)

フランソワ・ペルーの経済学は驚くべき豊饒さを含んでいるが、それは混乱という言葉とは相容れない。彼の経済学は常に変容する「現在」を様々な側面から対象とし、その都度新たな分析を提示する。しかし、そこには厳然たる一貫性が存在するのである。つまり、ペルーの経済学にはその内部を貫く何本かの基軸が存在し、それらの基軸を中心にして広範囲にわたる柔軟な分析、洞察が展開されるのである。そのような基軸の一本として、「ワルラスーパレート的一般均衡理論の一般化」が挙げられるだろう。ただし、この「一般化 (généralisation)」はモデルの変数の数を増やしたり、モデルに付加的な方程式を加えるに留まる単なる拡大ではない。それはワルラスーパレート的一般均衡理論の着想を借りてはいるが、次元を異にする新たな一般均衡理論構築の試みと解釈すべきである。この「一般化」の持つ意味をペルーにおける「異質性 (hétérogénéité)」という概念を通して明らかにしていきたい。

この「異質性」という概念の基礎には次のような社会認識が存在する。

「ある時点、ある社会状態における人間の特定な活動領域に目を向けると、その領域で活動している人間集合は『能動的 (actifs)』 - 『非能動的 (non-actifs)』な部分集合から成立していることがわかる。能動的な集合は非能動的な集合の行動に影響を与えたり、それを変化させたりすることができる。このような部分集合の活動の一定の範囲、型、様式を定義することによって『社会的』異質性の最も重要な側面を明らかにすることができるであろう。」 (『二十世紀の経済』)

注意すべきなのは、「異質性」という概念があらゆる活動領域において質的に異なった集合、個人が存在するという状態記述にとどまっていないということである。この概念は「能動的」な個人、集合が「非能動的な」個人、集合に不可逆的 (irréversible) かつ非対称的 (asymétrique) な「権力」 (pouvoirs) を常に行使するという行為の側面をも含んでいるのである (もちろん、「非能動的な」個人、集合から「能動的な」個人、集合に及ぼされる反作用が存在しないわけではない。ただ、そのような反作用は、行使される「権力」と比して非常に微弱で取るに足らないと考えられている)。経済領域に限って言うならば、そのような「権力」とは、ある経済主体が行う意思決定に好むと好まざるとにかかわらず、何らかの形で、不可避的に外から介入してくる性質の力と定義できよう。では、実際に「異質性」を有する経済主体は何であり、そしてその主体が行使する「権力」は現実においてどのような様式をとるのであるだろうか。ペルーは「異質性」を有する経済主体として次の三つを挙げている。

a) ミクロ的単位 (les unités simples)

b) マクロ的単位 (les macro-unités)

c) 国家 (la macro-unité publique spécifique qu'est l'État.)

a) には個々の企業や企業者などが含まれる。b) には異種、同種問わず企業集合や労働団体などが含まれるであろう。c) は国家に代表されるような公的なマクロ的単位である。

そして行使される権力は四つに分類される。

- 1) 影響 (l'influence)
 - 2) リーダーシップ (les leaderships)
 - 3) 部分的支配 (la domination partielle)
 - 4) 全体的支配 (la domination totale)
- 1) 影響

Aの行動が少なくとも表面的には強制という形を取らずに、Bの意思決定を変化させる場合、そこには「影響」が働いたと言われる。例えば、Aによって、Bの情報領域に導入される付加的な情報が挙げられよう。(その情報が正しいか否かあるいは、意図的に流されたか否かは問われない。)具体的に言うなら、供給の打切り、信用手段の撤回といった脅迫や、逆に、契約を遂行した際に約束される付加的な報酬といった情報がBに与えられ、Bはその情報を考慮して自らの意思決定を変化させるのである。その他にも、消費におけるデモンストレーション効果や外部経済が個々の経済単位に及ぼす効果も「影響」に含まれよう。

2) リーダーシップ

Aの提示する価格、供給する数量、あるいは、操作するその他の経済的変数が、収益を上げるという意味で適切であり、そのことをBが知っている場合、BはAの示す価格方針や数量決定に追随する。このような場合、AはBに「リーダーシップ」を及ぼしている、と言われる。注意しなければならないのは、この関係ではAがBの価格や数量を直接に決定するのではないということである。

3) 部分的支配

ある経済的単位、B、C、Dの決定事項の中に含まれる価格、数量、その他の経済的変数の一部分を、意思決定の中心である経済単位Aが決定する場合に「部分的支配」が成されていると言われる。B、C、DはAによって支配されている部分以外については、自由に決定を下すことができる。卸売り商と小売り商、あるいは、大企業とその下請け企業の間ではよく知られている関係である。また、公的部門が民間部門に対して、価格凍結政策を施行する場合も「部分的支配」に含まれよう。

4) 全体的支配

AがBの価格、数量などを全部、決定してしまう場合に「全体的支配」が存在すると言われる。この状態の極限においては、唯一かつ絶対的な意思決定主体Aが存在するわけだが、我々がよく見掛ける状態はそれに至る以前の段階である。例えば、同一産業内に少数の大企業と無数の小企業が併存している場合が挙げられよう。あるいは、石油ショック時のOPECは、石油価格、数量について「全体的支配」を行っていたと言えるだろう。「全体的支配」が成立している場合には、支配する側の持つ技術的、経済的競争力、信用・資金調達手段の多様性、大規模販売組織などによって、「支配」される側の従属化が進んでいる。

上記の1、2と3、4では、行使される「権力」の質だけではなく、行使される方法も異なっていることに留意しよう。1、2では、Aの行動はBの経済行動を、少なくとも表面上は、直接的に統御する意思を持たない。言わば、AはBの意思決定の条件に参与するだけなのである。それに対して、3、4では、AはBの意思決定を直接に変化させ、支配する意図を持ち、それを実行するのである。

このような「異質性」(より説明的には「異質性-権力」)を基礎にして再定式化された一般均衡理論はワルラス-パレート的一般均衡理論とは本質的に異なる。ワルラス-パレート的一般均衡理論が想定する経済の構成要素となるのは同質的かつ「匿名的」なホモ・エコノミクスであり、経済世界はその単なる総和である。それに対して、ペルーの想定する経済を構成するのは上記のような「権力」を行使する「異質的」な経済主体であり、そのような経済主体がイエラルシー的に構造化された全体として経済が捉えられる。このような経済における均衡とワルラス-パレートの均衡=「物の一般的均衡(l'équilibre général des choses)」とを、もはや同類項でくくることはできない。ペルー的経済世界における均衡は経済諸力が釣り合うことによって得られる静止状態ではなく、「異質的」な経済主体が各々に行使する「権力」のせめぎ合いからある種のパターンの自己組織化が生じている状態なのである。つまり、彼が指摘する「経済主体の諸活動の一般的均衡化(l'équilibrage général des activités)」が成立している状態である。しかも、ペルー的経済世界における均衡は最終的な到達点ではなく単なる通過点にすぎない。経済主体の行使する「権力」が一時的に平衡している状態=ペルー的均衡を永続させる要因が経済にア・プリオリに内包されているわけではないからである。このような均衡概念の特質は、ペルーが決定論的なニュートン力学からではなく「ゆらぎ」を重視するプリゴジン熱力学から影響を受け、熱力学とのアナロジーを用いながら経済構造について語っていることから理解されよう(時間の不可逆性についてもペルーとプリゴジンは共通した認識を持っている)。

以上の議論からも解るように、「異質性」の概念を中心にして展開される彼の一般均衡理論はワルラス-パレート的一般均衡理論と異なり、絶え間なく構造的に変化する資本主義経済の動態をその分析対象としているのである。また、彼の一般均衡理論が、優れて人間解放的なヴィジョンを含んでいる「普遍化された経済(l'économie généralisée)」を論じる前提となっていることは看過できないが、この点に関しての議論は別の機会に譲りたい。

一経済学者の遍歴—彼はいかなる道を選んだか？

フランソワ・ペルー
清水和巳訳

「経済学修業の第一幕は？」と問われれば、「1934年のウィーンだ。」と答えたい。私は彼の地にロックフェラー給費生として、若い妻と一緒に赴いたのである。しかし、そのように答えることはフランスにおける何人かの師の恩を忘れていることになるだろう。

リヨン大学では、ルネ・ゴナールが経済学説史の講座で個性溢れる授業を行っていた。彼は独自の物の見方を先行者達に関する鋭い分析に結び付けることによって授業に類稀な光彩を添えていたのである。このような彼の名声にだけではなく、私はその他の面に対しても彼に変わらぬ感謝の念を抱いている。即ち、ゴナールは全く若年の私を自分の息子のように扱い、自分がいかなる学問的目標を持ち、どのように努力するのかを示した。このことに対する感謝の念はとても言葉では表せないほどである。

エチエンヌ・アントネーリはフランスの中でも例外的に、レオン・ワルラスの数理経済学と社会学的枠組みに興味を持っていた。彼は純粋経済学と豊饒さを失っていなかった社会経済学をつきあわせるという試みにいち早く着手したのである。

フランスの一流の数学者の一人であるM.エイローは相対性理論にも興味を持っていて、彼ののおかげで、私は彼が主宰していた財政学研究所で教鞭を取ることができた。パリで活動を始めずっと前に(1937-38年頃)、私は偉大な師、アルベール・アフトリオンと学問上の交際を始めていた(彼は後に私の親友となったのである)。

従って、私は抽象的で厳密な形での一般均衡理論に非常に早くから触れることができ、ウィーン学派の洗練された言い回しに対応する用意もできていたのである。

遍歴とその収穫
ある排斥処分で大学から離れていたルードヴィッヒ・フォン・ミーゼスのゼミナールでは、研究が盛んに行われていた。商工会議所の一環として行われた集会にはミーゼスの著作に魅かれ彼の講義に聞き入る様々な国の聴衆が集まった。ベルジェ・リーゼ夫人は、有名な利子の諸根拠、生産資本と金融資本、利子率と賃金率の関係についての繊細な議論を展開していた(彼女はその議論に関して、並ぶもののいない中心的人物であった)。哲学者、歴史家、科学哲学者、そして高級官吏が有名なウィーン学派の人々の諸体系を用心深く批判した。フリードリッヒ・フォン・ハイエク、ヨゼフ・シュンペーター、ミーゼス、リート・フォン・ハバラー、フリッツ・マハルプはもうウィーンにはおらず、ミーゼスの周りにはR.フォン・シュトリューゲルと異端児、オスカー・モルゲンシュテルンが残っていた。モルゲンシュテルンはすでに高等数学を駆使し、経済の見通し(Wirtschaftsprognose)に注意を払い、限界効用とそこから導きだされる一般的解釈については用心深く対処していた。思い出す度に尊敬の念を払う人物としては、ジュピターのようなブロンズの

髭をたくわえていたハンス・マイヤーが挙げられるだろう。彼の教えは評価に値するものであったが、彼は羚羊を狩るのに夢中で、経済学者としてはより低い地位に甘んじていたようだった。

オトマール・シュパンは複雑で奥深い個性の人だった。その個性は、そもそもヴァラルシェが手がけたような長く精力的な研究に値するだろう。シュパンは社会学、哲学に通じ、当時、支配的であった知実証主義とは全く異なった普遍主義(Universalismus)を唱えていた。彼は情熱を持って、社会形成と経済の諸関係についての研究を深めていたのである。彼は災厄をもたらしていた国家社会主義の誘惑には決して屈しなかった。シュパンはカトリック信者として育ち、古ドイツ的な理想主義とロマンチックさを受け継いでいたので、精神的に国家社会主義とは異なった世界に属していた。彼はウィーンの自由主義から激しく攻撃され孤立に悩んでいたが、一度として彼に向けられたことのなかった好意的な注目を受けてしかるべき人物であつたろう。国家社会主義がウィーンに広まった時、国家社会主義者達は彼を強制収容所に送り込んだ。そこで彼は厳しい生活を強いられ、とうとう視力を失ったのである。彼の生涯と業績は尊敬に足りるものだ。

本物の経済思想を持つ人々が一般均衡理論の研究に取りかかったのは当然のことといえる。ウィーン学派は多くの点でローザンヌ学派とは異なった精神風土の中で、自分達の一般均衡理論を構築しようとしていた。ウィーン学派は正しくも物の運動の停止と経済主体の意思決定とを彼ら独自の方法によって区別していた。経済主体が互いに競合することによって需要と供給が一致するのである。しかし、経済主体(Wirtschaftssubjekt)と主観的効用学派(Grenznutzenlehre)から出発している点では、ウィーン学派はローザンヌ学派と異なっているわけではなかった。

真の税制(Echattaxenn)と現実の税制の隔たりを巡って混沌とした議論が起こり、それがまた新たな研究の萌芽ともなった(問題は繊細に議論され、それがまた豊かな結果を生み出したことを付け加えておこう)。また、このことはいわゆる「正常」利潤の厳密かつ有意義な定義に関する活発な議論の端緒を開いた(たとえ一般にはそうは言われなくても、私はそのように考える)。私はミーゼスと我々共通の友人ヒュー・ゲイツケルによる討論を思い出す。ゲイツケルは将来、大蔵大臣になるべき人で、我々と並んで、高等経済学の講義を丁寧に行っていた。

ミーゼスは労働供給が需要を上回るや否や失業が不可避免的に起こると断じ、子だくさんの家庭が不均衡やそれを埋め合わせる理論的必然性の原因となるとして非難した。このようなミーゼスに対して、労働党の将来の指導者は利潤に帰属する部分から埋め合わせの分を引き出しうるとしてミーゼスに反論した。不完全競争、独占的競争の分析が大いに花開く前に、この種の議論は十分に進んでいたのである。「どうしようもないではないか。彼は社会主義者の道を選んでいるのだ。」とミーゼスはうわべだけの寛容さをもって語った(この寛容さが誠実なものであったかどうかについては、非難が全く無かったわけではなかった)。しかし、真実はもっと複雑だったのである。

ウィーンで学んだのは、ドイツ歴史学派と激しく対立していた「飾りけのない」経済学だけではなく、繊細で普遍的で高度な文化についての講義を受けることもできた。またこの時代は、ジグムント・フロイトの講義を受けることができた時代でもあった。彼の精神分析研究が授業中に熱狂を呼び起こした最初の時代だったのである。同時に有名な都市史研究家、ドプシュの話聞くこともできた。そして、皇帝の宮殿、シュテファン大聖堂、フォーティフ教会、文化史博物館の豪華な一室から発せられるきめ細かいメッセージを楽しんだ後に、刈り入れと収穫の美しい一日をオペラハウスでロッテ・レーマンの歌うフィデリオを聞いて締めくくることが時にできたのである。

ミーゼスの弟子達が開いてくれた祝宴を忘れるものは誰一人いないであろう。そこでフェリックス・カウフマンはセミナー創設時からあるリートの一節をいろいろな言葉で歌ってくれた。彼は記憶力が抜群な上に美しい声を持っていた。(*1)

「君はベルリンに向かい、ウェルナー・ゾンバルトに会いに行きなさい。彼はまた社会主義について定義を作り上げていて、これで十個めだ。」これは、ミーゼスが私を送った時の言葉である。そして、私が『近世資本主義』の著者、ゾンバルトに初めて会ったとき彼は次のように言った。「ウィーンから来たのなら、あなたは私の論敵、ミーゼスを知っているだろう。」

ドイツでは、正直なところ拾い上げる価値のあるものは殆ど無かった。H.フォン・シュタッケルベルクとエーリッヒ・シュナイダーが世に出たのはもっと後だった。財政学と一般経済学に関する最も良い講義を行い、ドイツ語表現においてヨーロッパ風の高い文化の香りを漂わせていたのは、私の旧友、フリッツ・ノイマルクだった。私はまた、政治哲学の根本に関するカール・シュミットの労作に興味を持った。後に私は彼の真の誠実さを知り彼を友とするようになる。そのきっかけは、彼が私の学生の一人を勇敢にもナチス警察の毒牙から救いだしてくれたことだった。

ローマでの滞在がいかに実りの多いものであったことか。私はそこでルイジ・アマロンから幾つか教えを受け、卓越した数学者、統計学者、社会学者、経済学者であるコラド・ジニと親しくなり、そして、ウーゴ・パピ、ジョバンニ・デマリア、後にはジュゼッペ・パロンバと終生変わらぬ友情を結んだのである。私はアルベルト・ドゥ・ステファニもレロ・ガンジェミも忘れることができない。私は財政の特殊な問題に関して彼らの研究に興味を持ったのである。我々三人はデ・ヴィチ・デ・マルコを賞賛している点についても共通していた。

マフェオ・パンタレオーニ、パローネ、彼らの主要な弟子達の思想に共鳴したこと、分析的な枠組みと方法論的考察が得られたことは容易に察せられよう。これらの分析的枠組みや方法論的考察はそこから恩恵を受けた者の上に痕跡を残している。とりわけ、彼らに従順に与し過ぎなかった者の上に。

私と妻がアメリカ行きの準備を整えていたとき、戦争が勃発した。ロレーヌでの「演習」と占領時の様々な騒動は抽象的な経済学と殆ど関係がなかった。ともかく教授しなければ

ならなかった。この機会に『価値』に関する本(*2)を書く準備として、オーストリア学派の均衡理論をもう一度取り上げ、ソルボンヌ高等研究院のセミナーでオーストリア学派の均衡理論とグンナー・ミュルダール、クヌート・ヴィクセル、レオン・ワルラスのそれとを体系的に比較した。

そして、応用経済研究所が1944年にフランスレジスタンスの協力によって設立された。厳しい時代背景にもかかわらず、この研究所を擁護してくれたうちの一人が栄光に輝いていたJ.M.ケインズ卿その人である。我々はこの研究所でアメリカ人のサンダース博士とパブロフの弟子でもあるソビエトの高名な生物学者、セルジュ・チャホーティンと共に働いた。ピエール・ウリと私は将来のことを考えながら、ケインズとホワイトの計画に関する詳細な研究に取りかかった。私はフランソワ・ディヴィジアとルネ・ロウと一緒に応用数理経済学の研究グループを設立した。このグループには、モーリス・アレ、G.デュブルデュー、ジャック・ドゥモンティエ、G.ルトファラらが参加し、活況を呈した。

フランスが解放された時には、ルネ・プレヴァンからイギリスの国民会計を研究せよとの要請を受けた。そして、私と何人かの研究所のメンバー達はリパティ型貨物船に乗り込んだのである。

こうしてついに、我々は苛酷な何年間の間待ち焦がれていた人々と会うことができ、喜びを新にすることになった。

オックスフォードでは、トーマス・バロー、ポール・ストリーテン、ブルクハルト、スタインドルが我々を遇してくれた。マンチェスターから遠くはないケンブリッジでは、ジョン・ヒックス卿とウルシュラ・ヒックス夫妻が我々のために居心地の良い自分達の屋敷を提供してくれ、ジョーン・ロビンソンと共に歓待してくれた。ロンドンでは、リチャード・ストーンと一緒に仕事をした。大いなる試練から抜け出たばかりの輝かしい偉大な国の至る所で、我々はイギリスの思想と再び相見えたのである。

ロンドンスクール、諸大学都市、パリの我々の研究所の間の関係が緊密になり、そのような環境の下で、ロイ・ハロッド卿、ヒックス卿、ジョーン・ロビンソン、フリードリッヒ・フォン・ハイエク（以上、ロンドンスクールの教授）、デニス・ロバートソン卿や他の多くの研究者達がパリを訪れ、最新の研究を発表したのである。

ハーバード大学のエドワード・チェンバリンがオックスフォード大学のM.カレツキに引き続き、我々のもとを初めて訪れた。その後、彼は応用経済研究所の常連となり終生我々に協力してくれたのである。私が1947年にハーバードで二つの講義をするために招聘されたのは、彼とヨゼフ・シュンペーターの友情によるものである（シュンペーターの業績に関して私は一冊の本を書いている）。彼らの友情を始点として、私は長期に渡る自分独自の研究、そして彼らが啓発してくれた研究を推進することができたのである。

まず最初の研究として経済空間の問題を取り上げ、根本的と思われる三つの概念を提示した。その三つとは、構造化された空間(espace-structure)、極化された空間(espace-polarisé)、計画対象の空間(espace-plan)という概念である。そして、私はマクロ的単位

(macro-unités)、マクロ的意思決定(macro-décisions)という概念を重視した。即ち、初期の考察の中には、未だ萌芽の状態ではあるが、構成要素としての単位とヒエラルキー化された諸部分集合という概念が含まれていたのである。この研究を進めるに当たっては、リタヴァ・センターでW.レオンチェフ、ワルター・アイサード、ガーシェンクロンと出会い、マサチューセッツ工科大学でポール・サムエルソンと出会ったことが重要な意味を持っていた(サムエルソンはH.O.モデルの代数的表現を数理応用研究所に発表したところであった)。

我々は皆、J.H.ケインズのマクロ経済学の中に、初期段階に留まっていたものの経済学における幾つかの進歩があることを知っていた。このマクロ経済学は徐々に、集計的全体の解体と中間経済学(la mésoéconomie)構築の方向へと適用され、数量化され、進展して行ったのである。

経済理論の中に非対称性を導入することは、完全競争における静学的均衡を越える視点を導入し、一般的相互依存関係を理解する方向へと、経済の見方を根本的に変化させることになる。

道筋の選択

『ルーヴァン経済学研究』(*3)の中に、最近、私の研究(*4)に関する報告があった。この論文は私の仕事で現代科学の動向と一致して、経済生活に関する一般的な概念を提起しており、「新古典派的なヴィジョン」と全く異なっていると評価している。この論文は不均衡分析などが含まれていると指摘している。この概念の中に、時間の不可逆性、時間の階梯、蓋然的経済諸空間、変化する構造化。私が研究の道筋を選択する際には、実際、「過去における平穏な確信」(*5)を犠牲にする大きな変化が必要であった。私が提示した個々の概念、モデル、定理は「あらゆる学派の研究者を刺激し、機械論的モデルを超越することを促した。」(*6)これらの概念、モデル、定理は主要な直感から生まれ、一般的相互依存理論の刷新の試みを告げるものだった。(*7)で試みたが、この試みは『能動的諸単位と新しい数学——一般均衡理論の再検討』はコレージュ・ドゥ・フランスにおける私の20年間(1955-75)の研究対象であった。

部分的アプローチから全体的相互依存関係分析への進展

1947年のバリオル・カレッジでの講義「支配の経済理論概説」において、私は主として、アメリカが世界貿易に及ぼす非対称的效果について考察した。また、私はこの分析手法は一企業や経済的部分集合体にも本質的には同様に当てはまることを注意深く指摘した。私は非対称性を三つのパラメーターに関係付けた。即ち、次元(la dimension)、行動の性質(la nature des activités)、交渉能力(la pouvoir de négociation)というパラメーターである。そして、私は上の指摘を変えなかった。というのは、世界の状況が変化し、

そこでのこれらパラメーターの存在条件や影響力の状態が大きく変わったにせよ、このことによってこれらパラメーターが持つ分析上の意義は消え去らなかったからである。

「支配」という言葉はかなり左翼的であり少し説明不足である。この言葉はある単位的意思決定が他の単位的意思決定に全面的に代わるという印象を与える。これはまさに分析の興味が失われる場合である。何故なら、研究者は唯一かつ同一の単位に直面することになるからだ。私は「支配」と「帝国主義」間の基本的な区別を強調しようとしたが、徒勞に終わった。帝国主義という用語の持つ混乱を避けるために新しい用語を選んだのだが、この言葉を用いることによって帝国主義理論を受け入れるかのような印象を与えることになった。a)影響(influence)、b)支配状態(dominance)、c)部分的支配(domination partielle)の間に最初から正確な区別が成されてはいたが、混乱しないように何度もはっきりと説明することが必要だった。それ以来、トポロジーによる表現やグラフを利用して、非対称性を定式化しようという試みが数多く成された。

国外とフランスにおいて一般均衡に関する研究を進める中で、私は余りに軽視されてきた二つの考え方をわがものとし、繰り返してきた。一つはヴィルフレド・パレートについてである。彼の偉業を讃える記念会の時に私は「具体的なものを目前にしながらも、そこに到達できない。」と語った。もう一つは、オスカー・モルゲンシュテルンについてである。我々は彼に多くのものを負っているにもかかわらず、彼は非常に不当にしか扱われてこなかった。これは「ワルラスから現実に至る道はない。」という先入観の仕業なのだ。

数学的体系における決定と観察可能なシステムにおける<決定>とがどれほど乖離しているかを測る工夫が必要となる。また、ある先験的な理論が邪魔をして、有名な諸定理(均衡解の存在、一意性、安定性、最適性に関する諸定理)が互いに働き、現実的な活動を説明するための条件を整える—このとき、現実には単純化されるにせよ、決して破壊されない—ことができない場合に、その障害を明らかにすることが必要となる。

それ以来、批判的で根本的な直感が私の頭から離れず、私は同一の仮説によって明らかにされる特別な研究に携わるようになった。この仮説の中には次のような概念が含まれる。即ち、経済主体間のあらゆる関係を構成する紛争(conflits-coopérations)—協業、闘争—協同(luttes-concours)、マクロ的単位あるいは複合的単位、諸経済空間、影響、支配状態、牽引効果、労働と変化(革新)への実証的な性向、牽引の極(地域的に限定されたあるいは限定されていない発展の極)、主導企業と主導地域などである。これら全ての概念は多くの観察事実と熱心に照合されてきたのだが、いまでは、様々な形態の非対称性の概念を、個々の条件のもとで体系的に追及していく中から導かれたものであったと考えてよいだろう。同じ研究を通じて、私はまた、分配理論の分野でも、一つには次々と支配的となった社会的諸機能の歴史を考え、また他方では、議論対象となる所得の分析を第一次的分配と再分配(この名称が適当とは思えないが)の水準の説明に用いることになった。

一般的相互依存理論の刷新はこれら特殊な研究の中で熟してきた。そのことに関しては、『能動的主体と新しい数学』の中で最初の説明がなされた。私は誰よりも、「しなければ

ならないこと」は何かを理解して、それにできる限り打ち込んできた。しかし、私が今まで言ってきたことから次のことが理解できるだろう。即ち、私の研究を単なる批判に過ぎないとする意見、私が透徹した視点を持っていると全体的な論理もなしに褒める評判、論争を挑むように私の立場が操作的ではないとする断言、これらを私が全く受け入れないということだ。操作的でないものとは創始者達の持った繊細さや細心の注意を忘れた標準的な均衡論であり、これこそが操作的という名に値しない。というのは、そのような均衡論は現実の経済主体とその活動を単純化という口実の下に破壊しているからである。それが現行の教科書の中で批判を受けずに通用しようとして、数量モデルの中に自らの脆弱性を隠していようと、その事情は変わらない。しかも、その数量モデル（マクロ的であろうと中間経済的であろうと）においては、厳密に解釈された標準的な均衡とは相容れない構造化されたブロック、部分ブロックが取り扱われているのだ。

時間の制約を越えた均衡から変化エネルギーが時間を経過して枯渇する状態へ

ワルラスーパレート的な標準的均衡論は、どのような形態をとるにせよ、同じ顔をしたミクロ的要素をその対象とする。それらの要素は完全競争の同質的な世界において、十分に「微小」で多数であるから、いかなる要素も価格体系の帰結に反対したり、自分達を取り巻く事物、主体を改変することはできない。そして、ラグランジュの数学がこの世界に古典力学から借用され、その色彩による統一性を与える。そのような均衡論の前提と結果に対して強力な批判が起こり、広まったのである。

自分の周りの環境を変化させるエネルギーを持ってはいるものの、物理的障害に邪魔をされてか、定められた目的（満足）に到達したからか、あるいは対立者の反対に直面したか、そのいずれかの理由によって一時的にその機能を停止している主体から研究を始める場合、それは最新の研究の流れに逆らっているわけではない。主体は自分が直接に支配できる財、サービスについて決定を行い（意思決定の空間）、そして自らの諸活動空間（売買、投資、情報収集）について計画を立て、これらの空間を実現するのである。

これらの諸空間は柔軟性を持ち、極限状況においては一定期間の間、一時的な均衡を決定しうる。全体はトポロジーによる形式化に依存する。この考え方はG.ドゥブルー、K.J.アローによる形式化の延長上に位置する。この方法は諸空間の内容を豊富にしながら、現在、通用している独占モデル、差別的競争のモデル（R.トリフィン）、「協調的」あるいは好戦的寡占モデル、経済・金融グループのモデルを革新している。この方法では、イエラルシー的に配置された諸部分集合という概念が認められている。

この方法は次の二つの点から見て、ある意味でA.クルノーへの回帰とも考えられる。第一に、この方法は全ての経済活動において、選択の自由、力関係という構成要素を考慮に入れる。第二に、この方法はクルノー自身の言葉を借りれば、完全競争下における諸価格とは全く別の経路を通じて「全体を形成する」部分間の諸関係（構造化された諸部分集合（*10））というイメージを喚起する。一般的な諸システムが教えるところにしたがって、

各部分、すなわち構造化された各々の部分集合はある次元を有し、諸関係の網の中である位置を占め、作用・逆作用の生じる場を構築する。

イエラルシー的に階層化された諸部分によって形成された全体＝経済空間という概念は、一般均衡理論に対して決定的な影響を及ぼす。

例えば、ある構造を有し特定の行動をする少数の巨大単位（A）と、同様にある構造を有し特定の行動をする多数の小単位（a）が交換関係を結んでいるとしよう。そして、最初に財の加工に携わる者から最終消費者に至るまで、Aとaとが垂直的梯型構造の中に配置されているとしよう。Aはaに制約を課することが出来る。また、Aが共通に満足を得るに留まったり、損失を恐れて寡占的闘争を止めることもある。この場合にaやあるいはその一部が非常に不満足感を味わいえよう。構造の原理からして、寡占的銀行、金融グループ、大企業の集団はある期間、小単位や個人に非対称的な行為を及ぼすことができる。それは、需要・供給の集中化、ある場合には情報の内部流通、技術優越性を通じて行われる。国際関係の分野においては、対外貿易が高度に集中化していることから考えて、次のような挑発的な質問を投げ掛けることができる。「国際貿易とは大企業間での取り引きなのか、＜国民＞間での取り引きなのか。」この場合、＜国民＞とは即ち、小単位と個人からなる総体を意味する。この＜国民＞の行動は相対費用・相対価格に依存し、そして、開放経済における全ての経済原理が依存する代替定理はそのような＜国民＞の行動によってのみ正当化されるのである。

構造化された経済地域間の非対称的諸関係の例証は、他の場合においても多く見受けられる。そして、それらは一様的(uniforme)ではなく一般的な(générale)新しい相互依存関係モデルに統合されるのである。（「一般」とは、全体に関わるということの意味する。「一様」とは同質的な経済空間のあらゆる場における、等しく可逆的な関係によって表される。）

これまで語ってきたことから、虚構としての均衡と観察可能な状況に関する二つの均衡とを明らかに対比することができる。

虚構としての均衡は繰り返し言ってきたように、「観察可能な状態」では全くない。それは「読解のための格子」であり、「目印付きの透かし絵」なのだ。それを通して、経済活動を見るわけである。この「格子」、「透かし絵」を用いると、経済のミクロ的水準、中間的水準、マクロ的水準において、あらゆる供給量と需要量が一致する価格（均衡点）の存在、一意性、安定性、最適性に注意が向けられることになる。この場合、「格子の形状、透かし絵の目印の選択によっては、経済生活のまさに本質である活動（経済主体の行動）が隠されてしまわないか。」という疑問は全く解決されずに残る。経済主体は記憶と計画を持ち、互いに異なり、当該期間においてどのような働きをするかに関しても不均等なのである。

観察可能なものと構成されるもの、即ち次の両者間の根底、本質に関して対立は根本的である。

1. 物の一般的均衡 (E_c)

2. 行動の一般的均衡化 (E_A)

E_c においては、財は物理的諸力と同一視される価格体系の中立的諸力に応じて移動する。完全競争における極大化定理からして、運動の停止は時間、空間に関係なく特別な状態と考えられる。そのような停止点に到達するには、主体はあたかも「主体ではないような」もの、つまり、受動的なシンボルとなっていなければならない。需要量と供給量とがくある一つ>の価格において一致すること、この条件が満たされると運動が停止する。そのような価格を想定することは、それが対応する空間の完全な同質性を想定したり、それが前提とする主体の非活動性を想定することと同様に不可能である。 E_c は物の運動の停止であり、物理的現象に固有な機構を借用することによって表現される。

E_A においては、変化をもたらすエネルギーの担い手である経済主体はその次元、構造において様々な統一性を備えており、色々な活動を引き起こす（その活動が互いに両立可能な性質なのかどうかは場合による）。構造化された諸部分の連関が形成する全体においては、互いに異なる不均等な諸主体が会うことによって均衡化作用、つまり非常に現実的なく試行錯誤による出会い>が生みだされる（このく出会い>は有名なワルラス型のく出会い>の対極に位置する）。

諸均衡が成立するにはまず第一に、諸構造が相互に両立することが前提となる。ある価格体系の下での需要と供給の均等化は、経済諸主体の活動間の衝突を考慮にいれないならば、それ自体では何ら経済的な意味を持たない。システム変化のエネルギーの状態、相互の満足度の水準・強度の状態を明確に分析することができる。 E_A はシステム変化のエネルギーが近似的に0に等しい状態なのである（ $d\Phi \approx 0$ ）。この議論の構造は熱力学の方法論から借り受けていて、トポロジーによる形式化に依拠している。 E_A においては、不確実性、リスク、摩擦、情報は物に固有な属性ではなく、人間とその活動に内在的なものであるということが明らかになるだろう。従って、経済思想がまことしやかに「自己規定」するために「物象化された」人間が引き起こす物の運動を記述するに留まるなら、経済思想は頓挫してしまう。

E_A は厳密な意味で E_c の一般化ではない。つまり、 E_A は経済主体の活動の均衡化（均衡化とは均衡させる働きを意味している）であり、対象の機械的な均衡とは本質的に異なる。そして、その均衡化は不可逆的な時間の中で行われる。 E_A が「包括的」であると言われるに値するのは次の二点に関してである。第一に、 E_A は標準的均衡が成立するのに必要な変数（主体の情報）を超えた変数を含んでいること、第二に、 E_A は均衡化、調整（régulations）といった種類の関係を想定していること、この二点である。

変化させるエネルギーの枯渇状態から動態化された状態(dynamisation)へこのシステムが厳密かつ統一的な動態として把握されるのは、活動の均衡化（ E_A ）を

通じてである。

これには、一つの決定的な理由がある。即ち、人間、経済主体から生じる全ての経済的動態(dynamisme)は次のような性質を持つ。経済的動態は経済活動が衝突することによって高められ、不可逆的な時間を通じて展開される。また、経済的動態は人間存在との関連においてのみ有効な強度、性質を維持し、場合によってはそれらを獲得する。

成長に関する膨大な統計資料的研究の功績は十分に強調するに値する。これらの研究によって、集合体と部分集合体との間に、あるいは数量的諸関係を通じて因果的に関連していると想定される諸変数のブロックや部分ブロックの間に整合性があることが解った。この分析は全く分析的な数量ではない不十分な資料や寄せ集めの統計から始められたために、前もって非常に拘束的な限界を持っていた。その限界には、十年ごとの移動平均値を用いるという事情や、逆説的にもコブ・ダグラス型の関数やその収獲一定の仮定を採用するという事情も加わった。近代工業化以降の経済変遷を記述することがこの分析の目的であるにもかかわらずである。

同時に、成長から均衡へと至る過程を対象とする細かく精緻化されたモデルも幾つか存在した。しかし、そのモデルの構成者や有能な解釈者達が指摘するように、そのモデルが静態論から得た結果に付け加えるものは殆どなかった。

それ故、ここ三十年の研究は「古典派」の先駆者達、つまり重農主義者、チュルゴー、アダム・スミス、その直接の後継者達による重要かつ豊かな内容を持つ大規模な動態論と際立った対比をなしている。「古典派」は活動（つまり人間及び社会的集団による作用）に基づく長期的な経済変化を分析し豊饒な結果を残した。彼らは紛争-協業という関係、あるいは闘争-協同という両義的な関係の中で活動を捉えたのである。

数量化された集合体間の関係についてのあらゆる研究を動態という枠組みの中に位置付けることは、このような尊敬すべき伝統と再び手を結ぶということである。また、この動態という枠組みの中で「経済的なもの(économique)」は社会制度との関連を見出しうる。人口、技術、ゲームの規則は価格と数量の関係に還元し得ない。それらを当初は外生的な要因と見なしてよいだろう。しかし、次の段階ではそれらの変数グループを全体のく経済的な機能を表す方程式体系の中に内生化、あるいは付加する手段を見つけださなければならない。

この機能に関する典型的なモデルでは、原動力となる部分集合とそれによって影響を受ける部分集合とが関係づけられる。例えば、成長率や後者の構造変化は原動力となる部分集合に含まれる諸変数の関数となる。指導的企業、牽引産業、牽引地域に関して個別的なモデルを作るためには、明らかに対象の構造的把握、特性の明確化が必要となるだろう。

(*11)

経済変化は観察可能な現実と突き合わされつつ、このような方法によって研究される。その方法は発展期における循環と趨勢を再検討し、循環的な景気後退と構造的恐慌が区別され、経済動態は社会的グループのダイナミズムに関係づけられる。

特定の数学が適切な定式化（例えば、リャプノフの安定性、ルネ・トムのカタストロフ理論、組織に関わる連続的なゲームのモデル）を行うことによって経済動態論の刷新を支えている。

従って、静学を越えた把握を行うことにより、能動的諸単位の均衡化と、刷新された動態における移動均衡（moving equilibrium）の分析を、一つの分析的な枠組みの中で統合するという展望が開かれる。

動態化から調整へ

考察の対象である経済総体においては、意思決定者は彼ら自身が帰属する単純あるいは複雑な単位の構造を維持し、その価値を高める。その際、彼らは調整や部分的均衡化という手段を用いながら、互いに衝突・協業という関係に入り込んでいくのである。このような状況の下では、外生的な偶発因を別にすると、構造と機能は結果として準安定性を有するようになるだろう。様々な水準におけるこの準安定性の程度は、諸主体の持つ情報、その活動に依存する。

公益という観点から全体的調整を行おうとするいわゆる公的な諸単位の活動を持たないような巨大な経済的全体＝「国家」は、これまで歴史上に存在したことがなかった。この調整がどのようなものかを考えてみよう。この調整は、それぞれ合目的性も時間的視野も、手段すらも持たない諸活動が絶えずぶつかり合うものと理解されるべきもので、何らかの事物、集合財、または後見を及ぼす財（meritorious goods）として理解されるべきものではない。

一方で、純粋な市場法則の下で完全に孤立した＜私的＞主体もなければ、他方で散発的、継続的な介入にのみ没頭する公的主体も存在しない。市場は社会形態をとり、そこで市場は機能する。また、市場は変化する社会的構造を有し、生産、消費、分配の全体的な構造はその社会構造に依存する。これら社会的構造の変容は比較的ゆっくりであり、協業・紛争の中で、社会的諸集団の組織間の駆け引きの中で、その変容は生起する。また、社会集団は自らの利益を最大にし、自分達に有利なように社会的ゲームの規則を変えようとする。上の議論から、自由競争を前提とした静態から演繹された厚生経済学が脆弱性を有することが解るだろう。消費者余剰やパレートの補償はそれらが完全競争を前提とし、静態と本質的に結び付いている点で不適切なのである。

アーサー・セシル・ピグーは、全体生産量成長率の極大化、~~労働力の縮小、所得分配の平等化という三つの有名な経済政策~~、~~しかし、これらが歴史的経験に良く耐~~
~~いう項目が追加される~~、~~この条件においては、循環と構造的恐慌を区別すべきで~~
~~ある。三番目に限るならば、経済的に正当化されない不公平さを減少させるという~~
~~考え方の中に、公正さをどんな場合にも重視するという考え方よりも明らかに意味のある~~
~~視点が残っているのなら、重要なのは社会的に最適な不公平さが何であるかを研究するこ~~

とである。

問題なのは社会形態それ自体である。不公平さが是正され人々に受け入れられるほど小さくなるには、階層化された社会集団が社会的に地位を向上していくダイナミズムが必要なのだ。そのためには、まず調和がとれ契約を重んじる経済が前提となる。そのような経済には、社会的に組織化された行為者達（acteurs）に対する十分な経済的情報及び経済的訓練が必要だろう。

このような観点を採ることによって始めて、次の二点が重要になる。一方では、商品を生産する活動、強制的な課税徴収、連帯による移転の三つの流れをどう組み合わせるかということである。他方では、個々の下位社会集団に帰すべき余剰、損失を評価しながら、真に集団的な経済計算を行うことである。

私の周りには、指針となった先駆者や研究の友として並びなき人々がいた。その人達に負う大きな恩義に私は感謝の意を表し得ただろうか。手短な文章ではあったが、自分の選んだ道が妥当であったことを少なくとも示すことができただろうか。

確信はできないものの、そうであることを願う。12頁に半世紀にわたる研究を要約することは困難であるが、好意的に読んで頂いた読者に対してはもっとうまく説明できたのではないかと内心忸怩たる思いである。

少なくとも次のような証言をすることができたのではないだろうか。つまり、諸科学によって徐々に体系化され、確かめられ、精緻化されてきた経済的知の総体、つまり科学的意志に基づいた経済学の提起するものとそれから得られてきたものから考えて、経済学は全生涯を賭するに足るものだと言うことを。

注

〔*1〕彼の歌声が今でも耳に響く。

「一人のフランス人がウィーンで道に迷うと

色々、ことは起こっても

残るのは魅惑的な思い出ばかり

気高い庭園、素晴らしい宮殿、形と線の贈り物

そして、時の恵み・・・

ーウィーン学派は修業中の人も騎士のように仕立てあげる

＜そんなことが考えられるか？＞という問題提起、

そして、先験的方法の魅力」

〔*2〕La valeur, P.U.F., Paris, 1943.

〔*3〕Recherches économiques de Louvain, vol.44, 1978, no.4.

〔*4〕Press Universitaire de Grenoble, 1978.

〔*5〕Recherches économiques de Louvain, cité.

〔*6〕「」, cité.

〔*7〕Dunod, Paris, 4^e trimestre 1975.この本では、「二十世紀の経済」(L'Économie du XX^e siècle, 3^e éd., P.U.F., Paris, 1969)の中で定義された諸概念の定式化が試みられている。

〔*8〕Cf. Transnational Corporations and World Order, Reading in International Political Economy, Ed. par George Modelski, W.H. Freeman et Co., S. Francisco, 1979, pp.135-154.

〔*9〕数学的には極めて不完全にしか表現されていない。

〔*10〕部分 (les parties) とは要素 (les éléments) ではない。

Le progrès économique, Économies et Sociétés, I.S.M.E.A., Paris, 1967, et Prise de vue sur la croissance de l'économie française, 1820-1914, I.A.R.I.W., Londres, 1956.

フランソワ・ペルーの「構造」概念に関する一考察

竹内 佐和子

はじめに

「豊かな国と貧しい国の対立は、今日その国の内部の社会階層間の敵対関係や分配をめぐる体制論議を目立たない位置に追いやってしまう。これがF.ペルーの30年来の信条である」(1)とダニエル・デュフル(Daniel Dufourt)はF.ペルーの著作「独占と国家の対話、Dialogue des Monopoles et des nations」の序文で記している。

F.ペルーが「構造」(2)という概念を用いて経済理論を再構成しようとした試みは、アンドレ・マルシャルと共に既に1930年代から始まった。この試みは、社会的支配の現実を理論的に明らかにするための分析用具を主流派の経済学は備えていないという認識から出発した。その後、この試みはフランスにおける構造主義思想の形成とあいまって、理論的により豊かな分析の視点をわれわれに提示してくれる。(3)

この試みは、第1に成長の条件ではなく発展の条件をさぐることで、第2に構造変化をもたらしうる経済主体の条件とその影響力を明らかにすること、第3に人的資源の開発の可能性の場を確保すること、という3つの目的を軸にして展開された。

本稿では、まず「構造」概念の導入の必要性から入って、構造的な均衡状態の意味を問い、さらに大企業の決定空間と国際経済の関わりをどうとらえるか、という順序でペルー理論の最近の展開を跡づけてみたいと思う。

1. 「構造」概念による成長・発展の意味の再検討

「構造」概念の経済分析への応用というテーマは、ペルーのいくつかの著作の中で展開されている。中でも、先進国経済の分析と資本主義の発展に焦点を合わせた「新しい発展の哲学に向けて、Pour une Philosophie du Nouveau Développement. 1981」(5)、さらに数学を基礎にして構造分析の精緻化を目指した「活動単位と新しい数学、Unités Actives et Mathématiques Nouvelles. 1975」等は特筆すべきものであろう。

以下、これらの著作に基づいてF.ペルーにおける構造概念の発展の経緯を考察してみたい。

1) 成長概念の再構築

主流派経済学は、経済成長を国民総生産によって表された国民経済の規模の増大で表し、また経済成長は一国全体の物質的満足を表わす大きさであると考えた。そのため経済政策の目標が成長率に還元されることになりがちである(7)。この様な成長概念の構築方法に対してペルーは次の様な批判点を提示する。

第1に、測定手段が不適切であること、第2に、成長モデルの構築が非現実的であること、第3に、従来の成長概念に基づく政策が不合理であることの3点である(8)。これらの点については、まず成長は均整のとれたものではなく、ある国の内部で等しく分布しているわけではないこと、また市場価格による国民総生産の評価は財の社会的必要性を正しく反映していないことを指摘する。つまり、先進国では寡占市場が支配的であり、市場価格は財の生産コストとは直結していないし、他方発展途上国ではインフォーマルセクターが存在したり、貨幣経済の局地化などにより、価格制度は意味をなしていない。さらに、世界企業の海外での活動、成長の代価としての自然資源の破壊、途上国における人的資源の未開発部分を評価対象にどのように組み入れるかといった問題も残されている。

以上を総合すると、成長の指標を再構築する必要性が明確となる。この再構築の作業は、「あらゆる成長は構

「**変化のなかで生じる**」という命題から出発しなければならない。サイモン・クズネッツはこれまでの成長についての探求は「**経験的にもまた分析的にも前提の粗雑な発見の集合したにすぎない**」と述べ、成長と経済構造の適切な評価を得るにはあまりにも脆い部分を残していると反省している。特に均衡成長を実現する為のフローの適応過程を予測するための分析の基礎は十分ではないといえる。その意味では、所得や投資の部門的分析といった中間項を通じて、活動主体の能力に関わる分析を導入しなければならないだろう。この分析の構造化を実現するために、ペルーは経済発展の条件をさぐることから始めた。

2) 発展概念の再構築

「経済発展とは、実質総生産の持続的累積の増大をもたらすような精神的社会的変化の結びつきである」⁽¹⁰⁾とペルーは定義する。つまり、発展は、財やサービス、情報や記号（メッセージ）の移転を通じて、人間が人間に対してもろもろの影響を及ぼしていくことを前提としている。

このことは経済的局面では、3つの水準で把握される。第1段階は経済体系の下位集合（部門、産業、地域、企業等）間でさまざまなネットワークができる段階である。このフローのネットワークができ上がる過程で活動主体（L'Agent）は一定の大きさと場を持つに至る。

第2段階は、諸部分（諸部門）が互いに作用、反作用を繰り返すようになる段階で、この過程では調整（Régulation）が必要となる。活動主体は、1つの活動単位（Unité active—集合体—）としてさまざまな決定空間（L'Espace de décision）をもつようになる。同時にこの段階では活動主体が属する社会集団や社会構造とも密接な関連をもつこととなる。

第3段階は、人と組織（機構）の関係の変化が生じる段階で、ペルーが最も力を注いでいる人的資源の開発問題へとつながっていく。人的資源は構造が変化する中で、活動の機会を手に入れる。より複雑化する社会構造の中ではきわめて洗練された知的資源を持つ能力ある活動主体の存在が必要となる。この局面では、機構に人間が引きづられたり、逆に人間が組織や機構を作り出していく過程が累積過程として生じる。ただし、この過程は経済体系の、ある一部分に閉塞する可能性も残されている。

以上のような経済活動の段階的認識が国民経済の分析には必要であり、こういった重層的な視点から長期的な構造変化の可能性を探っていく作業が、発展の分析には是非とも必要であろう。したがって発展の研究は構造変化の過程を探ると同時に、人間の能力を探っていくという2重の意味を持った研究といえることができる。

2. 「総括的均衡」の意味と「再構造化」

総括的均衡（L'équilibre global）という考え方は「人間の計画は、人間がほとんど締め出されている機械的均衡に勝っている」⁽¹²⁾という一節に集約的に表現されている。総括的均衡という概念は一般均衡という概念に対置して用いられる概念である。両者とも経済体系における秩序のあり方を問題としているが、一般均衡論では競争価格が経済主体に押し付けられる一つの秩序として示されるのに対して、総括的均衡では活動主体（単位）が競争価格の束縛を乗り越えて計画的調整によって実現する一つの秩序が示される。つまり、均衡は活動の結果成立するものであって、それ自体は安定性や最適性といった価値基準からは切り離されたものである。この均衡の概念は現実の経済活動におけるグループ及び組織の分析を射程内に導く。

情報概念が組織内部の構成や組織間の問題を説明するために導入され、また環境に順応するよりはむしろ環境を変える人間の能力を示すためにエネルギー概念が導入された。発展とは情報とシンボルの交換による人間に対する人間の諸活動を前提とすると考えるペルーにとって、情報の流れと発展構造とはきわめて密接な関係をもっている。例えば情報網が交換網を調整するような局面は多くみられる。サイバネティクスにおける情報は、信号やメッセージの伝達や段階的処理の能力を示すが、経済学においては純粋市場の分析外と

されてきた組織やグループの機能を分析に組み入れることを可能にする。

エネルギー概念は、人間集団の高水準のエネルギーが構造破壊（エントロピー）と再構造化（ネゲントロピー）の中で発揮されていることに着目しているものであり、これらの2つの概念は、数学的には集合理論とベクトルによる空間理論を用いて説明される。

以上の分析用具を使って、ペルーが構築する均衡の理論的構成を示すと次のようになる。

1) 活動単位の決定空間と均衡化

活動単位は、販売、投資、情報について、ある程度の決定空間（あるいは活動空間、L'Espace des opérations）を持つ。この空間の大きさはあらかじめ設定された収益目標、事業計画などによって示され、数学的にはベクトルの長さで決まる空間によって描写される。この空間は相互に不均等である。この空間の拡大は、物理的、経済的障害やパートナーの反対で停止するまで続き、均衡化（L'Equilibrage）へ向かう。例えば、生産独占では雇用量と生産物の価格決定を通じて活動空間が拡大するが、拡張の限界は、消費者需要の飽和点か、あるいは労働者の同盟によって与えられる。また組織間で相互に拡張計画が両立しない場合には、決定者が一定情報を基にして規模の均衡圏を予測する。規模の異なる組織体間では、大規模経済単位が価格の引き上げ及び引き下げによる総合的な効果を小規模単位に及ぼし、この場面では影響の不均整が明白に観察される。この均衡化の過程は、いわゆる「純粋な主体性（選好）」に基づく均衡とはかけ離れている。

均衡化の過程で、活動単位間の関係は一定の期間変化せず固定化する傾向がある。このことが構造化の1つの局面である。この局面では個人や小規模企業は受身とならざるえず状況は束縛的となる。全体の経済システムの運動の低下は、システム内の変更エネルギーをゼロに近い状態に導き、固定化する。しかし、構造の可塑性はゼロではなく中長期的な変化がもたらされる可能性が残される⁽¹⁴⁾。

2) 総括的均衡の動学化

総括的均衡は、システムと構造の概念と密接な関連を持っている。システムとは、ゲームのルールに対応し、構造は特定の時間と空間における要素間のバランスの中で相対的に不変な関係で示される。動態的な総括的均衡は、静態的な均衡が長期的に再構造化のプロセスを経て成立するものである。

動態的な総括的均衡という考え方の基礎には、「均衡の継起は大規模経済単位の計画が不完全に実現される結果であり、効用の釣り合い（つまり期待の水準とその結果に対する満足度）と巨大企業間の力関係により形成される」という分析の視点がある。この過程では大規模単位と小規模単位の関係の変化が生じるが、部門間の結合の多様性ゆえに、大規模経済単位の決定可能空間はそれぞれ質的に異なり、この異質性は対外的には貿易収支に不均等な影響をもたらす。

均衡成長をめぐる動学化はケインジアンモデルを基礎として、市場機構が均衡成長を実現する傾向を持っていることを前提にして精緻化が進められてきた。ペルーによる均衡成長の動学化は、第1にイノベーション過程における公共部門の位置付けと、第2にグループ間の利害衝突を抑える意識的調整過程の2つの軸を中心に展開される。イノベーションの概念についてはシュンペーターからの影響が強いものの、その特徴づけについてはかなり意見を異にしている。

シュンペーターは、資本主義のエンジンを一群の企業家に置いたが、企業家の機能は公共（管理）部門の活動により侵食され、公共部門の影響が増大していくと見ていた。ペルーは、国家と大企業が組織化される過程で組織のイノベーションが生じ、資本主義のエンジンの推進力が生まれると予測している。したがって、均衡の動態化は、国家機能と企業機能が結合しながら再編成、つまり再構造化される過程を通じてもたらされると考える。

この理論を基にして2番目の軸、意識的調整の考え方が展開される。意識的調整とは、経済政策のあり方を問題にしている。厚生経済学やパレートの補償原理から引き出される経済政策は競争原理を前提にしているため

に、社会的異質性や組織されたグループ間の衝突を考慮に入れることができない。ペルーのいう経済政策は調和ある発展（調和のとれたではない）を実現するために、市場を誘導し、弾力的計画、指導棒、調停などによって市場のゲームのルールを意識的に調整していくことを指す。したがって国家の活動はきわめて効果的であると判断する。しかしそれは国家が企業に勝るコントロール力を持っているという意味ではなく、基本的には国家と企業の組織的連合体から生じるパワーに焦点を合わせているのである⁽⁵⁾。このパワーは国内ばかりでなく、海外に波及していくときにより明確な形をとる。

3. 「構造化」過程の国際的局面

1) 巨大企業の管理空間の対外的拡張

以上の流れに沿って、国際経済への総括的均衡の応用にまで論を進めてみよう。この部分の構成は主にペルーが3年前に書いた日本の大企業と国際貿易に関する討論用メモ (*La grande firme, sa croissance et ses conséquences intérieures et extérieures*) に依拠している。

大企業は内部的にも外部的にもきわめて複合的な組織体であり、内部的支配力と外部的支配力をもっている。内部的には情報の上下の流れから生じる階層性に基づく支配力が形成され、外部的には、例えば、生産の地理的集中や海外移転などにより、環境変化に対応できる能力と環境を変える能力とが形成される。これらの力は「構造化する力、あるいは構造を破壊する力、*pouvoir structurant ou destrutturant*」として発揮される。

この場合、大企業が望む構造化は、国民や政府が望む構造化とは必ずしも一致しない。この不一致から生じる緊張関係を経て形成される両者の協力関係をペルーは国家的レベルの外部性 (*L'externalité nationale*) と呼んでいる。そしてこの関係を国際貿易に適用することは従来の貿易理論からの離脱を意味する。

この分析の延長線上で世界貿易を見てみると、世界経済は組織化された巨大な経済単位によって作られる空間から構成されているように思われる。この局面では政治的境界内に限定された国家空間は相対的意味しか持っていない。特に日本の企業の生産空間、投資空間、情報空間は、国家空間とはきわめて異なっている。世界的規模での貿易の相互依存性は、単に商品やサービスの貿易の結果ではなく、経済構造や広義の国民経済のメカニズム（例、公的部門と民間部門の結び付き）の結合によって形成されつつある。より突っ込んだ言い方をすれば、国際貿易は活動単位（巨大企業や企業グループ）間の取引から成っているともいえる。その意味では国境に基づく貿易の地理的シェアは第2次の意味しかもっていない。しかしここでは国家の意向と企業の活動の方向性とが錯綜する。

さらに次の段階では活動単位の拡大は、他の活動単位とのあつれきという形をとる。そして、拡張過程は技術水準が相対的に劣る、ないしは発展水準が相対的に低い圏域に向かう傾向がある。その結果、活動単位は経済空間あるいは領土的空間で非対称的な作用を及ぼし、商品、投資、情報の流れにより、誘引効果を引き起こす。この関連の研究は発展の極の研究として周知のところであるが、この概念はペルーの言わんとする総括的均衡の応用であることはあまり理解されていない。この研究の要点は、大規模民間経済単位の組織、あるいは強大なグループが商品、投資、情報の流れを規制することは他国の構造支配につながる点にある。南北関係も世界の発展圏 (*zone de développement*) の動向に依存し、この結果生まれる「秩序」は経済単位、特に巨大企業間の効果的で、効率的な競争に依存するだろう。

終わりに

以上、F.ペルーが提起した構造概念を用いて、現代経済の新しい分析方法についての紹介を行ってきたが、この分析視角を用いて現応用数学経済研究所所長のジェラード・デスタン・ベルニス (*Gerard Destanne de*

Bernes) は20世紀後半の危機の説明を行っている。ベルニスはペルーが資本主義の歴史的分析に基づく一般理論を提示しようとしたとの認識に立って、「独占と国家の対話」のあとがきで、次のようにペルー理論を再構成している。

第1に、ペルーの基本概念は動態的である。活動単位は構造に影響を及ぼし、異なる支配力から生じる牽引効果を及ぼす。

第2に、構造は2重の歴史的意味をもっている。比較的安定した不変量により構成される構造は、歴史の産物であり、また古い構造を一定の周期で変える諸力の連続的相互作用の産物でもある。それらの力は古い構造を破壊するのではなく、それを再構成しながら (*restructurant*)、新しい世界に結合させることによって構造を変形する。また新しい世界の中では古い構造にも新しい役割が与えられる。

第3に、ペルーの分析は諸々の構造が「構造化」した国家の分析にあてはまる。国民生産システムの経済空間は政治的境界によって限定されるものではない。国内では生産システムの強化を目指して生産設備の蓄積が行われる。大規模経済単位は中小規模の経済単位間の競争の効力を減じ、自らの膨張を図る。しかし資本所有者の利潤率拡大は勤労者の利益と衝突し、生産装置の拡大の諸条件は維持されなくなる。その結果活動単位は遅かれ早かれ生産過程を断絶せざるをえないであろう。これが危機である。この危機の間のシステムの延命はこれらの矛盾のいずれかを解決することによって保障されるであろう。調整 (*régulation*) はあるところまでしか有効でない。システムの変形は断絶が生じる臨界点に達する。このシステムの不安定性が資本主義の理解に必要である。「発展の期間」は決して「均衡の期間」ではなく、構造的不安定の臨界点によって境界を定められる。したがって、資本主義の歴史はシステムの深刻な危機によって特徴づけられると同時に、構造的断絶によって時間的に区切られた「発展の期間」の連続として理解される。そして、1960年代後半からの危機は以上のように特徴づけられる危機の一つである。

最後に独占と国家の対話に基づく分析は、将来に対して、2者択一的なシナリオを提示する。第1は、資本主義的なタイプのシナリオで、これには新世界経済秩序の枠内で多国籍生産システムを構造化する多国籍民間活動単位の支配力と国家権力の連結する場合である。第2のシナリオは、低開発国と先進国共に自立的発展モデルを採用し、それに基づく、新国際経済秩序を構築することを前提とする。

これらの豊かな史的 method の全貌をF.ペルーの思想は明らかにしている。

(注)

- (1) François Perroux “Dialogue des Monopoles et des Nations”, Presses Universitaires de Grenoble, 1982. p.24.
- (2) 構造概念の導入はF.ペルー・アンドレ・マルシャルを中心として1930年代から進められた。F.ペルーの定義は「構造とは時間と空間を限定された経済的全体を特徴づける諸比率と諸関係である。」F. Perroux “Pour un approfondissement de la notion de structure”, *Mélanges Witmeur*, 1939. p.272.
- (3) F. Perroux “Structuralism, Modèles Economiques, Structures Economiques”, *Economie Appliquée*, Tome 24. n.3, 1971. この中でペルーはジャン・ピアジェの構造概念から「変換、自動調整、全体性」という軸を導入する。
- (4) 人的資源に対する関心を経済発展の面から論じたものに、F. Perroux “L'Economie de la Ressource Humaine”, *Mondes en Développement*, 1974 がある。
- (5) F. Perroux “Pour une Philosophie du nouveau développement”, Aubier, les Presses de L'UNESCO, 1981.
- (6) F. Perroux “Unités Actives et Mathématiques Nouvelles”, Dunod, 1975.

- (7) 成長、発展、進歩について論じた F.Perroux “La croissance, le développement, les Progrès, le Progrès”, Larrousse, Vol.6.1970. に問題点が整理されている。
- (8) F.Perroux “Pour une Philosophie du Nouveau Développement”, p.43-49.
- (9) F.Perroux “Pour une Philosophie du Nouveau Développement”, 同箇所。
- (10) F.Perroux “La croissance, le développement, les Progrès, le Progrès” 前掲書参照。
- (11) F.Perroux “Pour une Philosophie du Nouveau Développement”, p55-57.
- (12) F.Perroux “Les Unités actives au XXème siècles et les nouvelles mathématisations de l'équilibre général”, Economie Appliquée, n.4, 1975.
- (13) エネルギー概念及びエントロピー概念による経済体系の説明については、F.Perroux “La rénovation de la théorie de L'équilibre économique général-Equilibration, structures dissipatives, entropie”, Idée de régulation dans les Sciences, Recherches interdisciplinaires, Malaine, Paris, 1977. 参照。
- (14) F.Perroux “Les unités actives au XXème siècles et les nouvelles mathématisations de l'équilibre général”, 前掲書参照。
- (15) 「大規模民間単位と公共組織から発する支配効果は、歴史を理解するための強力な道具であり、今日では国内市場の構造化された規模と、国際取引の量と質の関係、生産と信用の拡大に基づく多国籍企業の開化、超大国による調達市場と流通市場の分析のための強力な道具である」前掲書。
- (16) F.Perroux “La grande firme, sa croissance et ses conséquences intérieures et extérieures”, 1984.

〈あとがきに代えて〉

ペルーの日本経済に対する関心は実に深く、私が1984年に数理応用経済研究所に行ったときには大変歓迎してくださった。ペルー自身は日本の大企業の研究をしたという意向を強くもっていたので、「日本の大企業と貿易」というテーマで私の研究指導をして下さった。ペルーは独占理論の系譜を丁寧に講義し、それに対して私が資料に基づいて意見を述べるという形で研究が進められ、一年間の研究生活は私にとってはかけがえのない勉強の機会となった。ペルーの私へのメッセージの一つに「大経済学者になるには、新しい理論を構築しようとするのではなく、まず既存の理論を繰り返し研究しなさい」という言葉があり、いまでも心に残っている。

研究指導の厳しさとは裏腹に、研究を離れると大変やさしいおじいちゃまぶりを発揮し、レストランで食事をとったり、寒い研究室で買ってきたサンドイッチを食べたりしたことがとてもなつかしく思い出される。しかし、あの時も実はしのびよる病気の悪化と孤独感と日々闘っておられたようである。

フランス滞在中、トヨタ財団の専務理事を務めておられた林雄二郎先生が訪ねてきてくださり、御自分の経験談などして下さったことが、かけがえのない励ましとなった。林先生には物心両面で御世話になり感謝の気持ちで一杯である。

さらに滞在中は林先生の古くからの友人のゴードン厚子さんは生活上のことでのいろいろアドバイスをして下さった。この紙面を借りて深く感謝の意を表したい。最後に日本大学の堀川士良教授はほぼ10年間にわたってF.ペルーの研究の道筋を開いて下さった。今後もペルー研究に心を尽くしたい旨を記して感謝の辞としたい。

仏・技術輸入関数と対仏・対米輸入関数と経済政策

Les Fonctions d' importation en technologie de la France et Fonctions d' importation japonaises de la France et des E.U.A. et les politiques économiques,

諏訪 貞夫

(早稲田大学)

一.

パリにおいて、1987年6月2日、フランソワ・ペルー教授が逝去せられた。83才と云う御高齢とは云え深い悲しみに襲われている時、日仏経済学会より、ペルー教授に対する追悼論文を執筆するように依頼され何としても論文を書かなければと云う気持から本稿を記す次第である。思えば、26年以前ソルボンヌの教授のセミナーに出席して以来、教授の経済思想、経済理論、経済モデルから深い教えを受け続けて来た経済学研究者として、現在の自分の中心的課題を原稿として教授に捧げるのがベストであると考え筆を執る次第である。

本稿は、先ず研究開発(R-D)資本、及び技術輸入を含んだ技術資本と、産出量と一人当り生産性との実証分析⁽¹⁾を出来るだけ詳細に吟味検討する。しかして、この分析が西欧と日本に関しては、統計データの不足と云う重要な問題を包含していることを示す⁽²⁾。従って、この分析をより一層推し進めるためには、若干の時日の経過が必要と思われる。そこで、この技術輸入の定式化と計測と云い主題を一応迂回して、私のこれまで行ってきた、対米・対仏輸入関数の各種の定式化と計測結果⁽³⁾、及び、このモデルで最も重要な役割を演じていると考えられる、変動相場制の期間の、円・ドルレート、円・フランレート、フラン・ドルレートその他を視覚化して提示し⁽⁴⁾、現在の私の経済学研究の一端を明示し、学恩の極めて深かった、亡き、フランソワ・ペルー教授に捧げる次第である。

注(1) Luc Soete et Pari Patel, Recherche - développement importations de technologie et croissance économique, Une tentative de comparaison internationale, Revue économique, N°5, septembre 1985, pp.975-1000.

(2) L.Soete et Pari Patel, op.cit., pp.975-982

(3) 早大政経雑誌、早大社会科学討究、Waseda Economic Papers 所載拙稿参照

(4) 日本能率協会総合研究所「統計分析システム V 3.1」MS/DOS 62.5.14. ①.②.③

二.

R-D 支出の概念は、投資のフローの概念に対応している⁽¹⁾。生産乃至生産性に影響を与えるのは、これらの投資の蓄積されたストックである。斯くして、分析が R-D だけに限定づけられる時には、R-D 資本の測定尺度を構成することが通常である。すなわち、

$$T_t = \sum w_i R-D_{t-i}$$

ここで、R-D 資本ストックT、過去の R-D 投資の関数、であり w_i は仮定されたラグの構造と、使用された原価償却の関式とを反映するウェイトである。

それ故、相当長い期間にわたっての R-D 支出年別データが利用可能であることが、R-D 資本ストックを推定する為の必要条件なのである⁽²⁾。

ラグの構造の選択に関しては、4年の期間の単純分布を採んでいるが、式によれば、以下の様に示し得る。

$$0.20 R-D + 0.30 R-D + 0.30 R-D + 0.20 R-D$$

これ以前の研究⁽³⁾は、一般に、ラグの正確な構造が R-D 資本ストックの測定値の変遷や、研究の計量経済学的結果に対して殆ど影響を与えない事を示している。これについては、本研究も同様であり、英国のケースについてショット (Schott⁽⁴⁾) によって用いられたラグ構造のような、前の研究により用いられたラッ

グ構造と違ったラグ構造によって R-D 資本を測定することによって得られた研究結果は、吾々がここで示した結果と実際には同一である。原価償却率については、75%の償却率を仮定したが、各国について妥当な率と考えられる。それ故、R-D 資本ストック、 T_t の計算に用いられた定式は、最終的には以下の様になる。すなわち、

$$T_t = (1 - 0.15) T_{t-1} + I n u. (R - D)_t$$

吾々はこの式を適用して計算するが、1948年の R-D 支出に7を積算することによって計算した期首の R-D 資本ストックから出発する。

この計数は、15%の原価償却率と極めて急速な前の期間の成長に対応するものである。

表1. R-D資本ストックの年平均成長率

	米	日本	仏	独	英
1963-1982	4.1	14.9	13.1	10.1	4.4
1963-1973	6.5	19.5	19.2	13.0	7.3
1973-1982	1.5	9.9	6.2	7.0	2.1
1963-1971	7.2	20.1	21.5	13.5	8.2
1971-1978	1.9	13.6	8.3	8.8	2.0
1978-1982	1.7	6.9	4.8	5.7	1.1

表2. 技術資本ストックの年平均成長率

	米	日本	仏	独	英
1963-1982	4.2	13.3	12.2	9.3	4.4
1963-1973	6.5	17.7	17.7	11.9	7.3
1973-1982	1.6	8.4	6.1	6.5	1.3
1963-1971	7.3	18.3	19.4	12.4	8.1
1971-1978	2.0	11.7	8.3	8.2	2.1
1978-1982	1.8	6.2	4.7	5.3	1.1

これは、1948年の米国に対して、タレッキー (Terleckyj) によって得られた係数と同一である。1956年より以後の年の分析において用いられた R-D 資本の評価は、R-D の増加と減価償却率の重要性と云う理由によって、初期ストックに関するこの仮説によって実際には影響をうけていない。第1表は、利用可能なデータ⁽⁶⁾によって計算した期間に対応する、R-D 資本ストックの年平均成長率を表わしている。しかしながら、吾々が構成し計算した R-D 資本ストックは国内技術資本ストックの測定値のみ、多少とも各国で重要性の程度の差はあるにしてもその利用は考察されていない。それ故、R-D 支出の累計資本ストックの他に、外国に対する技術支払額の累積ストックを含んだ「技術」資本ストックを同じ様に考察するのは興味深いものであるように思われる。この外国への技術支払額の計測値の極めて思弁的で投機的性格を考へて、吾々は、15%と云う同一の減価償却率を使用した。しかしながら、外国への技術支払額を特徴づけるラグに対しては、既述の注意に従ってこのラグの構造は特別のものは導入していない⁽⁷⁾。斯して、第1表の期間と同一期間についての「技術資本ストックの年平均成長率」が第2表に示されている。他の表⁽⁸⁾に示してある外国技術への支払額の数値が既にそれを示している様に、R-D 資本と技術資本の種類の推定値は米国に関しては近似した値が認められるが、他の諸国については多少とも大きく相異している。特に、表1、表2、の最初に示されている期間については、その差は、10%から40%に及んでいる事が確認せられる。しかしながら、表2と他の表⁽⁹⁾に示されている。技術投資ストックの推定値はヨーロッパ3ヶ国 (仏、独、英) と日本のケースにおいて、そして最近の期間では米国のケースについてさえ外国技術の占める割合が有意な態様で恐らくは過少推定せられていると云う事実を強く指摘しなければならない。外国技術の輸入は、実際には多くの選択的な形態で為され得る。ここでは、経常収支残高において確認された形態の外国技術輸入しか確認されていない。それ故、技術資本ストックのこれらの測定値を解釈するのは、非常に特別な注意をもって為さ

れなければならないのである。

計量分析の結果

理想的に云うならば、吾々の分析の枠組の中において、これまで説明し展開して来た技術ストックと R-D ストックの相異なる概念を使用することによって、1956-1982年の期間の異った生産関数、例えばコブ・ダグラス・タイプを検証することである⁽¹⁰⁾。処が、不幸にも、物理的資本ストックのデータが日本については1965年から、そして、ドイツについては1960年からだけしか利用可能ではないのである⁽¹¹⁾。吾々の眞の目的は、特に、R-D ストックに対する生産量の弾力性、R-D ストックに対する生産性の弾力性の推定値の系列を得ることであるので、この段階においては、思い切った単純化を導入して、物理的資本の成長率は実際には一定不変であると仮定することがよいように思われる。この様な仮説は、分析対称となっている大部分の国においては、物理的資本ストックのかかなり規則的な発展と非常に大きく一致していると云う事を注意すべきである。事実、物理的資本ストックの利用可能な推定値を「時間」変数に対して回帰させる場合極めてよい「あてあめ」の結果が得られている。

勿論、これらの推定値は、生産能力の稼働率の変化によって修正されなければならない。しかしながら、不幸にも、この点に関するデータはより一層利用可能性が少ないのである。それ故、物理的資本ストック変数は、単に時間傾向値によって置き換えられている。又、雇用変数に関しては、「労働時間数」の変数が使用せられて

いる。R-D 資本ストック (Aの部) と同様に、技術的資本ストック (Bの部) を用いた回帰分析の結果が、表3に示されている。推定結果は満足のゆくものであるが、一階の自己相関係数 (e) は総てのケースにおいて有意であるので、総ての推定値は自己相関によって修正されなければならない。ビイチとマキノンの最大尤度法 (La procedure du maximum de vraisemblance de Beach et Mackinnon⁽¹²⁾) が、これを行うのに用いられた。定数項が一般に非常に大きい。これは、物理的資本ストックを単純な時間傾向値によって置き換えている事を或る意味で表している。

表3. 生産方程式に対する回帰の結果 (米、日本、仏、独、英) (括弧内はt値)

A R-D資本 ストック	定数項	労働時間	時 間	R-D ストック	R ²	D.W.	N	P	残差の標 準 偏 値
米	-41.91 (8.51)	1.16 (13.08)	0.020 (7.48)	0.078 (1.75)	.995	1.55	27	0.56 (3.35)	0.019
日 本	-78.18 (2.72)	1.20 (6.56)	0.038 (2.53)	0.279 (2.87)	.98	1.61	27	0.56 (3.31)	0.046
仏	-60.49 (4.53)	0.66 (4.54)	0.31 (4.58)	0.127 (3.11)	.99	1.80	27	0.74 (5.52)	0.016
独	-53.01 (2.61)	1.07 (10.04)	0.025 (2.39)	0.251 (2.72)	.995	1.64	27	0.78 (5.93)	0.017
英 国	-68.36 (5.95)	1.09 (8.01)	0.034 (5.94)	0.037 (0.79)	.995	1.51	27	0.63 (4.08)	0.021
B 技術資本 ストック									
米	-41.83 (8.40)	1.16 (13.07)	0.020 (7.39)	0.078 (1.74)	.98	1.55	27	0.55 (3.35)	0.019
日 本	-81.23 (3.05)	1.13 (6.04)	0.039 (2.84)	0.301 (2.99)	.995	1.62	27	0.55 (3.22)	0.043
仏	-60.17 (4.15)	0.60 (4.36)	0.030 (4.18)	0.135 (2.87)	.995	1.80	27	0.75 (5.66)	0.017
独	-52.3 (2.57)	1.06 (9.94)	0.025 (2.32)	0.276 (2.74)	.995	1.64	27	0.78 (5.66)	0.017
英 国	-67.28 (5.66)	1.08 (7.87)	0.034 (5.63)	0.043 (0.86)	.995	1.51	27	0.62 (4.01)	0.021

表4. 生産性方程式に対する回帰の結果（米、日本、仏、独、英）（括弧内はt値）

A R-D資本 ストック	定 数 項	時 間	R-D ストック	R ²	D.W.	N	P	残差の標 準 偏 値
米	-40.75 (8.33)	0.020 (7.35)	0.102 (2.41)	0.97	1.61	27	0.53 (3.08)	0.0201
日 本	-68.69 (25.78)	0.033 (2.46)	0.330 (2.46)	0.99	1.58	27	0.54 (2.98)	0.0448
仏	-84.69 (10.38)	0.042 (10.01)	0.058 (2.22)	0.99	1.87	27	0.64 (3.98)	0.0183
独	-46.61 (2.66)	0.022 (2.38)	0.274 (3.22)	0.99	1.67	27	0.79 (6.28)	0.0173
英 国	-61.68 (11.7)	0.031 (10.9)	0.058 (1.70)	0.98	1.54	27	0.64 (4.25)	0.0210
B 技術資本 ストック								
米	-40.63 (8.21)	0.020 (7.27)	0.103 (2.41)	0.97	1.61	27	0.53 (3.08)	0.0201
日 本	-74.39 (3.22)	0.036 (2.97)	0.338 (4.21)	0.99	1.61	27	0.51 (2.94)	0.0439
仏	-85.39 (9.85)	0.043 (9.46)	0.059 (1.99)	0.99	1.86	27	0.66 (4.22)	0.0185
独	-46.14 (2.66)	0.022 (2.36)	0.300 (3.29)	0.99	1.66	27	0.79 (6.13)	0.0172
英 国	-61.01 (11.40)	0.031 (10.63)	0.064 (1.80)	0.98	1.54	27	0.63 (4.15)	0.0210

しかしながら、R-D 資本ストックの弾力性と技術資本ストックの弾力性に関して、多くの興味ある点が特に指摘せられる。

第一には、推定値は相異なる国において有意に異なっていて、日本と西独のケースでは非常に大きな有意な弾力性（0.25-0.30）、英国のケースにおいては、小さな有意でない弾力性、仏のケースでは、得られた弾力性の数値は、大きく有意であるが（0.10-0.15）、西独と日本の弾力性の数値に比較して、明確により小さい。

第二には、米国に対して推定された弾力性は（0.08）、他の研究者⁽¹³⁾によって得られた弾力性と実際的には同一である（0.06⁽¹⁴⁾）。それ故、相異なる国の計測結果は、その大きさが殆ど正確に推定せられている現実の差異をよく反映していると考えうる。

第三には、R-D 資本ストック変数と、技術資本変数によって得られた実際的に同一の結果は、日本と西独のケースにおいて得られたより高い弾力性は、外国技術の輸入へのより強い依存関係と結びついているものではない。この結果は R-D について特別なものである。この様な観察は、日・独における「技術的追い付き」のプロセスの重要性の論議と必ずしも反対の事を示すのではない。経常収益残高の「特許権や免許」と云う項目の下には、再びとりあげられない、他の形態の下の技術の模倣や普及の様なより応用的でより生産的な R-D と結び付いたその他の要因が、経済成長にとって決定的重要性を有つものとして依然として考えられている。

物理的資本ストック変数よりもむしろ時間変数の利用が、労働生産性方程式の検証からなる追加的単純化をもたらすが、それは次の形によっている。

$$Rt = A \cdot Tt \cdot \exp(\lambda t)$$

ここで、Rt は時間の経過の中における一時間当たり生産性、Tt は R-D 資本と技術資本のストック。

既述の生産方程式に比較して、この単純化は労働時間変数の係数が1に等しいと云う条件を課することにな

る。これらの推定は、表4に提示せられているが、これは、表3の生産に対する推定の表示と比較出来るような表示に従っている。この表4の生産性の計測においても又、その推定は自己相関によって修正せられている。表3と表4の推定結果は、実際には全く一致していて、これは、その事が期待出来るように、労働時間係数が生産の観点から定式化において1とは有意に相違していないと云う範囲で一致しているのである。

フランスのケースは唯一の例外で、R-D 資本ストック（又は技術資本ストック）の弾力性（Y）、表3の生産についてよりも、表4の生産性に関しての方が明白により小さいのである。

かなり奇妙にそして、他の4ヶ国とは反対に、労働時間変数の係数は、フランスについては、1よりかなり有意に小さいのである。

結 論

斯く、国内の R-D 支出の累積ストックの単位で確認された技術知識と、技術的資本ストックの単位で確認された技術知識、（外国技術の輸入に充当された支払額を又含む）とが、生産量と生産性に影響を与える方法は、国が異なるにつれて、実際的に異っている。正確に云うならば、日本と西独のケースにおいては、技術資本に対する生産の弾力性も、生産性の弾力性も、仏と米国におけるよりもその数値は明白により大きく、その数値は英国のケースにおいては非常に小さい。

最近10年間の生産性の成長率の鈍化についての議論に関しては、この計測結果は、生産性の成長（P）の鈍化に対する、技術資本ストックの成長（rT）の鈍化による貢献分を計算することを特に可能としている。このような計算は、1973年前後の期間を比較している表5に示されている。生産性の鈍化に対する技術資本の成長の鈍化の貢献は、アメリカ⁽¹⁵⁾と英国のケースでは小さく、それとは反対に、西独、日本、仏のケースでは、この貢献分は非常に大きいことを示している。

後者の3ヶ国については、50年代と60年代において、決定的な重要性を有った「技術の追い付き」（de «rattrapage technologique» d'importance cruciale）のプロセスが、70年代の間に多少とも達成され、米国との間の技術的乖離の急速な解消をもたらしたと云う事を、この計測結果は示している。

表5. 生産性の成長率の鈍化に対する（P）技術資本ストックの鈍化（T）の貢献
（1973-1982年の期間と1963-1973年の期間との比較）

国	P 63-73	P 73-82	T 63-73	T 73-82	P	T	r	T
米	3.0	1.5	6.5	1.6	1.5	4.9		20
日	10.5	5.7	18.8	8.9	4.8	9.9		50
仏	5.9	4.4	18.7	6.3	1.5	12.4		100
独	5.5	4.0	12.4	6.7	1.5	5.7		50
英	4.6	2.3	7.3	1.3	2.3	6.0		10

しかし、以下の様な問題が未解決のまま残されていることを指摘⁽¹⁶⁾しなければならない。すなわち、生産性の変動と発展は、新生産物又は、改善された生産物が非常に多く存在する高度技術の集約的産業の実際の生産性の計測の困難性のみしか有たず、且つ、生産可能性の現実の増加、又は、技術的可能性フロンティアの異同等とは、殆んど関係を有ち得ないと云う事実に関連するものである。R-D 支出は、その生産性の改善の観点からの計測が困難で、且つ不完全なところの、新生産物の概念や、その生産、旧生産物の改善、あらゆる種類の革新等に、全く特別に向けられているのである⁽¹⁷⁾。

それ故、経済における R-D 支出の研究領域は依然として極めて宏大であり、その上、経済成長との間の相互作用に関する多くの問題は尚殆んど研究せられていない。アメリカのケースにおける R-D 支出についての多くの数量分析は、多分余りに速く一般化の傾向をもつ若干の要因を吾々に教えている。吾々の研究結果は、この米国についての分析を、日本とヨーロッパに拡大することは、時間だけの問題であることを確認しているのである⁽¹⁸⁾。

- 注(1) Luc Soete et Pari Patel, Recherche-développement importations de technologie et croissance économique, Une tentative de comparaison internationale, Revue économique, N° 5, septembre, 1985, pp., 975-1000.
- (2) L. Soete et P. Patel, op. cit., 975-982.
- (3) Z. Griliches and J. Mairesse, Productivity at the firm level, in R-D, patents and productivity, Griliches, Chicago, University Press of Chicago, 1984.
- (4) K. Schott, Industrial research and development expenditure: an econometric analysis, Oxford, Unpublished D. Phil, these, 1975.
- Journal of Industrial Economics, 25, december, 1976, pp., 81-99.
- (5) N. Terleckyj, M. Holdrick and d. Levy, U.S Economic Hrowtk to 2000, Center For Socio-Economic Analysis, National Planning Association, numero, 1982.
- (6) L. Soete et P. Patel, op. cit., pp. 975-1000.
- L. Soete et P. Patel, op. cit., p. 985
- (8) L. Soete et P. Patel, op. cit., pp., 975-982.
- (9) L. Soete et P. Patel, op. cit., pp., 975-982, 993-998.
- (10) L. Soete et P. Patel, op. cit., pp., 986-990
- (11) L. Spete et p. patel, op. cit., p. 986
- (12) C. M. Beach and J. G. Mackinnon, A maximum likelihood procedure for regression with autocorrelated errors, Econometrica, 46, 1978, pp., 51-58.
- (13) Z. Griliches, Returns of research and development expenditures in private Sector, in Kendrick J. W. & Uaccara B. (ed.), New developments in productivity measurement, Studies in Income and Wealth, Vol. 41, pp., 419-461, 1980.
- (14) L. Soete et P. Patel, op. cit., p. 987
- (15) Z. Grilichis, R & D and the productivity slowdown, American Economic Review Proceeding Issue, 70(3) May, 1980, pp., 343-348.
- (16) Z. Griliches, Issues in assessing the contribution of Research and Development in productivity growth, The Bell Journal of Economics, 10, etc. 1979, pp., 92-116.
- (17) K. Pauitt, Technical innovation and industrial decelopment-Part I and II, Futures, 11 et 12, 1979, pp. 458-470 and pp. 35-44.
- (18) L. Soete and P. Patel, op. cit., pp., 990-992.

三.

以上の、R-D 資本ストックと技術的資本ストック（外国よりの特許権、技術使用権の輸入を含む）分析は、経済分析と数量分析の観点からみて極めて意義深いものがあるのであるが、その最大の難点は、この分析目的に対して信頼し得る統計データが得ることが困難である点が存在している事である。例えば、既述の研究にお

いて、コブ・ダグラス型関数によって各種の弾力性の推定がなされているが、日本の資本ストックは1965年以前について、西独の資本ストックは1960年以前のデータが得られないと著者達自身も指摘している⁽¹⁾。

R-D 資本のデータでは、米国が最もよく整備されており、これが、米国についてもこの分野の研究が多数行われている要因であり、これに対して西欧諸国、日本については、データが欠除していることを強く述べている⁽²⁾。又、技術の国際的波及の役割と、外国技術の輸入の経済成長に対する貢献についても同様のデータの問題が指摘せられている⁽³⁾。

それ故本稿では、R-D 資本、技術輸入額と、生産量、一人当たり生産性の問題⁽⁴⁾はこれ以上追及せず、信頼出来るデータ⁽⁵⁾の確保出来る、対米輸入、対仏輸入（固定相場制の期間）の計測例⁽⁶⁾とその結果に対する数量分析としての評価、及び、長期対米・対仏輸入関数の数量分析としてもっとも満足ゆく計測結果を示して、その解釈を行うであらう⁽⁷⁾。

固定相場制の期間についての対仏・対米輸入関数は、本稿（二）の計測結果と同様に、コブ・ダグラス型関数であり、その価格効果と所得効果を中心として、絶対的季節ダミー D_1 、 D_2 、 D_3 構造変化を示す時間傾向値 $(eB_0 + B_1t + B_2t^2)$ カバー率 $(\frac{X}{M-1})$ 、稼働率 (U) 、原材料在庫率 (S) を導入して計測した結果である。

対米輸入 固定相場制

	1	2	3	4	5	6	7
変数ラック 定数項	8.658 ** (8.8163)	7.911 ** (6.1385)	8.895 ** (5.4155)	10.273 ** (8.1771)	10.007 ** (6.8999)	8.576 ** (5.287)	10.847 ** (7.1611)
相対価格 0-1	-3.354 ** (-3.9895)	-1.172 (-1.5945)	-0.097 (-0.0859)	-5.247 ** (-4.1692)	-3.711 ** (-4.2037)	-1.42 (-1.7242)	-5.227 ** (-4.1298)
2-3				1.948 (1.9787)		0.84 (0.6816)	1.719 (1.6457)
4-10					1.3 (1.258)		0.736 (0.6868)
鉱工業生産 0-1	0.671 * (2.1931)	1.065 ** (3.3168)	1.121 ** (2.862)	0.491 (1.5771)	0.378 (0.9866)	0.897 * (2.2102)	0.346 (0.9171)
t	-0.017 (-1.5728)	-0.026 * (-2.1331)	-0.026 (-1.7847)	-0.012 (-1.0808)	-0.008 (-0.5761)	-0.02 (-1.3836)	-0.007 (-0.5421)
t ²	0.0002 ** (3.1333)	0.0002 ** (3.494)	0.0002 ** (3.5205)	0.0002 ** (3.4585)	0.0002 ** (3.3766)	0.0002 ** (3.4158)	0.0002 ** (3.3871)
カバー率 -1	-0.098 (-0.5618)	-0.403 * (-2.2339)	-0.585 ** (-3.5808)	-0.133 (-0.7833)	-0.144 (-0.8145)	-0.427 * (-2.3111)	-0.155 (-0.8925)
稼働率	0.238 (0.9093)	0.428 (1.3499)	0.241 (0.7762)	-0.028 (-0.2719)	0.148 (0.549)	0.41 (1.2842)	-0.095 (-0.3135)
原材料在庫	0.356 * (2.4165)	0.022 (0.1709)	-0.075 (-0.5285)	0.43 ** (2.904)	0.302 (1.9805)	-0.021 (-0.1471)	0.391 * (2.4516)
D ₁	0.07 * (2.1186)	0.089 * (2.4313)	0.098 * (2.6288)	0.07 * (2.1652)	0.072 * (2.1866)	0.09 * (2.4485)	0.071 * (2.1859)
D ₂	0.064 (1.6837)	0.021 (0.5086)	0.0002 (0.0058)	0.065 (1.7592)	0.06 (1.5637)	0.018 (0.432)	0.063 (1.6666)
D ₃	0.001 (0.0247)	-0.041 (-1.0379)	-0.058 (-1.4443)	0.006 (0.155)	-0.003 (-0.0828)	-0.044 (-1.1022)	0.003 (0.0752)
R	0.964424	0.955535	0.953329	0.966353	0.964828	0.955064	0.965994
S	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
DW	1.08717	1.08719	1.17801	1.278	1.15746	1.12135	1.30059

対仏輸入 固定相場制

	1	2	3	4	5	6	7
変数ラック 定数項	2.436 (1.1477)	3.626 (2.1128)	2.59 (1.441)	2.432 (1.1151)	2.039 (0.9601)	2.209 (1.2023)	2.28 (1.0615)
相対価格 0-1	1.227 (0.9706)				0.655 (0.4966)		-0.104 (-0.0654)
2-3		0.303 (0.362)		-0.011 (-0.0119)		0.868 (0.9977)	0.906 (0.857)
4-10			-1.138 (-1.6326)		-1.023 (-1.3833)	-1.394 (-1.877)	-1.424 (-1.6241)
フラン・ドル レート	2.288 (2.4469)	1.71 (2.2724)	1.299 (2.823)	2.284 (2.3027)	1.743 (1.7313)	1.877 (2.537)	1.833 (1.8056)
鉱工業生産 指数 0-1	2.248 (4.4194)	2.21 (4.3033)	2.655 (4.6962)	2.249 (4.3545)	2.624 (4.581)	2.712 (4.7729)	2.72 (4.6484)
t	-0.06 (-3.2309)	-0.056 (-3.0796)	-0.056 (-3.1654)	-0.06 (-3.1987)	-0.059 (-3.152)	-0.058 (-3.273)	-0.058 (-3.1151)
t ²	0.0003 (2.2885)	0.0003 (2.1523)	0.0001 (1.1429)	0.0003 (2.2646)	0.0002 (1.2303)	0.0001 (0.9772)	0.0001 (0.8482)
カバー率 -1	0.178 (0.6824)	0.206 (0.7861)	0.234 (0.9151)	0.178 (0.6754)	0.215 (0.8264)	0.231 (0.9027)	0.234 (0.892)
稼働率	0.245 (0.43)	-0.094 (-0.2118)	-0.131 (-0.3035)	0.246 (0.4197)	0.059 (0.1015)	-0.101 (-0.2327)	-0.13 (-0.2086)
原材料在庫率	0.098 (0.4743)	0.117 (0.4886)	-0.046 (-0.2155)	0.096 (0.401)	-0.021 (-0.0943)	0.052 (0.22)	0.052 (0.2191)
D ₁	0.022 (0.4037)	0.027 (0.4904)	0.026 (0.4789)	0.022 (0.3923)	0.024 (0.4483)	0.034 (0.622)	0.034 (0.6183)
D ₂	0.083 (1.3242)	0.094 (1.5241)	0.102 (1.6865)	0.083 (1.2999)	0.096 (1.5288)	0.107 (1.7616)	0.109 (1.6821)
D ₃	0.154 (2.637)	0.158 (2.6753)	0.167 (2.8995)	0.154 (2.6104)	0.164 (2.8055)	0.166 (2.8719)	0.166 (2.8317)
R	0.941071	0.940132	0.942959	0.939892	0.942953	0.942953	0.941793
S	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
DW	2.31904	2.27119	2.36612	2.31906	2.38103	2.41207	2.41176

注(1) L.Soete et Pari Patel, op.cit., p.986.

(2) L.Soete et Pari Patel, op.cit., p.975.

(3) L.Soete et Pari Patel, op.cit., pp., 982-986.

(4) L.Soete et Pari Patel, op.cit., pp., 986-1000.

(5) International Financial Statistics, January, 1952-June, 1987. 日本銀行調査統計局「経済統計月報」昭和28-62年4月.

(6) この計測結果は Weseda Economic Papers N°26, 1987. 所載の拙稿一部とすべきものであるが頁数の関係で本稿に含める.

(7) 注(6)で示した計測は D₁.D₂.D₃.が絶対的季節ダミーを用いており、モデルで示した長期対米対仏輸入関数のD₁.D₂.D₃.は相対的季節ダミーを用いている.

4.

これらの、対米対仏輸入関数で、その回帰係数が総て有意で、符号条件を満し、自由度権調整済決定係数が大きく、誤差項の系列相関がないとする数量分析として一応満足のゆく⁽¹⁾モデルは、以下の様に推定せられた。これらの数量分析としての解釈⁽²⁾は、紙数の関係もあり、又、計測結果そのものが十分に示すところであるので、その結果のみを示し、この計測で、最も大きな問題となっている円・ドルレート、円・フランレート、フラン・ドルレートを1970年を1.00として示した指数として、視覚化した図1とその他を示すであろう⁽³⁾⁽⁴⁾。

図1 為替レート

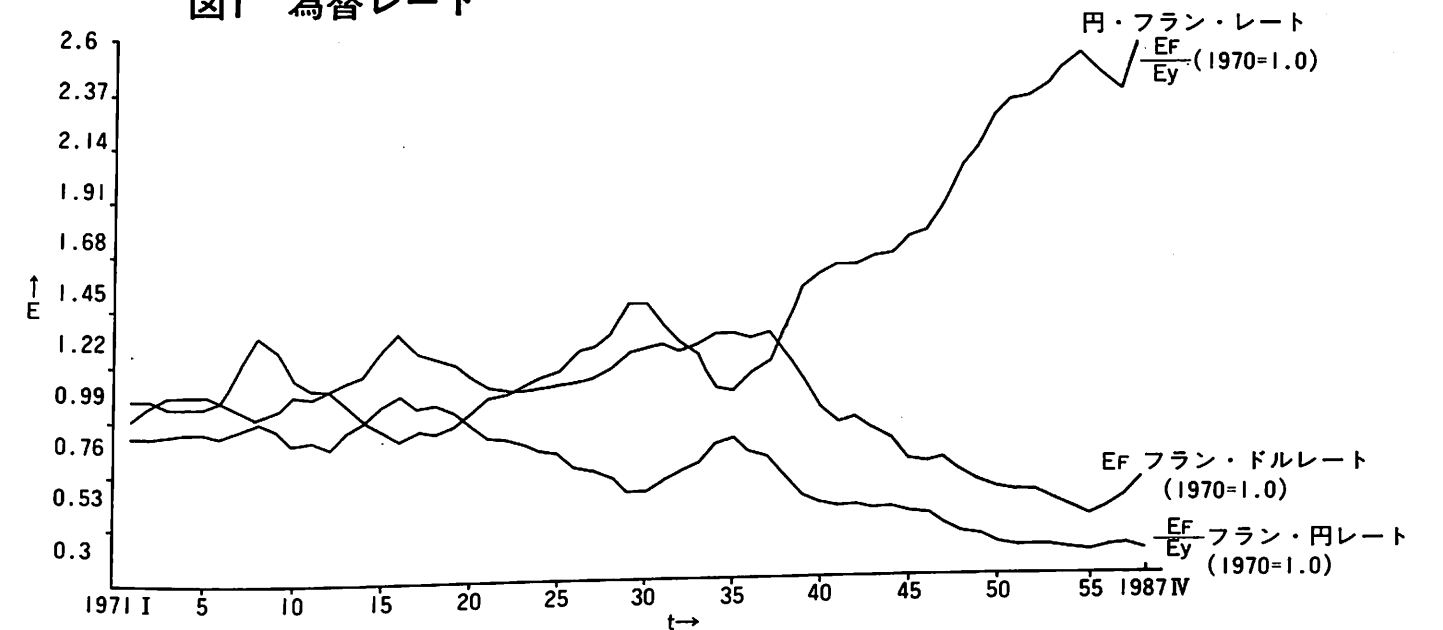
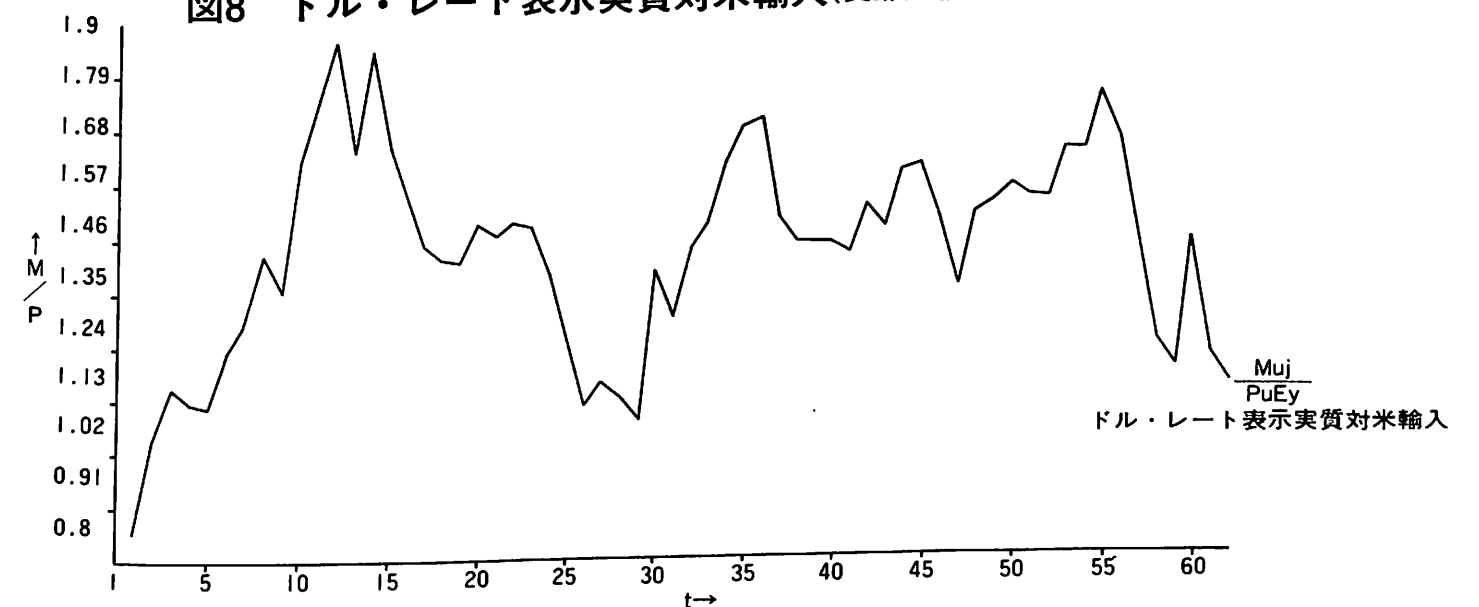


図8 ドル・レート表示実質対米輸入(変動相場制1971Ⅲ-1986Ⅳ)



長期対米輸入関数（固定相場制 1956 I - 1971 II）

$$\begin{aligned} \log \frac{Mu_j}{Pu} &= \frac{15.9114}{(6.9841)} - \frac{5.88927}{(-9.6098)} \log \frac{Pu}{P_j} {}_0A_1 + \frac{1.91274}{(2.2246)*} \log \frac{Pu}{P_j} {}_4A_{10} \\ &+ 2.03354 \log Y_j {}_0A_1 - 1.902 \log Y_j {}_2A_3 + 0.0444764 D_1 \\ &+ \frac{0.000173004}{(3.0819)} t^2 + \frac{0.714132}{(5.6413)} \log S - \frac{1.39255}{(2.5766)*} \log u \\ R^2 &= 0.964975 \quad S = 0.1 \quad DW = 1.86481 \end{aligned}$$

長期対米輸入関数（変動相場制 1971 III - 1986 IV）

$$\begin{aligned} \log \frac{Mu_j}{Pu \cdot Ey} &= \frac{3.48061}{(2.6871)} - \frac{1.06151}{(-4.582)} \log \frac{Pu}{P_j} {}_0A_1 - \frac{0.753273}{(-6.4274)} \log Ey {}_0A_1 \\ &+ \frac{0.562077}{(3.6263)} \log Ey {}_2A_3 + \frac{1.313}{(7.5067)} \log Y_j {}_0A_1 + \frac{1.25259}{(6.0916)} \log Y_j {}_4A_{10} \\ &+ \frac{0.0325845}{(2.3858)*} D_2 - \frac{0.02779161}{(-2.21451)*} D_3 - \frac{0.000238763}{(-4.6266)} t^2 \\ &- \frac{0.35747}{(-3.53)} \log S \\ R^2 &= 0.817779 \quad S = 0.06355 \quad DW = 1.35563 \end{aligned}$$

長期対仏輸入関数（固定相場制 1956 I - 1971 II）

$$\begin{aligned} \log \frac{Mu_j}{Pf} &= \frac{2.2793}{(2.6871)} + \frac{1.2226}{(-4.582)} \log Ef {}_0A_1 + \frac{1.44769}{(4.1157)} \log Ef {}_4A_{10} \\ &+ \frac{2.62916}{(7.6526)} \log Y_j {}_0A_1 + \frac{0.0768853}{(3.0516)} D_3 - \frac{0.0430194}{(-4.0153)} t \\ R^2 &= 0.946109 \quad S = 0.1414 \quad DW = 2.28929 \end{aligned}$$

長期対仏輸入関数（固定相場制 1956 I - 1971 II）

$$\begin{aligned} \log \frac{Mf_j}{Pf} &= \frac{2.2793}{(2.5981)*} + \frac{1.2226}{(4.3234)} \log Ef {}_0A_1 + \frac{1.44769}{(4.1157)} \log Ef {}_4A_{10} \\ &+ \frac{2.62916}{(7.6526)} \log Y_j {}_0A_1 + \frac{0.0768853}{(3.0516)} D_3 - \frac{0.0430194}{(-4.0153)} t \\ R^2 &= 0.946109 \quad S = 0.1414 \quad DW = 2.28929 \end{aligned}$$

注(1) 刈屋武昭監修日本銀行調査統計局編「計量経済分析の基礎と応用」東洋経済新報社昭和60年4月

(2) 早大社会科学研究所「社会科学討究」昭和62年9月所載拙稿参照

(3) 日本能率協会総合研究所「統計分析システム V 3.1」MS/DOS 62.5.14.①.②.③.「重回帰分析システム V 2.1」MS/DOS 62.5.14.「重回帰分析システム V 2.0」60.3.27.

(4) 短期モデルと対米・対仏輸出関数の計測は早大「社会科学討究」1987年第1号
Waseda Economic Papers N°26, 1987 参照

Bibliographie

I. — OUVRAGES

A. Questions économiques

- *Le Problème du Profit*, 1926, 557 p. Marcel Giard, Paris.
- *La Technique du Capitalisme*, 1930, 97 p., Jean Lesfauries.
- *Les Traitements des Fonctionnaires en France*, 1933, 170p. Sirey, Paris, Contribution pour la France à l'enquête du *Verein für Sozial Politik*.
- *La Pensée Economique de Joseph Schumpeter, Une Théorie Pure de la Dynamique Capitaliste*, 1935, 223 p. Dalloz, Paris. Nouvelle édition augmentée, Droz, Genève, 1965, 259 p.
- *Capitalisme et Communauté de Travail*, 1938, 346 p. Sirey, Paris.
- *Autarcie et Expansion*, 1943, Librairie de Médecis, Paris.
- *La Valeur*, 1943, Presses Universitaires de France, Paris.
- *Le Revenu National, son Calcul et sa Signification*, 1947, 306 p. Presses Universitaires de France, Paris.
- *Le Plan Marshall ou l'Europe nécessaire au monde*, Librairie de Médecis, Paris 1948, 222 p.
- *Les Comptes de la Nation*, Presses Universitaires de France, collection Pragma, 1949, Paris, 256 p.
- *L'Europe sans rivages*, Presses Universitaires de France, Paris, 1954, 668 p.
- *Théorie générale du Progrès économique. Les mesures des progrès économiques et l'idée d'économie progressive*. Cahiers de l'I.S.E.A. Série I, fasc I, 1956, 45 p. Traduction grecque, Athènes, 1962.
- *Théorie Générale du Progrès Economique*. I. Les Composants: 1. La Création. Cahiers de l'I.S.E.A., Série I, fascicule 2, 1957.
- *Théorie Générale du Progrès Economique*. I. Les Composants: 2 La Propagation. A-Modèles microéconomiques. Cahiers de l'I.S.E.A., série I, fascicule 3, 1957.

- *Les Problèmes Economiques de la «Coexistence» et la Croissance de l'Economie Mondiale*. 1 — La lutte au-delà des systèmes, Cahiers de l'I.S.E.A.
- *Les Problèmes Economiques de la «Coexistence» et la Croissance de l'Economie Mondiale*. 2 — Les pôles de développement et le commerce extérieur. Cahiers de l'I.S.E.A., série G, fascicule 5-1957.
- *Le Capitalisme*. Presses Universitaires de France, collection «Que sais-je», Paris 1948, 136 p., 7^e édition P.U.F., 1969. Traductions: japonaise (1951), espagnole (1952), italienne (1960), portugaise (1961, Brésil), catalane (1964, Barcelone), hébraïque (1964, Tel-Aviv), arabe.
- *La Coexistence Pacifique*. Presses Universitaires de France, Paris, 1958, 666 p., 3 volumes. traduction japonaise (1963-1964), traduction espagnole: *La Coexistencia Pacífica* (Fondo de Cultura Económica, Mexico, 1960), traduction italienne: *La Coesistenza Pacifica, Illusioni politiche e realtà economiche* (Ed. Einaudi, Turin 1961), traduction allemande: *Feindliche Koexistenz?* Curt E. Schwab, Stuttgart 1961.
- *Economie et Société, Contrainte, Echange, Don*. Presses Universitaires de France, Paris 1960, 190 p., 2^e édition 1964, collection «Initiation Philosophique». Traduction allemande: Zwang, Tausch, geschenk (Ed. Curt E. Schwab, Stuttgart, 1961. Traduction japonaise: (Pierre et Marie Horikawa) Tokyo (1962), traduction portugaise: (Mario Murteira) Lisbonne (1962), traduction espagnole: Barcelone (1963), traduction italienne: Milan (1961), traduction Arabe: Damas (1983).
- *L'Economie du XX^e siècle*. Presses Universitaires de France, Paris 1961, 3^e édition augmentée, 764 p., 1969. Traduction espagnole, traduction italienne, traduction allemande (2^e édition, juin 1964), traduction portugaise: *A economia del seculo XX*, ed. Morais, Lisbonne.
- *Le IV^e Plan Français (1962-1965)*, Presses Universitaires de France, collection «Que sais-je», Paris 1962, 126 p., 2^e édition 1963. Traduction portugaise, traduction anglaise (1965), traduction allemande (1964).

BIBLIOGRAPHIE

- *L'Economie des Jeunes Nations*, Presses Universitaires de France, Paris 1962, 252 p., traduction portugaise (1964).
- *Dialectique et Socialisation*. Préface à K. Marx (Œuvres) 1963. Textes établis, présentés et commentés par M. Maximilien Rubel, Ed. Gallimard, La Pléiade 1963.
- *Industrie et Création Collective*. Tome I: *Saint-Simonisme du XX^e siècle et Création Collective*. Presses Universitaires de France, Paris 1964, 204 p., traduction espagnole: *La Industrialización del siglo XX*, Buenos-Aires (1964), traduction espagnole: *Barcelone* (1965), traduction portugaise: (1965).
- *Les Techniques Quantitatives de la Planification*. Presses Universitaires de France, Paris 1965, 310 p., traduction grecque: Ed. Papazisis, Athènes (1968), 264 p., traduction espagnole: Ed. Ariel, Barcelone (1969, 282 p., traduction roumaine: Ed. de la Academia Republicii Socialiste de Roumanie, Bucarest (1969), 237 p.
- *Recherche et Activité Economique*. Ed. Armand Colin, collection U, ouvrage collectif, Paris 1969, 508 p.
- «Indépendance» de la Nation et Interdépendance des Nations. Ed. Aubier-Montaigne, Paris 1969, 302 p.
- *Industrie et Création Collective*. Tome II: *Images de l'Homme Nouveau et Techniques Collectives*. Presses Universitaires de France, Paris 1970, 325 p.
- *Aliénation et Société Industrielle*. Gallimard, Paris 1970, 135 p.
- *Indépendance de la Nation*. Ed. 10-18, mars 1971, 312 p., traduction hongroise: Ed. Közgazdasági és jogi Könyvkiadó, Budapest (1972). Trad. espagnole, Ediciones Ice, Madrid, 1972.
- *Inflation, Dollar, Euro-Dollar*. (François Perroux, Jean Denizet, Henri Bourguinat), Gallimard, collection «Idées», Paris 1971, 319 p.
- *Pouvoir et Economie*. Ed. Bordas, collection «Etudes», Paris 1973, 152 p., traduction italienne: *Il ruolo del Potere nell'analisi economica*, Franco Angeli, Milano (1978), traduction allemande: *Wirtschaft und Macht*, Haupt, Stuttgart, (1983), traduction espagnole: Ice Ediciones, Madrid, (1981).

BIBLIOGRAPHIE

- *Unités Actives et Mathématiques Nouvelles*: révision de la théorie de l'équilibre économique général. Dunod, Paris 1975, 325 p.
- *Le nouvel Ordre Economique International*. Encyclopaedia Universalis, Supplément 1980.
- *Les Entreprises Transnationales et le Nouvel Ordre Economique International*. Ed. *Croissance des Jeunes Nations*, 1980, Lyon.
- *Pour une Philosophie du Nouveau Développement*. Ed. Aubier, U.N.E.S.C.O., 1981, 265 p. Traduction anglaise: Croom Helm, traduction espagnole, Editions del Serbal — Witardo — Barcelone, traduction arabe, Arabic Edition UNESCO, 1983, traduction yougoslave Giro Srboštopia, Beograd.
- *Dialogue des Monopoles et des Nations*. Presses Universitaires de Grenoble, 1982, 465 p.

B. Questions sociales

- *Les Mythes Hitlériens* (a figuré sur la liste Otto, Lyon 1936, 180 p.) *Os Mitos Hitleristas, problemas de Alemanha contemporânea*, tradução de Cecilia Meilrelles, Compahnia Editoria Nacional, Sao-Paulo, Rio de Janeiro, 1937, 249 p.
- *Français pourquoi?* Editions du Cerf, Paris, 1937, 46 p.
- *Syndicalisme et capitalisme*, Librairie Générale, Paris, 1939.
- *Des mythes hitlériens à l'Europe Allemande* (a figuré sur la liste Otto), Librairie Générale de Droit et de Jurisprudence, Paris, 1940, 353 p.
- *Communauté*, Presses Universitaires de France, Paris, 1942, 178 p., traduction allemande, traduction espagnole.
- *François Perroux interroge Herbert Marcuse, qui répond*. Aubier-Montaigne, Paris, 1969, 207 p. Traduction catalane; Editorial Nova Terra, Barcelone.
- *Le Pain et la Parole*. Editions du Cerf, Paris, 1968, 334 p.
- *Aliénation et Société Industrielle*, Gallimard, Collection Idées, 1970, Paris. Traduction espagnole, Lima, (1970).

BIBLIOGRAPHIE

- *Masse et Classe*. Edition Casterman, Collection Mutations-Orientations, Paris, 1972, 146 p.

II. — LIVRES RONEO

A. Questions économiques

- *Les réformes Agraires en Europe*. Domat-Monchrestien, Paris, 1935, 158 p.
- *Le Néo-Marginalisme*. (Conférence donnée à l'Ecole Pratique des Hautes Etudes de la Sorbonne). Domat-Monchrestien, Paris 1941, 2^e édition 1945.
- *Cours d'Economie Politique*. (Centre de Documentation Universitaire, Paris). Tome I (5^e édition): *Systèmes et Structures Economiques, Formation Historique du Capitalisme, Technique, Organisation et Esprit du Capitalisme*. 1947, 732 p.
- *Le Revenu National et la Politique Economique Quantitative*. Centre de Documentation Universitaire, Paris 1947, 307 p. (Cours de Doctorat à la Faculté de Droit de Paris).
- *Histoire des Doctrines Economiques Contemporaines*, J.M Keynes. Centre de Documentation Universitaire, Paris 1947, 101 p. (Cours à l'Institut des Sciences Politiques).
- *Cours d'Economie Politique*. Centre de Documentation Universitaire, Paris 1949, 556 p. Tome 2 (5^e édition): *Entreprise et Capitalisme. Extension et intensité de l'entreprise capitaliste. Production et échange de biens. Formation et distribution du crédit. Concentration et capitalisme*.
- *Matériaux pour une Analyse de la Croissance Economique*. Série D, n° 8. Cahiers de l'I.S.E.A., Paris 1955, 132 p.
- «Trois Outils d'Analyse pour l'Etude du Sous-Développement». Contribution aux Cahiers de l'I.S.E.A., Série F n° 1, sur *Niveaux de Développement et Politique de Croissance*, Paris 1955, 97 p.
- *Communication et Industrialisation*. Communication à la Table Ronde sur les prémisses sociales de l'industrialisation, Conseil International des Sciences Sociales, 12-15 septembre 1961.

BIBLIOGRAPHIE

B. Questions sociales

- *Le sens du Nouveau Droit du Travail*, Domat-Monchrestien, Paris 1944, 550 p.

III. — BROCHURES ET ARTICLES

A. Théorie économique

- *Le problème du profit*, (brochure), Lyon, 1927.
- «I concetti di Statica e dinamica secondo Giuseppe Schumpeter», *Rivista Internazionale di Scienze Sociali*, 1935.
- «Sur le mot «capitalisme», sens et faux-sens», *Esprit*, 1938.
- «La notion de groupe industriel», *Revue d'Economie Politique*, 1939.
- Préface à *L'initiation à la Théorie Economique*. A. Murat, P.U.F., collection Theoria.
- «L'intégration de la théorie de la valeur de la monnaie à la théorie de la valeur des biens», *Economie Contemporaine*, décembre 1943.
- «La monnaie dans une économie internationale organisée», *Economie Contemporaine*, décembre 1943.
- «Le rôle de l'appareil de la théorie moderne dans l'œuvre d'Albert Aftalion», extrait de *l'Œuvre Scientifique d'Albert Aftalion*, Domat-Monchrestien, Paris, février 1945.
- «L'alliance de l'exigence abstraite et de l'exigence expérimentale dans l'économie 'positive'»: une leçon de l'œuvre de Gaëtan Pirou. *Revue d'économie politique*, juillet-août 1947.
- «Les choix de l'Etat producteur et du consommateur». (Résumé de la communication au Congrès de Washington, septembre 1947). *Econometrica*, volume 16, janvier 1948, p. 68.
- «La Croissance Harmonisée selon Colin Clark», *Banque*, 1949.
- «L'effet de domination dans les relations économiques», *Hommes et Techniques*, janvier 1949.

BIBLIOGRAPHIE

- «La généralisation de la General Theory», (Université d'Istanbul), brochure 76 p., juillet 1949. Dans la *Revue de la Faculté des Sciences Economiques de l'Université d'Istanbul*.
- «Esquisse d'une Théorie de l'Economie Dominante», *Economie Appliquée, Archives de l'I.S.E.A.*, avril-septembre 1948, n° 2/3. Traduction allemande: Entwurf einer theorie des dominierenden wirtschaft, Springer Verlag, juillet 1950 et printemps 1951, traduction anglaise (résumé): The Domination Effect and Modern Economic Theory, *Social Research*, June 1950, n° 2, traduction polonaise in «Teoria i polityka handlu i gospodarki kapitalistycznej» (Varsovie 1960): Teoria gospodarki dominujacej a rownowaga miedzunarowa.
- «Les Macrodécisions» (Communication au Congrès de Cambridge, Angleterre, septembre 1949, *Economie Appliquée*, n° 2/3, 1949. Les Macrodécisions, *Giornale degli Economisti e Annali di Economia*, septembre-octobre 1949. «Les Macrodecisions et la théorie des choix», *Neue Beiträge zur Wirtschaftstheorie*, Festschrift anlässlich des 70. Geburtstages von Hans Mayer, Springer Verlag, 1949, Zeitschrift für Nationalökonomie XII, Band 2-4, Vienne 1950.
- Une interprétation générale de la General Theory, *Banque* 1950.
- «Economic spaces»: Theory and Applications, *Quartely Journal of Economics*, vol. LXIV n° 1, Febr. 1950, réédition in *Readings in Regional Development* (John Friedmann, Cambridge, Mars 1965
- «Les Espaces Economiques», *Economie Appliquée*, 1950.
- «La généralisation de la théorie de l'intérêt chez Keynes», *Banque*, mars 1950.
- «Note sur la dynamique de la domination», *Economie Appliquée*, n° 2, 1950.
- «J.M. Keynes: l'Homme et les Problèmes de son époque», *Economie Contemporaine*, janvier 1951.
- «Le Dynamisme du Psychisme Humain», jubilé du Doyen Dagenfeld Schonburg, *Wirtschaftliche Entwicklung und Soziale Ordnung*, Verlag Herold, Vienne, printemps 1952.

BIBLIOGRAPHIE

- «Les trois analyses de l'évolution et de la recherche d'une dynamique totale chez Schumpeter», *Economie Appliquée*, n° 2, 1951.
- «Notion de concurrence et effet de domination», *Banque*, mai 1952.
- «Sur la notion de structure économique», (préface à l'ouvrage de M. Byais, *Formation du Capital et Reconstruction Française*, Centre d'Etudes Economiques, 1952.
- «Le coût de l'homme: de l'avarice des nations à une économie du genre humain», compte-rendu des exposés de la Semaine Sociale de Dijon, Lyon, octobre 1952 et *La Vie Intellectuelle*, novembre 1952.
- «L'avenir de l'Europe et les psychoses de la localisation», *Synthèse*, Bruxelles, octobre 1952.
- «Leadership» économique des Etats-Unis et analyse moderne des échanges extérieurs (en allemand, français, italien) Europe (Kreditanstalt-Bankverein) Vienne, mai 1953.
- *Une théorie générale de l'activité économique: la théorie de la concurrence monopolistique*, préface à la traduction française du livre de E.H. Chamberlin, Paris, P.U.F., collection Theoria, 1953.
- «Etienne Antonelli et l'analyse scientifique des phénomènes économiques», *Revue d'Histoire Economique et Sociale*, n° 4, 1953.
- «Le Don — Sa signification économique dans le capitalisme contemporain», *Diogène*, avril 1954.
- *Stabilité financière et équilibre de la balance des paiements*, contribution au Congrès des Finances Publiques de Curitiba, Brésil, septembre 1954, publ. Institut International des Finances Publiques, Paris, 1956.
- «Note sur la notion de pôle de croissance», *Economie Appliquée* n° 1 et 2, 1955.
- *The theory of monopolistic competition — A general theory of Economic activity*, traduction de la préface à la traduction française du livre de E.H. Chamberlin «Monopolistic Competition», *The Indian Economic Review*, février 1955.

BIBLIOGRAPHIE

- «Leçon inaugurale au Collège de France» (5 décembre 1955), Annuaire du Collège de France, mai-juin 1956.
- «La recherche de la stabilité: facteurs réels» (The quest for stability: the real factors), Contribution au Congrès de l'Association Internationale des Sciences Economiques, Rome, 6-11 septembre 1956. *Economie Appliquée*, n° 1 et 2, 1958. «The quest for stability: the real factors», in *Stability and progress in the world economy*, London, Macmillan and Co, 1958, pp. 105-126. «Das Streben nach Stabilität: Die realen Factoren», *Zeitschrift für Nationalökonomie*, Vienne, n° 1/2, 1958, pp. 102-134.
- *Notes sur les études d'économie généralisée et les fonctions économiques du profit*, préface au cahier de l'I.S.E.A., n° 1, série G (Economie des démocraties populaires Etudes et documents), septembre 1956.
- «La propagation de l'information économique dans la société moderne» symposium en l'honneur du Professeur Ugo Papi, *Industria*, mars 1957.
- «La distinction entre les progrès économiques et l'idée d'économie progressive — quelques exemples américains» *Symposium en l'honneur du Professeur Gini*, Institut de Statistique de Rome, 1957.
- *Les pôles de développement et l'économie internationale*, The Challenge of Development, symposium, Jerusalem, 1957-1958.
- «L'information, facteur de progrès économique dans les sociétés du XX^e siècle» *Mémoires et Publications de la Société des Sciences, des Arts et des Lettres du Hainaut*, Mons, 1957. Edition française, *Diogène*, n° 1, 1958. Edition américaine, *Diogène*, spring 1958.
- «Structural inflation and the economic function of wages; the French example», *The theory of wage determination*, proceedings of a conference held by the international Economic Association, Macmillan and Co, London, 1957, pp. 251-263.
- «Le profit et les progrès économiques», *Revue de l'Action Populaire*, novembre 1957.
- *La prévision économique et la croissance harmonisée*, exposé au

BIBLIOGRAPHIE

- congrès international de la Cegos, Bruxelles, juin 1958 (polycopié).
- «Sur la spécificité du pouvoir économique scientifiquement contrôlé» *Cahiers de l'I.S.E.A.*, série M, recherches et dialogues philosophiques et économiques, n° 2, décembre 1958.
- «Indici dei Progressi Economici e l'Idea di Economia Collettiva», *Studi Economici*, janvier-avril 1959, Naples.
- «Les pôles de développement et l'économie internationale», *Les Affaires Etrangères* (M. Trotabas), P.U.F., juin 1959, n° 73.
- «Note pour le lecteur français sur l'article du Professeur Scitowski, 'Croissance balancée ou non balancée'» *Economie Appliquée*, n° 1 et 2, janvier, juillet 1959.
- «Les projets spécifiques et les plans de développement dans les pays à croissance retardée», *Encyclopédie Française*, vol. IX, l'Univers Economique et Social, avril 1960.
- «Une distinction utile à la politique des pays à croissance retardée: points de développement et foyers du progrès» — (Maroc-Tunisie), *Cahiers de l'I.S.E.A.*, série F, n° 12, novembre 1959.
- «Structures Economiques», *Cahiers de l'I.S.E.A.*, série M, n° 6, décembre 1959.
- «Expérience économique et Science économique» *Encyclopédie Française*, vol. IX, l'Univers Economique et Social, 1960.
- «L'idée de progrès devant la science économique économique contemporaine», *Encyclopédie Française*, vol. IX, l'Univers Economique et Social, 1960 — Cours C.F. 1959-1960 «A idea de progresso parante a ciencia economica de nosso tempo», *Analise Social* n° 2, vol. 1, avril 1963 — Universidade Tecnica de Lisboa. Traduction polonaise dans «*Ekonomia wobec portzeb ludzkich*» Paris (Ksiegarnia Polska w Paryzu, 1961): Idea postepu wobec nauk ekonomicznucj ebecnego okresu. «L'idée de progrès devant la science économique de ce temps», *Cahiers de l'I.S.E.A.*, série M, n° 9, février 1961.
- «Sur la science économique» *Revue de l'Enseignement Supérieur*, n° 2, 1960.

BIBLIOGRAPHIE

- *Pour un renouvellement nécessaire: l'analyse de l'innovation et de la croissance*, participation au Congrès International d'Etudes sur le progrès technologique et la société italienne, Milan, juin-juillet 1960, texte provisoire photocopié. *Per un rinnovamento necessario nell'analisi dell'innovazione e dello sviluppo*, Rivista Internazionale di Scienza Economica e Commerciali, janvier et mars 1961, Milan, Padoue. (En français) *Innovation et Croissance* — quelques suggestions pour un renouvellement nécessaire, dans *Il Progresso Tecnologico e la Società Italiana*, (publication des actes du Congrès de Vienne, Guiffre Editore, Milan, 1961).
- *Sur la construction d'un modèle de couplage d'une région polarisée avec une autre région*, participation au Colloque consacré aux économies régionales, Institut de Science Economique de l'Université de Liège, avril 1960, texte provisoire photocopié
- «Qu'est-ce que le développement?», *Etudes*, janvier 1961.
- *La distinction entre les progrès économiques et l'idée d'économies progressives — Quelques exemples américains*, extrait du premier volume de «Studi in onore di Corrado Gini», Istituto di statistica della Facoltà di scienze statistiche demografiche attuariali, 1960.
- *Communication* à la Commission des Comptes et des Budgets Economiques de la Nation, masse salariale, 3 janvier 1961 — Publication Ministère des Finances (2 pages dactylo.).
- «La critique de l'économie du bien-être et la recherche de l'avantage collectif», *Arguments*, 2^e trimestre 1961, Liège.
- «Note sur le niveau d'aspiration et le niveau d'attente», *Revue des Sciences Economiques*, septembre 1961, Liège.
- Progrès économique et signification, *Cahiers de l'I.S.E.A.*, série M, n° 11 et 12, novembre 1961.
- Quelques réflexions et précisions en vue d'un dialogue avec Gilles Granger, *Cahiers de l'I.S.E.A.*, série M, n° 11 et 12, novembre 1961.
- *Structures économiques*, in «Sens et Usages du Terme Structure», Mouton et Cie, Pays-Bas, 1962.

BIBLIOGRAPHIE

- *La Planification Indicative en France* (compte-rendu des travaux du Colloque sur la planification), Institut de Sociologie de l'Université Libre de Bruxelles, Bruxelles 1962 (Les Problèmes de la Planification).
- Le IV^e Plan Français 1962-1965. En quoi consiste notre planification indicative? *Economie Appliquée*, janvier-juin 1962.
- Traduction polonaise in «*Ekonomia Wobec Potrzeb Ludzkich*» (Księgarnia Polska w Paryżu, 1961, Paris): *La méthode de l'économie généralisée et l'économie de l'homme* (Metoda ekonomii uogólnionej i ekonomia oż y slowieka) — *L'idée de progrès devant la science économique de ce temps* (Idea postępu wobec nauk ekonomicznych obecnego okresu) — *L'industrialisation au XX^e siècle et les chances d'une économie généralisée* (Uprzemysłowanie XX^e wieku i widoki powodzenia ekonomii uogólnionej). — *La coexistence hostile et l'apparition des pouvoirs mondiaux* (Roswoj apol eżenstwa przewys y owego i uwaratwienie spo eczne).
- Traductions polonaises in «*Theoria i polityka handlumiedzyparodowego w kapitalizmie*» (Polskie Wydawnictwo Gospodarcze, Warszawa 1960): — *Théorie de l'Economie dominante (esquisse)* (Theoria gospodarki dominujacej a rownowego miedzunarowa). — *Le problème des croissances liées* (Problemistyka powiazanego wzrostu gospodarczego).
- Les industries motrices et la croissance d'une économie nationale, *Economie Appliquée* n° 2, 1963. — Bulletin de l'Association des Ingénieurs de la Faculté Polytechnique de Mons, février 1964. — Actes du Colloque Franco-Canadien, novembre 1963. — Institut d'Economie Appliquée, Ecole des Hautes Etudes Commerciales de Montréal, 1964. — Publications en l'honneur du Professeur Oscar Lange, Varsovie. — Las Industrias Motrices y la Planificación del Crecimiento de una Economía Nacional, Universidad Nacional de Córdoba, Argentine, 1964.
- L'investissement d'innovation pour un modèle à deux secteurs: secteur à croissance forte, secteur à croissance faible, *Economie Appliquée*, n° 4, 1963.
- *Las funciones de producción*, traduction de la 1^{ère} partie du

BIBLIOGRAPHIE

- cours de F.P. au Collège de France (1964-1965), pour enseignement à Cordoba, Argentine, octobre 1965.
- «Théorème d'Euler-Wicksteed» *Tiers-Monde*, avril 1967.
 - Note sur la fonction de production, *Tiers-Monde*, tome VIII, n° 31, juillet-septembre 1967.
 - «La empresa motriz en una región y la región motriz» *De Economía*, año XX, n° 97, novembre 1967, Madrid.
 - «Theory of economic growth», *The Waseda journal of political science and economics*, avril 1967, Tokyo.
 - Sur le degré de généralité de la théorie de l'équilibre général, *Economies et Sociétés*, n° 9, p. 227, 1967.
 - Préface au livre «Coûts privés et coûts sociaux» de Claude Jesua, P.U.F., Paris 1968.
 - Les conceptualisations implicitement normatives et les limites de la modélisation en économie (Colloque à l'Institut d'Histoire des Sciences de l'Université de Paris, juin 1970), *Cahiers de l'I.S.E.A., Economies et Sociétés* n° 12, décembre 1970.
 - El crecimiento, el desarrollo, los progresos, el progreso, *De Economía*, n° 114, 1970, pp. 563-594.
 - «Le théorème Heckscher-Ohlin-Samuelson, la théorie du commerce international et le développement inégal», *Mondes en Développement*, n° 1, 1971. — Traduction turque, Alti Ayda Bir Cikai, 1970. — Acta Œconomica Academia Scientiarum Hungarica, tome 5 (4) p. 325, Hongrie. — *El teorema de Heckscher-Ohlin-Samuelson, la teoria del comercio internacional y el intercambio desigual*, traduction espagnole, Cuadernos Franco-Espanôles de Economía, n° 1, Madrid, 1971.
 - Présentation du modèle M.A.L. et le renouvellement des modèles d'échange économique, *Economies et Sociétés*, Cahiers de l'I.S.E.A., tome V, n° 10, octobre 1971.
 - «L'équilibre de von Neumann: premier essai d'évaluation», *Economies et Sociétés*, Cahiers de l'I.S.E.A., tome V, n° 10, octobre 1971.
 - *Structures mathématiques et structures du réel en économie* —

BIBLIOGRAPHIE

- Repères fondamentaux, Doctorat honoris Causa, Université de Barcelone, 15-18 mars 1972.
- «Les 'inconnues' de la croissance», *l'Expansion*, juillet 1972.
 - Savoirs économiques mathématisés et théorie englobante — Quelques étapes, *Economies et Sociétés*, Cahiers de l'I.S.E.A., n° 8, août 1972.
 - *Macht und Economische Gesetzmässigkeit*, Conference Gesellschaft für Wirtschafts und Sozialwissenschaften verein für Socialpolitik, Bonn, septembre 1972.
 - «Le pouvoir a droit de cité en science économique», centenaire de l'école allemande de la politique sociale, *Le Monde*, 26 septembre 1972.
 - Préface au livre d'Ernest Teilhac, *Systèmes et structures économiques*, Editions Aubier-Montaigne, collection R.E.S., Paris, 1972.
 - Préface au livre d'Antoine Basile, *Commerce extérieur et développement de la petite nation*, Editions Droz, Genève-Paris, Université Libanaise — Beyrouth, 1972.
 - «La communication rationnelle entre les sciences et son impact sur la science économique», *Nouvelle Ecole*, n° 21-22, hiver 1972-1973.
 - «La théorie scientifique de l'économie et sa mathématisation», *Elan*, Cahiers des I.C.S., n° 1, janvier 1973.
 - «Pour une théorie 'englobante' du profit», *Economie Appliquée*, n° 1, 1973.
 - «L'effet d'entraînement: de l'analyse au repérage quantitatif», *Economie Appliquée*, n° 2/3/4, 1973.
 - «La rénovation de la théorie de l'équilibre économique général (Equilibrations, Structures dissipatives, entropies)», *L'idée de régulation dans les Sciences*, recherches interdisciplinaires, collection dirigée par P. Delattre, séminaires interdisciplinaires du Collège de France, Maloigne, Paris, 1977.
 - *Structure et dynamique des systèmes*, pluridisciplinaire, multidisciplinaire, interdisciplinaire, and all that. Séminaires interdisciplinaires du Collège de France, Maloigne, Paris, 1976.

- «Pour rénover la théorie de l'équilibre économique 'intérieur', 'extérieur'» *Mondes en Développement*, n° 16, 1976.
- «The concept of equilibrium and the current forms of the mathematical presentation», *Economie Appliquée*, n° 2, 1976.
- *La mathématique Walraso-Parétienne et l'unité «active»*, Mélanges en l'honneur du Doyen Teixeira Ribeiro, Coimbra — Portugal, 1978.
- «L'économie de la ressource humaine», *Mondes en Développement*, n° 7, 1974.
- Les unités transnationales (U.T.N.) et la rénovation de la théorie de l'équilibre général (intérieur et extérieur). *Mondes en Développement*, n° 12, 1975. — traduction allemande dans Wettbewerle Konzentration und Wirtschaftliche Macht, Duncker & Humble, Berlin, 1976.
- *An outline of a theory of the dominant economy*. Transnational corporations and world order. Readings in international political economy. Ed. by Georges Modelski, Seattle University (Washington), 1979.
- «Les unités 'actives' au XX^e siècle et les nouvelles mathématisations de l'équilibre général». *Economie Appliquée*, n° 4, 1975.
- «Politique de la science, analyse de l'innovation et de sa propagation». *Chroniques de la S.E.D.E.I.S.*, octobre 1978.
- *Notion d'équilibre, mathématiques actuelles et thermodynamique d'Ilya Prigogine*. (Table ronde du Centre National de la Recherche Scientifique, Sadi-Carnot, Editions du C.N.R.S., Paris, 1976.)
- *Critique de la raison économique et raison statistique*, en hommage à Monseigneur Henri Van Camp, Editions du cinquante-naire de l'Ecole des Sciences Philosophiques et Religieuses, Bruxelles, 1976.
- «Notion d'équilibre et mathématisations actuelles, une interprétation». *Mondes en Développement*, n° 8, 1974.
- «L'agent économique, l'équilibre et le choix des formalisations *Economie Appliquée*, n° 2/3/4, 1973.

- *Ökômische Strukturen*, Der moderne Strukturbegriff, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1973.
- «La teoría científica de la economía» *Journal El Dia*, 22 avril 1973, Mexico.
- «Raison économique et raison statistique», Bulletin de la Société Statistique de Paris, 1975.
- «La crise surmontée: les monopoles en lutte ou au secours du système». *Courrier de l'UNESCO*, janvier 1984.
- «Financement instable et grandes innovations». *Economies et Sociétés*, n° 5, mai 1984.

B. *Economie Appliquée*

- «Remarques sur la répartition des dettes publiques en cas de démembrement d'une Nation», *Revue de Science et de Législation Financières*, 1928.
- *La notion de profit normal et la loi du 3 décembre 1926*, *Questions Politiques*, 1928.
- «Doctrine fasciste et notion d'entrepreneur», *Revue d'Economie Politique*, 1928.
- Le régime juridique des trusts aux Etats-Unis, *Revue Politique et Parlementaire*, 1929.
- Les relations économiques franco-allemandes, *Revue de l'Université de Lyon*, 1932.
- L'or et la politique de la Banque de France, *Revue Economique Internationale*, 1931. Goldzufluss nach Frankreich, Frankfurt s/Main, 1931.
- «Les finances fascistes, 1922-1932», *Finanzarchiv*, 1933.
- «Société d'Economie mixte et système capitaliste», *Revue d'Economie Politique*, 1933.
- La crise des chemins de fer français, *Revue Economique Internationale*, 1933.

BIBLIOGRAPHIE

- Economie corporative et système capitaliste, *Revue d'Economie Politique*, 1933.
- Les chemins de fer français et autres modes de transport, *Revue d'Economie Politique*, 1930-1931-1932-1933-1934-1935.
- *Corporatisme et capitalisme* (brochure et préface à l'ouvrage de Robert Goetz: «L'évolution des syndicats allemands depuis la guerre», Paris, 1936).
- «Sur la politique de réorganisation en Allemagne», étude publiée en guise de préface à l'ouvrage d'Auguste Murat: *La propriété agraire en Italie*, Lyon, 1936.
- *L'artisanat dans le capitalisme*, Jean Lesfauries, Paris, 1938.
- *La technique dans le capitalisme moderne*, Jean Lesfauries, Paris, 1938.
- *Pour ou contre la communauté du travail*, Archives de philosophie du droit, n° 3 et 4, 1938.
- «La liaison de l'économie et du social», *le Droit Social*, mars 1943.
- «Les accords de Bretton-Woods», *La Vie Intellectuelle*, avril 1945. (Réédition chez Domat-Monchrestien, Paris, novembre 1945.)
- «La monnaie internationale de Bretton-Woods et l'effort français», *la Tribune Economique* n° 3 et 4, mai 1945.
- La banque de Bretton-Woods et l'investissement international, *Revue Economique et Sociale*, n° 18, août 1945.
- *Pour une politique des prix*, brochure des Groupes Travail, août 1945.
- *Les nationalisations*, brochure des Groupes Travail, août 1945.
- *Economie organisée et économie socialisée*, brochure des Groupes Travail, septembre 1945.
- «Qu'est-ce qu'un plan?» *La Vie Intellectuelle*, septembre 1945.
- *La monnaie et le commerce extérieur après la guerre*, brochure du Centre des Jeunes Patrons, *Echanges Internationaux*, septembre 1945.

BIBLIOGRAPHIE

- Les banques d'émission et l'Etat, *Revue d'Economie Politique*, juillet 1940 à novembre 1944, n° 4 et 6.
- «Les deux formes de la collaboration économique franco-anglaise», *Courrier Diplomatique* n° 1, février 1946.
- Les accords de Washington et l'avenir de l'économie française, *Productions Françaises*, juillet 1946.
- «L'entrepreneur dans l'économie du XX^e siècle», *Productions Françaises*, septembre 1946.
- «Le revenu national et la politique économique», *Actualité Economique et Financière*, juin 1946.
- *Libéralisme ou dirigisme*, enquête de la *Revue Economique Franco-Suisse de la Chambre de Commerce Franco-Suisse*, septembre 1946.
- Les choix fondamentaux de notre politique extérieure et l'avenir de notre économie, *Productions Françaises*, juin 1947.
- «L'Amérique et les responsabilités d'une économie internationalement dominante», *B.I.C.P.A.* (Bulletin d'information des anciens élèves du Centre de perfectionnement dans l'administration des affaires), décembre 1947.
- «Les incertitudes du 'contrôle des quantités globales'», *Economie Appliquée*, n° 1, 1948.
- «Comptabilité de notre reconstruction», *Productions Françaises*, octobre-novembre 1947.
- *Le Plan Marshall — La doctrine classique de l'investissement et la reconstruction économique de l'Europe*, Les Cahiers du Monde Nouveau, (R.P. Chaillot), avril 1948.
- *Les nationalisations et la comptabilité nationale*, rapport au Congrès de la Comptabilité, 10-14 mai 1948 (reproduit dans *Economie Appliquée* n° 1, 1949).
- *Le Plan Marshall*, bulletin de l'Institut des Hautes Etudes Américaines, mai 1948, (cahiers VIII-IX).

BIBLIOGRAPHIE

- «Doctrines 'classique' et 'accident de l'histoire' — l'investissement international, la Banque de Bretton-Woods et le Plan Marshall», *Banque*, juin 1948.
- «Les comptes de la nation et le capital national», (introduction), *l'Actualité Economique et Financière*, juillet 1948.
- *Rapports entre les comptabilités privées et les comptabilités nationale et sociale*, (rapport au Conseil Economique le 2 février 1949, reproduit dans *Expertise*, n° 22 et 23, mars et avril 1949).
- «Salaire et équilibre de sous-emploi», *Banque*, août 1949.
- *La collaboration économique en Europe, Probleme der wirtschaftlichen Zusammenarbeit in Europa*, conférence prononcée à Munich le 21 septembre 1949, publié par l'Institut für wirtschaftsforschung, 1949.
- «Le plan Monnet et l'avenir économique de la France», *Banque*, avril 1950.
- «L'interventionnisme libéral et l'apport spécial de J.M. Keynes», *l'Actualité Economique*, Montréal, avril-juin 1950.
- «L'indétermination du plein emploi», *Banque*, avril 1950.
- «Où en est le plan Schumann?», *l'Exportateur Français*, 15 octobre 1950.
- «Le pool du charbon et de l'acier, illusions et réalités», *Fédération*, novembre 1950; reproduit dans la *Nouvelle Revue de l'Economie Contemporaine*, n° 16-17, novembre 1950; — traduction italienne, novembre 1951.
- «Réarmement et pression inflationniste», *l'Exportateur Français*, 15 décembre 1950.
- «Un aspect de la coordination des investissements en Europe», *l'Exportateur Français*, 15 mai 1951.
- «L'Anglo-Iranien Co. et les effets de domination», *Economie Appliquée*, n° 1, 1952.
- *Exposé sur les comptes économiques de la nation au Conseil Supérieur de la Comptabilité* (prononcé au printemps 1951), *Bulletin d'information du Conseil Supérieur de la Comptabilité*, n° 6, 1952.

BIBLIOGRAPHIE

- «Note sur les coûts de l'homme», *Economie Appliquée*, n° 1, 1952.
- *Rapport à la Commission des Comptes et des Budgets Economiques de la Nation*, Imprimerie nationale, mars 1953.
- «L'interventionnisme libéral», *Cahiers d'Information Economique*, Paris, 1953.
- «Discussions en cours sur la convertibilité et les leçons que nous devrions en tirer», *L'Exportateur Français*, 15 mai 1953.
- *Matériaux pour une analyse de l'accroissement de la richesse privée en France (1820-1914)* — Rapport au Congrès de l'International Association for Research in Income and Wealth (I.A.R.I.W.), Castelgandolfo, 1-6 septembre 1953.
- «L'Ordonnance» de J.M. Keynes et les pays sous-développés, *Bulletin de l'Union des Exploitations Electriques en Belgique*, n° 3, juillet 1953.
- «Le secteur public industriel et les conditions de 'cohérence'», *Economie et Humanisme* n° 8, septembre-octobre 1953.
- *The obliteration of the economic function of wages and structural inflation*, round table on wage determination, I.E.A., Seelesberg, Suisse, septembre 1954. — Macmillan and Co, London, 1957.
- «Prises de vue sur la croissance de l'économie française», *Etudes Statistiques*, I.A.R.I.W., (5^e série), London, 1956.
- *L'analyse de la croissance économique et son application à l'économie française, 1820-1914*, congrès de Poitiers, juillet 1954, Association Française pour l'avancement de la Science, 1956.
- «Le sens nouveau de la politique du crédit au XX^e siècle», *La Revue de la Conserve*, octobre 1955.
- «Les vertus du dialogue — Chances et risques d'une économie nouvelle — Recherches et débats», *Cahiers du Centre Catholique Français*, n° 14, janvier 1956.
- «Sur la politique du plein emploi, documents et commentaires», *Cahiers du Centre Français du Patronat Chrétien*, octobre 1955.
- «Sur la politique du plein emploi», *Economie Appliquée* n° 1 et 2, 1955.

- «Travail et civilisation», *Esprit*, octobre 1956.
- «Crise du pouvoir politique et grand capitalisme», *l'Action Populaire*, janvier 1957.
- *L'idée de pôle de développement et les ensembles industriels en Afrique*, Sentier d'Europe, n° 1, printemps 1957 (Bulletin de l'Association des élèves et anciens élèves de l'Institut Universitaire d'Etudes Européennes de Turin).
- «Les pôles de développement et la politique de l'Est», *Politique Etrangère* (numéro spécial), Développement Economique et Coopération Internationales, n° 3, 1957.
- *Les crises du Moyen-Orient, les révoltes dans l'Europe de l'Est et la lutte pour l'économie mondiale*, Pour des Institutions Mondiales (bulletin du Conseil Français pour l'Assemblée Constituante des Peuples) n° 16, Paris, janvier et février 1957.
- Deux rapports à la Commission des Comptes et Budgets Economiques de la Nation: I. *Les comptes 1 et 2 du budget économique de 1957*. — II. *Les progrès accomplis et les progrès souhaitables dans l'établissement de la comptabilité sociale de la France*. — Ministère des Finances, 1957.
- «La grande entreprise du XX^e siècle fait-elle sa révolution?» *Bulletin de la Société Belge d'Etudes et d'Expansion*, Liège, 1957 (Mention de l'exposé a été faite mais le texte n'a pas été publié).
- «Propos sur les techniques quantitatives de l'information et la politique économique», *Revue de l'Institut de Sociologie Solvay*, n° 3, Bruxelles, 1957.
- «Ma conception de l'intégration européenne», *Revue de la Politique Internationale*, Belgrade, septembre 1957.
- *Problème de la zone Sterling*, exposé du 7 novembre 1957, publication polycopiée du Conseil Economique.
- «Les formes de la concurrence dans le marché commun», *Revue d'Economie Politique* n° 1, 1958.
- «Le marché commun et la zone de libre échange», *l'Année Politique et Economique*, n° 141, janvier-mars 1958.
- «Le marché commun et la zone de libre échange», *Tribune de Nations*, 14 février 1958.

- «La méthode de l'économie généralisée et l'économie de l'Homme», *Economie et Humanisme*, 1958. - Traduction polonaise in «*Ekonomia wobec potrzeb Ludzkich*», Paris, Methode ekonomii uogolnionej i ekonomia ozowieka, 1961. — Traduction espagnole, *El método de la economía del hombre*, De Economia, n° 62, Madrid, 1959.
- «Le Marché Commun, danger pour l'économie française», *Journal des Finances*, 7 mars 1958.
- *Wie kann Frankreich wirtschaftlich gesunden?* Der Volkswirtschaft-und-Finanz-zeitung Frankfurt, 28 février 1959.
- «Une nation en voie de se faire: la République de Guinée», *Revue de l'Action Populaire*, juin 1959, n° 129, (avec deux schémas ethnographiques).
- «La nation en voie de se faire et les pouvoirs industriels», *Les Cahiers de la République*, juillet-août 1959.
- «As formas de concorrência no Mercado Comum», *Análise Económica*, n° 7/8, février 1959, Lisbonne.
- *Les formes de la concurrence dans le Marché Commun*, séance du 10 novembre 1957 à la Société Royale d'Economie Politique de Belgique (compte-rendu des travaux), mars 1959, n° 252 ter.
- «Present trend of financial recovery (en hébreu)», *Law and Economics*, Tel-Aviv, juin 1959.
- «L'opposition Est-Ouest est provisoire», *Fortune Française*, 1^{er} septembre 1959.
- «Dialogue avec divers auteurs qui ont écrit à propos de la Coexistence Pacifique, commentaires», *Argument*, 3^e trimestre 1959, Paris.
- Présentation du Colloque d'Economie Régionale de Liège, *bulletin du Grand Liège*, n° 36, mars 1960.
- «Les nations en voie de se faire, de la quasi-nation à la nation policée», Semaine Sociale d'Angers (4 juillet 1959) in «La montée des peuples dans la Communauté humaine», *Chronique Sociale*, Lyon, 4^e trimestre 1969.
- «Compétition normalisée entre l'Est et l'Ouest: (reproduction de la conclusion de l'article «Les nations en voie de se faire: de la

- quasi-nation à la nation policée» in *Rénovation Démocratique*, n° 19, mars 1960.
- La coexistence hostile et l'apparition des pouvoirs mondiaux (reproduction d'un article paru dans «Présence Africaine», été 1958) in *Bulletin des Communautaires de la Vie Nouvelle*, n° 4, 1960.
- «Stabilisation des produits de base et croissance harmonisée», *revue de l'Action Populaire*, n° 139, juin 1960.
- *Le sous-développement, la nation en voie de se faire et les moyens de l'économie collective. Seconds mélanges d'économie politique et sociale offerts à Edgard Milhaud*, l'Economie Collective, Liège, 1960.
- «Marché mondial?», *Economie Appliquée*, n° 2, 1960.
- *La firme motrice dans une région et la région motrice*, rapport au Congrès de Liège, avril 1960, présenté (polycopié) au Congrès de Naples en septembre 1960. — Publication belge in *Théorie et politique de l'expansion régionale*, Librairie Encyclopédique, Bruxelles, 1961. — Publication italienne «L'impresa motrice in una regione e la regione motrice» in *Rassegna Economica*, n° 3, 1960. — Publication française dans les *Cahiers de l'I.S.E.A.*, série AD supplément 111, mars 1961 (responsable: Professeur P. Ducassé). — Traduction portugaise: «A empresa motora em un região motora», in *Revista Brasileira de Ciencias Sociais*. — Traduction espagnole: «La firma motriz en la región y la región motriz», *Cuadernos de la Sociedad Venezolana de Planificación*, Caracas, juin-juillet 1963.
- «Grandes firmes et petites nations», *Présence Africaine*, n° 38, 3^e trimestre 1961. — Traduction espagnole: *Grandas firmas et pequeñas naciones*, Acto Académico y conferencia del Profesor F. Perroux, Université de Cordoba, 1963.
- *Communication et industrialisation — Table ronde sur les prémisses sociales de l'industrialisation*, Conseil International des Sciences Sociales, 12/15 septembre 1961, texte polycopié en français et en anglais. Texte également polycopié à l'I.E.D.E.S.
- «Contradictions et difficultés du IV^e Plan», *Notre République*, 15 novembre 1961.

- Préface au livre de M. Gannagé: *Economie du Développement*, P.U.F., Paris, 1962.
- «L'économie au service de l'homme du XX^e siècle», *Afrique Documents*, Dakar, n° 62, mars-avril 1962.
- «Considerações en torno da noção de polo de crescimento», *Revista Brasileira de Estudos Politicos*, janvier 1962, Belo-horizonte, Universidad de Minas Gerais. — Traduction espagnole: «Consideraciones en torno a la noción de polo de crecimiento», *Cuadernos de la Sociedad Venezolana de Planificación*, Caracas, juin et juillet 1963.
- «Qui fait le Plan?», *Notre République*, 15 mars 1962.
- «Un instrument efficace de politique économique», *le Courrier du Parlement*, 11 mars 1962.
- «L'avenir est à l'Europe sans rivages», *La Croix*, 3 et 5 mars 1962.
- «Il faut définir sans délai une politique des revenus», *Notre République*, 21 juin 1962.
- «Pour sauver le Tiers-Monde», *Le Coopérateur de France*, 9 mars 1963.
- «L'Amérique Latine et l'Europe», *Notre République*, n° 64, 31 mai 1963.
- *Die Europäische Wirtschaftsgemeinschaft und die Assozierung der äussereuropäischen Länder* — Participation au Colloque franco-allemand organisé par les Professeurs Neumark et Marczewski, mai 1962, Dunker et Humblot, Berlin, 1963.
- «Les Jeunes nations d'Afrique», *Notre République*, 7 juin 1963.
- *Grandes firmes et petites nations*, annexe au rapport Jeanneney, juillet 1963.
- «Préface à Genèse du Marché Commun Latino-Américain», Victor L. Urquidi, *Tiers-Monde*, 1962.
- «L'Amérique Latine entre l'Ours et l'Aigle», *Notre République*, 19 juillet 1963.
- «Monnaies nationales, monnaie européenne et déséquilibre mondial, Chœur des Experts», *Notre République*, 25 octobre 1963.

BIBLIOGRAPHIE

- «Impérialismes monétaires ou ordre monétaire?», *Notre République*, 15 novembre 1963.
- «La politique agricole commune engage le sort même de l'Europe», *Notre République*, 20 décembre 1963.
- «L'Europe et le 'Kennedy Round'», *Notre République*, 7 février 1964.
- «L'économie des Etats-Unis: un 'leadership' difficile», *Tiers-Monde*, octobre-décembre 1963. — *La Economia de Estados Unidos — Un liderazgo difícil*, La clase y el «privilegio de la Humanidad», in Cuadernos del Instituto de Estudios Peruanos, Instituto de Ciencia Economica Aplicada — Lima 1964.
- Préface de *Problèmes de l'Algérie Nouvelle*, P.U.F., Paris, novembre 1963.
- «Demain l'Amérique Latine» (à propos du livre de Gilles Gozard), *l'Information*, septembre 1964.
- «El Mercado Común y América Latina», *Revista de la Facultad de Ciencias Económicas y de Administracion*, Montvideo, juin 1964.
- «L'Amérique Latine et l'Europe européenne», *Notre République*, janvier 1965.
- «Vers la libération monétaire», *Notre République*, février 1965.
- «La conquête spatiale et ses applications pacifiques», *Aviation Magazine*, Paris, 1^{er} juin 1965.
- «L'autofinancement», *Notre République*, n° 203, février 1965.
- *Intégration économique: qui intègre? Au bénéfice de qui s'opère l'intégration?* Colloque de Cordoba (Argentine), 26-31 juillet 1965.
- *Adjustments of the aerospace industry to disarmament and the role of the observation in peace keeping*, Conférence Internationale d'Oslo, 29 août-1^{er} septembre 1965.
- «L'intégration de l'Amérique Latine», introduction au numéro de la revue *Tiers-Monde*, 9 octobre 1965.
- «Le Plan, instrument privilégié de notre progrès économique», *Libres Opinions*, *Le Monde*, 14 octobre 1965.

BIBLIOGRAPHIE

- *L'intégration du plan économique et du plan de développement économique et social*, UNESCO, 28 décembre 1965.
- *Les techniques de l'information*, extrait du cours du Collège de France, 1964-1965.
- *Techniques collectives*, extrait du cours du Collège de France, 1964-1965.
- *Les blocages de la croissance et des blocages du développement*, extrait du cours au Collège de France, 1961.
- «Conquête spatiale et souveraineté nationale», *Coopération Technique* n° 41-42-43, 1965.
- «La coopération devant la science économique», Préface au livre de Monsieur le Professeur Guelfat, P.U.F., décembre 1965, *Tiers-Monde*, février 1966.
- «L'économie planifiée» (à propos d'un ouvrage de M. Henri Chambre), *La Croix*, 18 juillet 1966.
- *Union Soviétique et développement économique*, préface au livre de M. Henri Chambre, 15 novembre 1965.
- *L'entreprise et l'économie du XX^e siècle* (gouvernements de l'entreprise, profit et productivité, quelques notions fondamentales), tome III avec M. Bloch-Laine.
- «Le multiplicateur d'investissement dans les pays sous-développés», *Tiers-Monde*, juillet-septembre 1966.
- *Integración económica*, conférence au Congrès Economique de Cordoba, 21 juillet 1967, Banco Inter-Americano, 1^{er} février 1966.
- Préface au livre du Professeur Salles «*Pédagogie appliquée à l'économie*», Technique Art Science, 28 juin 1967.
- Les concentrations et la nécessité de l'autonomie nationale», *Civisme XXI^e siècle*, Jeune Chambre de Commerce de Paris, juillet 1967.
- Disarmement and its economic consequences for the atomic and aerospace industries», Oslo, (livre: *Disarmement and World economic interdependance*), 1967.
- *L'économie française*, extrait de *La France d'Aujourd'hui*, Hatier, juin 1964.

BIBLIOGRAPHIE

- *De la vulgarisation au développement*, colloque des Conseillers Agricoles de Vichy, juillet 1967.
- Préface au livre de M. Salles, «*Explication d'un texte économique*», Dunod, 1967.
- Frenos y bloqueos del desarrollo, Conceptos», *De Economía*, n° 93, año XIX, juillet-septembre 1966, Madrid.
- Quién integra? ¿En beneficio de quién se realiza la integración?» *Banco Inter-Americano de Desarrollo*, Washington, n° 1, novembre 1967.
- *Nuevas estructuras del pensamiento económico*, exposé Universidad de Chile, Santiago, janvier 1968.
- *La integración y el fracaso de la teoría tradicional de los intercambios exteriores*, Arica, janvier 1968.
- *Les investissements multinationaux publics et privés dans le développement et dans l'intégration de l'Amérique Latine*, Bogota, avril 1968.
- «Les investissements multinationaux et l'analyse des pôles de développement et des pôles d'intégration», *Tiers-Monde*, n° 34, juin 1968.
- Las inversiones multinacionales y el análisis de los polos de desarrollo y de los polos de integración, *De Economía*, n° 100, février-mars 1968.
- «L'Europe agro-industrielle», *La Vie Française*, avril 1968, p. 3.
- *Espace économique, pôles de croissance et unités motrices en agriculture*, Colloque d'Angers, avril 1968.
- «Le progrès économique», *Economies et Sociétés*, n° 7 1967 et n° 10, 1968. — Traduction portugaise: Livraria duas Cidades, Sao-Paulo, Brésil.
- «Les espaces économiques — Grandes firmes — Petites Nations — Développement — l'Anglo-Iranian Company et les effets de domination» — *Economies et Sociétés*, tome II n° 9, septembre 1968.
- Préface à l'édition roumaine des *Techniques quantitatives de la planification*, 1969.

BIBLIOGRAPHIE

- «L'intégration et l'échec de la théorie des échanges extérieurs», *Economie Appliquée*, tome XXI, n° 2, 1968, P.U.F.
- «Les unités motrices en agriculture» *Economie Rurale*, n° 78, décembre 1968.
- «El mercado común y América Latina», *Revista de la Facultad de Ciencias Económicas*, n° 23, Montevideo — Uruguay, juin 1968.
- «Multinational investment and the analysis of development and integration poles»: remarks, *Inter-American Development Bank*, Bogota — Colombie, avril 1968.
- «La croissance, le développement, le progrès», *Grand Larousse Encyclopédique*, 1970.
- «Profit? Pourquoi? Pour qui?» n° 4 de l'O.U.R.S. (Office universitaire de recherche socialiste), octobre 1969.
- *Les dialectiques de l'innovation du marché et du plan*, conférence à l'Ecole Nationale des Services du Trésor, Conservatoire des Arts et Métiers, Paris, octobre 1969.
- «La communauté des régions de l'Europe du Nord-Ouest et le tunnel sous la Manche», *La Revue du Marché Commun*, novembre 1970.
- «L'Europe et le couple industrie-agriculture», *L'Europe Contemporaine*, Union Européenne d'Editions, résumé cours Collège de France 1971/1972. — *La pareja industria-agricultura en la integración europea*, conférence de Madrid, mars 1971.
- *Una interpretación crítica del proceso europeo de integración y desarrollo, integración política y económica*, Editorial Universitaria, Santiago de Chili, 1970.
- «L'innovation et l'économie de 'pleine innovation'», *Economie Appliquée*, tome 23, n° 2-3, 1970.
- «Créer... pour ne pas mourir. 'Le Coopérateur'», novembre 1970.
- «Face à face avec F. Perroux», *L'Expansion*, n° 37, janvier 1971.
- *El equilibrio de von Neumann — ensayo de evaluación*, (l'équili-

- bre de von Neumann essai d'évaluation), conférence de Madrid, mars 1971.
- «Pour une économie de la paix», *La Revue Nouvelle*, mars 1971.
 - *L'entreprise face à la croissance*, E.S.S.E.C., Paris, mars 1971.
 - «Estructuralismo, modelos económicos, estructuras económicas», *Anales de Economía*, Instituto Sancho de Moncada, mars 1971. — *Structuralisme, modèles économiques, structures économiques*, Colloque Institut Collégial Européen, Saclay, septembre 1970 — *Economie Appliquée* n° 3, tome 24, 1971.
 - «Inflation: la démission de l'Occident», *Les Informations*, n° 1357, mai 1971.
 - L'inflation des années 60, (Société de Comptabilité de France, exposé oral, salle des ingénieurs civils), *Economie Appliquée*, n° 3, tome 24, 1971. — «L'inflazione degli anni 60», Cassa di Risparmio di Roma, juin 1972.
 - «Walras ou l'esprit de création et d'indépendance», *La Gazette de Lausanne*, 4-5-juin 1971.
 - «Investissements directs et firmes multinationales en Europe», interview de François Perroux et Jean Denizet, *La Nation*, 18 janvier 1971
 - «Inflation monétaire et structure sectorielle», *Le Monde*, 7 septembre 1971.
 - «Un économie libératrice au service des hommes», interview, *Cité Nouvelle*, mars 1972.
 - «La réponse à la demande, l'activisme par l'offre» *Essor*, numéro spécial, mars 1972.
 - «Leadership, Dollar, stagflation and all that...», *Dirigeant*, juin-juillet 1972.
 - «Le système de la Méditerranée» *Revue du Marché Commun*, juillet-août 1972.
 - «Développer la ressource humaine», *Nouvel Observateur*, 2 octobre 1972.
 - «Le profit et 'la part de l'innovation'», *Economie Appliquée*, n° 4, 1972.

- «Les phénomènes de propagation et l'inflation», *l'Actualité Chimique*, n° 2, 1973.
- *Les leçons de l'intégration européenne et leurs applications éventuelles au cas de l'Académie Latine*. Exposé au congrès organisé par l'Instituto de Sociologia y Desarrollo del Area Iberica, l'Association de Coordination des Universitaires et l'Association de Coordination des Universitaires de Bogota, 9 juillet 1973, Bogota — Colombie.
- *Problème de l'intégration en Amérique Latine*, conférence à l'Académie Diplomatique, 16 juillet 1973 à Lima — Pérou.
- *La croissance harmonisée et les difficultés d'intégration dans les espaces économiques hétérogènes*, conférence au Cordiplan, 27 juillet 1973, à Caracas — Vénézuëla.
- *Equilibre et structure dans les échanges dits inter-nationaux*, exposé au V^e colloque Franco-Latino-Américain d'économistes, 17-21 septembre 1973, à Tours.
- *El Dólar, divisa singular y la reforma de la moneda internacional*, conférence à la Chambre de Commerce et d'Industrie de Madrid, 1^{er} avril 1974, Madrid.
- *Diferencia entre pólos de desarrollo y desarrollo de los pólos, el análisis de los pólos de desarrollo: pólos, áreas y ejes de desarrollo*. Exposé à la Chambre Officielle de Commerce et d'Industrie de Cordoue — Espagne, 5 avril 1974.
- «The growth of the French economy, 1946-1970, a first assessment». *Economie Appliquée*, n° 2/3/4/ 1973.
- «François Perroux répond aux questions de Nouvelle Ecole». *Nouvelle Ecole*, n° 23 automne 1973.
- «Inquiétude créatrice et stratégie du conflit — Relisons Pierre Massé. Revue de *La Défense Nationale*, janvier 1974.
- «L'Europe fin de siècle». *Exil*, n° 2, hiver 1974.
- *Begreppet tillväxtopol (multinational investments)*, Utvecklingsekonomie I, Aldusserien 416, juin 1974 (traduction suédoise).
- «Le Dollar et la réforme monétaire: I. Le second vingtième siècle», journal *Le Monde*, 8 juin 1974; II. «Corriger l'asymétrie occidentale», journal *Le Monde*, 9/10 juin 1974.

BIBLIOGRAPHIE

- «A colloquio con gli economisti europei: François Perroux: la combinazione delle crisi», journal *l'Unità*, Rome, 16 mai 1974.
- «Rendre Israël nécessaire au développement mondial», *France-Israël Informations*, avril 1975.
- «Le bon usage de la Science, l'esprit de rénovation et la nation vivante», *L'Appel*, juillet-août 1977.
- «Nation et orthodoxie économique», *L'Appel*, décembre 1977.
- «Les firmes transnationales et l'Amérique Latine», *Revue de la Défense Nationale*, avril 1978.
- «L'équilibre des unités passives et l'équilibration générale des unités actives», *Economie Appliquée*, n° 3/4 1978.
- «L'ordre international nouveau», *Revue des Etudes Coopératives*, n° 185 — 1976, *Mondes en Développement*, n° 19 — 1977.
- «Les possibilités d'une mobilisation plus étendue des moyens sur les marchés du capital, pour faire face aux besoins du développement», *Mondes en Développement*, n° 20 — 1978. — Traduction anglaise dans *Proceedings of the World Scientific Banking Meeting*, Srboštampa, Beograd, 1978.
- «Politique du développement et lacunes du calcul économique», *Mondes en Développement*, n° 10 — 1975.
- «Economie et Pouvoir», *Mondes en Développement*, n° 17 — 1977.
- «Transnationales et pôles de développement», *Forum du Développement*, Nations-Unies Genève — Suisse, n° 49, novembre 1978.
- «Développement, contre-développement, co-développement», journal *Rhône-Alpes*, juin 1978.
- *Regards sur une fusion*, préface de *Mariage à la Bâloise, histoire de la fusion Ciba-Geigy* par Paul Erni, Zurich — 1979.
- «La fusion, l'œuvre et l'économiste», interview accordée à la *Scope* (Ciba-Geigy) avril 1979.
- «Les conditions très inégales des échanges internationaux» (sur la question du Président Lopez Portillo), *Le Monde Diplomatique*, mai 1977.

BIBLIOGRAPHIE

- «Stratégie et guerre économique» *Revue Africaine de Stratégie*, janvier 1979.
- «La nation de 'dépense stratégique' et 'l'unité active'», *Cahiers de l'A.F.E.D.E.*, avril 1979.
- «Les droits et les devoirs des Etats en matière monétaire et financière», *Justice Economique Internationale*, Gallimard, Paris, 1976.
- *L'idée du développement global endogène et intégré (D.G.E.I.)* (document de travail pour la réunion d'experts sur la recherche sur l'idée d'un développement intégré, à Quito, 27-31 août 1979), UNESCO 1979, SS-79/ conf. 612/4.
- «Sortir de la crise», *Choisir*, Genève — Suisse, février 1980.
- «L'économie mondiale et ses nouveaux espaces», *Chronique d'Actualité de la Sedés*, 1^{er} mars 1980.
- *Qu'est-ce qu'être compétitif?*, texte du Colloque de l'I.S.M.E.A., 10-14 mars 1980, Sénat — Paris, Repris dans *Economie et Finance Internationales*, Dunod, 1982.
- «L'économie d'intention scientifique et l'inspiration thermodynamique», Académie Royale des Sciences, des Lettres et des Beaux Arts, Bruxelles, Belgique, *Chroniques d'actualité de la Sedés*, 15 janvier 1981.
- Pérégrinations d'un économiste et choix de son itinéraire, *Banco Nazionale del Lavoro*, n° 130, juin 1980.
- *Un nouveau développement exige un nouveau financement*, Conférence Mondiale pour le Financement du Développement, Dubrovnik, Yougoslavie, 26-31 août 1980.
- Finance, monnaie, développement, trad. anglaise dans *International Financing of Economic Development*, ed. by Institute for International Scientific Educational, Cultural and Technical Cooperation of the Socialist Republic of Serbia Beograd, 1982.
- Politique de la Science, analyse de l'innovation et de sa propagation, *Economie et Sociétés*, n° 11-12, 1979, Série H.S. n° 23.
- Le couplage des industries et des agricultures dans la dynamique du développement multidimensionnel, *Mondes en Développement*, n° 30, 1980.

- Une réforme monétaire internationale par la régionalisation, *Le Monde*, 12 août 1980.
- Le sommet de Cancun, Une nouvelle chance malgré tout, *Le Monde* du 20 octobre 1981.
- Cancun: Quel est le sens d'une Conférence Nord-Sud? *France Catholique Ecclésiastique*, 22 octobre 1981.
- Structure et échange dit «international». L'équilibre général reconsidéré paru dans *Rivista Internazionale di Scienze Economiche e Commerciali*, décembre 1981, n° 1.
- Le marché intérieur et ses conquérants. Dialogue avec Gilbert Blardone, paru dans la *Revue Chroniques d'actualité de la S.E.D.E.I.S.*, tome XXVI, n° 5, 1^{er} mars 1982. Traduit en italien dans *Reassegna Economica* n° 2, Marzo-Aprile 1982, «Il mercato interno e i suoi invasori».
- «Concurrences économiques et compétitions collectives». Texte publié dans *Dialogue des monopoles et des Nations*, 1982. Traduit en italien «*Concorrenza economica e rivalità collettiva*» dans *Rivista di Politica*, Estratto dal fasc. VII. lug 1982.
- «Au-delà du Welfare State», *Economie Appliquée* n° 1, 1984. A paraître dans le Recueil de la Faculté de Padoue, Italie, agissant en association avec l'Institut International J. Maritain (via Rovigo, 16 Rome).
- *Les concepts d'espace et de temps dans la théorie des unités actives*, présenté à l'Institute for Space Economy, Varsovie, mai 1986.
- «Development poles reintegrated in the general development Theory», 50 pages dans *Actes*, Colloque sur le Régionalisme, Wolfeville, organisé par André Raynaud et Donald T. Savoie, 25-28 juillet 1985.
- «Espace, temps, pouvoir, dans la théorie des Unités Actives», préface à l'ouvrage de René Sandretto, *Le Pouvoir et la Monnaie, Réflexion sur la crise et le devenir du système monétaire international*, Economica, Paris, 1987.
- «Chômage: complexité de l'analyse et profil des stratégies», in *Formation et Commentaires*, Centre Croissance des Jeunes Nations, Supplément, n° 57, novembre 1986, Lyon.

- *Une analyse critique de la notion de planification avec référence spéciale au Plan français*, Document de travail, UNESCO, avril 1986, 54 p., réf. STY 37 UNSECO.
- La crise et ses cycles, *Humanisme*, juin 1986.

C. Questions sociales

- «Georges Sorel et la grève générale», *Revue de l'Université de Lyon*, 1928.
- «Le syndicalisme fasciste», *Revue d'Economie Politique*, 1928.
- «La dictature du prolétariat chez les marxistes», *Questions Pratiques*, 1928.
- «L'évolution de la notion de défense des intérêts professionnels dans les syndicats agricoles», *Revue d'Economie Politique*, 1930.
- «Le paternalisme contre la personne humaine», *Esprit*, 1936.
- «Droit du Travail et personne ouvrière», *Esprit*, 1936.
- «Il socialismo tedesco a proposito dell'ultimo opera di Werner Sombart» *Rivista Italiana di Scienze Economiche*, 1936.
- «A proposito del 'Socialismo tedesco'», *Rivista Internazionale di Scienze Sociali*, 1936.
- «Limite et dépassement de la notion de classe», *Esprit*, 1938.
- «Notes sur l'emploi de textes à tout faire», *Esprit*, 1938.
- Sur la contre-révolution, *La Vie Intellectuelle*, n° 10 et 11, 1938.
- «Intelligence de la Nation», *Esprit*, décembre 1938.
- La représentation comme fiction et comme réalité, *Esprit*, n° 1 et 2, 1938.
- Vers un ordre et une économie communautaires, *Construire*, 1941.
- *Notre communauté*, la Communauté Française, 1942.
- La Charte du Travail, son contenu et son esprit, *Rencontres*, 1942.

BIBLIOGRAPHIE

- *Le prolétariat dans la nation: prolétariat et capitalisme, prolétariat de communauté*, brochure 49 p., 1942.
- *La communauté française, IV: Communauté et Economie*, P.U.F., 1942.
- «Entreprise et communauté de travail», (article dans *La communauté française, IV*, P.U.F., 1942).
- «Notre communauté» (article dans *la communauté française I: communauté et société*, P.U.F., 1941).
- «La fécondité de la coutume: coutume parlementaire, coutume professionnelle», à propos du dernier livre de Maxime Leroy, *Revue de Synthèse*, décembre 1938.
- «Science de l'homme et science économique», (dans «Trois essais sur la science de l'Homme», Librairie Médicis, Paris, décembre 1943).
- *La Démocratie*, brochure des Groupes Travail, juillet 1945.
- «Libéralisme et Liberté» extrait du volume des *Mélanges Gonnard*, novembre 1945.
- «Ambiguïté du fédéralisme», recueil d'essais sous le titre *Nation ou fédéralisme*, collection Présences, Plon, Paris, février 1946).
- «Socialisme et tradition», *La Vie Intellectuelle*, juin 1946.
- «L'ordre éternel des champs», (à propos du livre de M.R. Maspétiol, *L'ordre éternel des champs*), *Critique*, n° 32, janvier 1949.
- «Paternité et fraternité, la famille chrétienne et le meurtre du Père», *Critique*, juillet 1949.
- «Ne soyons pas des Européens bornés», *La vie Intellectuelle*, avril 1950.
- Notes sur le statut économique des communautés religieuses dans la vie économique de la France contemporaine (*La pauvreté, problème de la vie religieuse d'aujourd'hui*, ouvrage collectif), Editions du Cerf, Paris, avril 1952.
- *Le Monde et l'Europe* (Die Eine Welt und Europa, extraits de l'Europe sans rivages Dokumente, Offenbourg, février 1955).
- «Le rôle des organisations internationales dans la formation des nouvelles élites internationales», allocution à la séance inaugu-

BIBLIOGRAPHIE

- rale de l'Orientation à la Fonction Internationale (O.F.I.), *Bulletin mensuel d'Information de l'O.F.I.*, n° 2, avril 1955.
- «L'Europe sans rivages», (exposé prononcé le 24 janvier 1955 au Centre Catholique des Intellectuels français, suivi d'un débat), publié dans *Recherches et Débats*, numéro spécial, mai 1955.
- «Les barbares et la recherche d'une économie nouvelle», *Informations Catholiques Internationales*, n° 13, Paris, 1^{er} décembre 1955.
- «Sur quelques aspects de la barbarie dans la vie économique des peuples, l'Eglise et les civilisations», Semaine des Intellectuels Catholiques, novembre 1955, publications du CCIF, Horay, Paris, 1956.
- «Une simple question sur la liberté de recherche», *Chronique Sociale*, Lyon, n° 5, septembre 1956.
- «Auguste Comte condamnait l'économie politique», *le Monde*, 14 novembre 1956.
- Albert Aftalion (1874-1956), note nécrologique, *Economie Appliquée*, n° 4, 1956.
- «Préface» au livre du Professeur Abraham Granott «*La politique agraire mondiale et l'expérience d'Israël*», P.U.F., Paris, 1956.
- «L'Espèce doit bâtir sa Maison et son Temple», *Combat*, 30 et 31 juillet 1955. — Ac Chirah, Beyrouth. — *L'Economie Coopérative*, Tel-Aviv, janvier 1958 (en hébreu). — *Ecole Estienne*, 1959.
- «Introduction aux Cahiers de Marxologie de M. Rubel», *Cahiers de l'I.S.E.A.*, 1958.
- *La Povertà*, Edizione Paoline, 1958, III, ch. I — «Note sullo statuto economico dello comunità religiose nella vita se economica della nazione», pp. 205-231.
- «Stellung der Arbeitnehmer in der modernen Wirtschaftspolitik», Internationale Tagung des Sozialakademie Dortmund, (*Herausgegeben von Univ. Prof, Dr, Hans Bayer*, Duncker O. Humblot, Berlin, 1959).

BIBLIOGRAPHIE

- *Christianisme et civilisation, les désordres de l'Homme*, (publication des exposés de la Semaine des Intellectuels Catholiques, 1960), Editions Horay, Paris, 1961.
- *Un rite de fondation* (contre la peine de mort) *Exécution d'un couple*, (reproduction de l'article paru dans l'Actualité Religieuse, 1^{er} juillet 1953).
- «Nourrir les hommes» *Faim et soif, La voie des hommes sans voix*, n° 52, mai-juin 1963. — Traduction en espagnol (Mexico), mai 1963. — Traduction en esperanto (Paris), mai 1963.
- Préface à *l'Algérie de demain*, ouvrage collectif, coll. Tiers-Monde, P.U.F., 1962.
- «Au-delà du mensonge social», *Croissance des Jeunes Nations*, n° 14, septembre 1962.
- Création collective et économie du XX^e siècle, *La Croix*, 11 et 12 novembre 1962.
- «L'esprit de création collective dans l'économie de ce temps, «travail, création, contemplation», *Travail et condition humaine*, Fayard, 1962, (Semaine des Intellectuels Catholiques, novembre 1962).
- «La création collective dans l'économie de notre temps», *Revue Philosophique de la France et de l'étranger*, octobre-décembre 1963.
- «L'esprit de création collective dans l'économie de ce temps», *Cahiers de l'I.S.E.A.*, M. 16, n° 135, mars 1963 (le Travail).
- «El espíritu de creación colectiva en la economía de estos tiempos», *Cuadernos Americanos*, mai et juin 1963, n° 50, Mexico.
- «La creación colectiva en la economía de nuestro tiempo», *Revista de Escuela Nacional de Ciencias Políticas y Sociales*, janvier-mars 1964, Mexico.
- «Travail pour la paix et compétition entre système économique», publications du Mouvement Chrétien pour la Paix, Ville d'Avray (France), mars 1963. *Revue Esprit*, Paris, décembre 1962.
- «Chances historiques de l'unité», *La Croix*, 12 décembre 1962.
- «Le sous-développement mental de 'l'homme blanc' et le problème des pays sous-développé», *Le Cri*, janvier 1963.

BIBLIOGRAPHIE

- «IV^e Plan et création collective», *Notre République*, 24 février 1963.
- «L'avenir des nations africaines», *La Croix*, février 1963.
- «S'opposer à la peine de mort», *Réforme*, 2 mars 1963.
- Europe sans rivages 1963, *Notre République*, 1^{er} mars 1963.
- *Dialectique et socialisation*, préface aux œuvres de Karl Marx (volume 1) rassemblées par la Professeur M. Rubel, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 2^e trimestre 1963.
- Préface à l'ouvrage de M. Cépede, «*Nourrir les hommes*», Editions du CEP, Bruxelles.
- «Les échecs de l'enrichissement et la pauvreté efficace». *Croissance des Jeunes Nations*, avril 1964 (conférence prononcée à Strasbourg le 3 janvier 1964).
- *Richesse et pauvreté au XX^e siècle: questions posées aux chrétiens*, in *l'Eglise invitée au courage*, Editions du Centurion, Paris, 1964.
- «La pauvreté et la parole», *Cahiers Universitaires Catholiques*, Paris (Journées Universitaires de Montpellier, avril 1963).
- «La classe marxienne n'a pas le privilège de l'Humanité», *Notre République*, avril 1964.
- *L'économie française*, contribution à l'ouvrage collectif «La France d'Aujourd'hui» Librairie Hatier, Paris, 1964.
- «Aliénation et création collective», *Cahiers de l'I.S.E.A.*, M. 20, juin 1964.
- L'économie de tout homme et de tous les hommes», *La Vie Enseignante*, septembre et octobre 1964.
- «La economía de todo el hombre y de todos los hombres», *Exproso*, Lima, novembre 1964.
- «L'image de l'homme nouveau et les techniques collectives du second XX^e siècle», *Tiers-Monde*, octobre et décembre 1964.
- «L'économie planétaire», *Tiers-Monde*, octobre et décembre 1964.
- «Où va le Tiers-Monde?», *Notre République*, octobre 1964.

BIBLIOGRAPHIE

- «Discours de réception à l'Académie des Sciences d'Outre-Mer», *Bulletin de l'Académie des Sciences d'Outre-Mer*, février 1965.
- «Los creadores politicos» *Economia Politica*, Mexico, janvier et mars 1965.
- «Créer, vocation du XX^e siècle», *Notre République*, mars 1965.
- *Les limites de l'intégration de la jeunesse dans le plan des pays en voie de développement*, groupes de travail «Enfance, Jeunesse et plans de développement», 19-21 mai 1965.
- «Progreso social y progreso económico», *El Comercio*, Lima, 30 mai 1965.
- «La conquête spatiale et ses applications pacifiques», *Aviation Magazine*, numéro spécial 420, 1^{er} juin 1965.
- «L'entreprise aujourd'hui», *Notre République*, 1^{er} octobre 1965.
- «Industrie et création collective», *Humanisme et Entreprise*, n° 34, décembre 1965.
- «L'homme et la création collective», *La Pignata*, décembre 1965.
- «Les limites de l'intégration d'une politique pour l'enfance et la jeunesse dans un plan de développement», *Les Carnets de l'Enfance*, UNICEF, n° 5, 1966.
- «Les carnets de l'enfance», *UNICEF*, colloque de février 1966, imprimé en mai 1967.
- «Vers l'économie de tout l'homme et de tous les hommes» *Projet*, n° 15, mai 1967.
- «Note sur la ville considérée comme pôle de développement et comme foyer du progrès», *Tiers-Monde*, mai 1967.
- Préface à «Images et machines», *Coopération Technique*, 14 juin 1967.
- Préface à la «*Población mundial y los medios de subsistencia*», Cépède et Houtart.
- «Las alienaciones en el medio industrial», Amaru, *Revista de Artes y Ciencias*, publication de la Universidad de Ingeniería, Lima, n° 2, avril 1967.

BIBLIOGRAPHIE

- «Industria y creación colectiva», *De Economia*, Madrid, n° 96, año XIX, octobre 1967.
- *La promotion sociale: les ascensions des groupes et l'ordre du pouvoir*, Rentrée solennelle de la Faculté de Droit, Lyon, novembre 1967.
- «Entreprises et sociétés», *Ecole Alsacienne*, Paris, 12 décembre 1967.
- Image, machine, mécanique sociale, *Technique Art Science*, n° 214, décembre 1967.
- «Nation et libération des masses», *Notre République*, n° 31, juin 1968.
- «Nation y liberación de las masas», *El tiempo*, Bogota, juin 1968.
- «La nación y las exigencias de la economía del siglo veinte», *Anales de la Facultad de Ciencias Jurídicas y Sociales*, Universidad de la Plata, tome XXIII.
- *Innovation et plan*, colloque franco-roumain, Bucarest 1969.
- «Interview sur 'le pain et la parole'», *Croissance des Jeunes Nations*, juillet 1969.
- «Un nouvel esprit pour une nouvelle société», *La Nation*, juin 1970.
- *La société de masse et l'économie du XX^e siècle*, Association pour la Promotion Economique et Sociale, Le Havre, juin 1970.
- *La diffusion de l'information par les techniques de masse*, Assemblée de la Presse Etrangère, Paris, octobre 1969.
- «L'économie et l'avenir de l'humanité», *Rencontre entre Chrétiens*, librairie Saint-Séverin, Paris, 1969.
- «Pour lier promotion et participation», *Economie et Sociétés*, n° 9, 1970.
- «Propos de départ sur 'La Participation'», *Economies et Sociétés*, n° 9, août 1970.
- «Perroux, il buon samaritano dello sviluppo», interview, *Citta Nuova*, 25 octobre 1971.

- «Il faut déshonorer l'argent», *Panorama d'aujourd'hui*, novembre 1972.
- «Une relecture de Saint-Simon: l'industrie et l'universalisation de la culture», *Economies et Sociétés*, n° 1, 1973.
- «L'émergence des masses», interview, *Combat*, mardi 17 avril 1973.
- *L'économie du XX^e siècle et le plein développement de la ressource humaine*, exposé aux Segundas Jornadas Internacionales del pensamiento Comunitario organisée par le Centro de Investigaciones Económico-sociales para Latina America le 24 juillet 1973 à Merida — Vénézuëla.
- *La préférence pour la vie*, exposé au colloque «Avortement et crise de société», organisé par l'Association Française de Prospective sociale, les 22 et 23 mars 1974 à Tours.
- «Souvenir de Serge Tchakhotine», *Combat*, 10 janvier 1974.
- «Entretien avec François Perroux», *La Nouvelle Action française*, 6 mars 1974.
- «La parole des témoins de la liberté», *Le Monde*, 1^{er} octobre 1977.
- «L'antidote des aliénations, un défi d'Henri Bartoli», *Le Monde*, juillet 1977.
- «La promotion sociale, condition de la paix et aspiration universelle», *Comprendre*, n° 43-44, 1978.
- «D'homme à homme, norme commune de l'économie et de la nature», *Economies et Sociétés*, série ES 2, 1975.
- «De qui est-ce: 'La France est un acteur et non un objet'?», *Le Monde*, 2 septembre 1976.
- «Où trouver l'argent pour les pays sous-développés», *Le Monde Diplomatique*, décembre 1977.
- «Monnaie et monétarisme», *Le Figaro*, juillet 1977.
- «Croissance, pour qui, pour quoi?», *Le Monde*, avril 1978.
- «Entretien avec l'économiste François Perroux: régions, économie et pouvoir», *Royaliste*, 1978.

- De la frugalité: Tevoedjré rencontre Rousseau, *Choisir* (Suisse), juin 1979.
- «La crise actuelle s'est déclenchée bien avant la hausse pétrolière de 1973», interview, *La Meuse*, Liège, Belgique, 5 mai 1980.
- *Les dialogues d'Athènes, avec le Président Tsatsos et Madame Tsatsos*, sur Radio-France, 1977.
- «Les conditions très inégales des échanges internationaux», *Le Monde Diplomatique*, mai 1977.
- «Les grilles du temps», entretiens avec André Fontaine, *Le Monde*, 28 juin 1978.
- «Crise de la Science Economique ou défaillance des économistes», *Journal Rhône-Alpes*, 26 septembre 1978.
- «Vouloir être compétitif», *Le Monde*, 25 mars 1980.
- «Transnationales et pôles de développement», *Forum du Développement*, Genève, novembre 1978.
- «Cet amour qui ne ment pas», *France Catholique*, n° 1884, 21 janvier 1983.
- «On peut douter des capacités de l'Etat d'arbitrer les intérêts dont il dépend», *Royaliste*, n° 376, 17 février 1983.
- «Face à la 'coalition des maîtres' il faut d'abord s'entendre sur un langage», *T.E.L.*, 3 mars 1983.
- «Soulever le voile monétaire», *Le Monde*, 21 mai 1983.
- «La culture n'est pas un ornement». *Enjeu* (M. Chevenement) juillet-août 1983.

D. Questions politiques

- *La Petite Entente: le conflit du politique et de l'économie dans l'Europe danubienne*, Lyon 1933.
- *La Petite Entente depuis ses origines*, Encyclopédie Balkanique, 1935.
- «L'Europe Danubienne», *Affaires Extérieures*, 1934.

BIBLIOGRAPHIE

- Une nouvelle doctrine du droit public — le Portugal et Salazar, essai d'interprétation, *Affaires Etrangères*, 1935.
- «'Weltanschauung' et Politique», *La Vie Intellectuelle*, octobre 1938.
- «La Crisi dell'Europa», *Rassegna di Politica Internazionale*, 8, XIII.
- «L'Amérique et nous», *Productions Françaises*, septembre 1945.
- Préface à la paix, *Productions Françaises*, septembre 1945.
- «Le pouvoir politique et ses fonctions», *Groupe Travail*, mars 1946.
- «Le Labour Party et la situation internationale», *Productions Françaises*, décembre 1945.
- «Marxisme et pouvoir politique», *Groupe Travail*, mars 1946.
- Discussion sur l'aide américaine (réponse à G. Bataille), *Critique*, n° 30, novembre 1949.
- «Dépassement de la Nation — du slogan à l'analyse», *Fédération*, n° 55 et 56, août et septembre 1949.
- «Les nations partisans», *Fédération*, novembre 1949.
- «Hubert Beuve-Méry et l'indépendance française», *la Vie Intellectuelle*, juillet 1952.
- *A la recherche de l'Europe*, conférence prononcée le 22 janvier 1952 au Centre Universitaire Méditerranéen, publié dans les annales de ce centre, volume V, années 1951-1952.
- *La tendance vers l'intégration économique dans le monde actuel*, contribution au tome XX de l'Encyclopédie Française: «Les aspects du monde actuel», 1958, publication 1959.
- «La coexistence hostile et l'apparition des pouvoirs mondiaux», — *Confluent*, n° 1, mai 1959. — *Bulletin de Présence Africaine*, été 1958.
- «France, Europe, Afrique», *le Figaro*, 18 décembre 1958.
- «La coexistence hostile et l'économie planétaire», *Cahiers Internationaux de Sociologie*, volume XXV, 1958.
- «La coexistence pacifique», *Rénovation Démocratique* (M. Crémieu-Alcan), n° 12, février 1959.

BIBLIOGRAPHIE

- «Le dialogue Khrouchtchev-Eisenhower: L'opposition capitalisme-Communisme peut-elle être dépassée?» Texte italien: *Il Protagora*, année 1, n° 5, octobre 1959, Roma.
- «Conquête spatiale, socialisation, mondialisation», *Comprendre*, n° 23/24, 1962. — Extrait in «*Bulletin de l'Union Catholique des Scientifiques Français*», Paris, septembre/octobre 1962.
- *Présentation* (p. 3) de «L'Amérique Latine et l'Europe Européenne» (p. 98) in *Coopération Technique*, n° 38/39/40, 2^e trimestre 1965.
- «Egypte 1965», *Notre République*, n° 181, 2 juillet 1965.
- «La conquête spatiale et la souveraineté nationale», *Diogène*, n° 39, juillet-septembre 1962. — Edition anglaise.
- «Jugement sur le septennat achevé du Général de Gaulle, seul candidat pour l'avenir» Réponse aux deux questions de *Notre République*, n° 196, 26 novembre 1965.
- «Libérateur par les moyens de la science, de la technique et de l'industrie» *Notre République*, 22 novembre 1965.
- «Nouvel horizon» *Notre République*, 23 décembre 1965.
- *Les problèmes agraires des amériques Latines, colloque international*, C.N.R.S., juillet 1967.
- *Intervention* à l'Académie des Sciences d'Outre-Mer, «Japon», février 1967.
- «Note sur la Ville considérée comme pôle de développement et comme foyer du progrès», *Tiers-Monde*, n° 32: L'Espagne à l'heure du développement, p. 1147, 1967.
- «Indépendance économique ou satellisation?», *Les Informations*, mars 1970.
- «Demain la coopération», *Les Coopérateurs*, février 1970.
- «Préface» à «*La Roumanie économique et culturelle*», Droz, 1969.
- «L'éveil par un grand dessein clairement désigné des forces du peuple est la condition de la renaissance française», *La Nation*, juin 1970.

BIBLIOGRAPHIE

- «La politique commence au point où cesse la violence», *Mouvement International de la Réconciliation*, Mulhouse, mai 1970.
- «L'information sans formation», Association de la Presse Etrangère, Bilan de la France 1945-1970, *Tribune Libre*, 1971.
- «Dollar: la raison est du côté de l'Europe», *Le Coopérateur de France*, n° 542, 9 octobre 1971.
- «Force dans le monde et sécurité en Europe», *Le Monde Diplomatique*, mai 1972.
- «Dix-huit mois de politique économique. Interprétation et perspectives», *Chroniques d'actualité de la S.E.D.E.I.S.*, mars 1978.
- «L'Europe sans rivages de 1979», *Chroniques d'actualité de la S.E.D.E.I.S.*, février 1979.
- «Le Monde appartient-il aux industrialisés ou les industrialisés appartiennent-ils au Monde?», *Le Monde Diplomatique*, mai 1977.
- «La logique du plan Barre et les vrais problèmes de l'inflation», *La Vie Française*, septembre 1976.

E. Questions philosophiques

- «L'échec», *La Croix*, 2-3-juin 1963.
- «La création collective et le christianisme du XX^e siècle», *Cahiers de l'I.S.E.A.*, janvier 1965.
- «Guerre ou partage du pain, la coexistence pacifique», *Vie Enseignante*, juin 1965.
- «Présence du R.P. Lebreton», *La Croix*, 21 juillet 1965. — *Tiers-Monde*, septembre 1966. — *Economie et Humanisme*, octobre 1966.
- «L'échec de l'économie moderne et les chances du progrès humain», *Le Saulchoir*, mai 1966. — «El fracaso de la economía moderna y el porvenir del progreso humano», *Le Saulchoir*, *Folia Humanística*, Barcelone, juin 1967.
- «Eloge de Mr le Professeur Couffignal», *Technique Art Science*, octobre 1965.

BIBLIOGRAPHIE

- «L'Encyclique de la Résurrection et les abus du pouvoir des superbes», *La Croix*, 19/20/21 avril 1967.
- «Musique interrompue» (Père Maillard), *La Croix*, 21/22 mai 1967.
- «Préface» au livre «*La peine de mort*» de M. Savey-Casard, Droz, Genève, 1967.
- «Hommage à M. Henri Laugier», *Biologie et Développement*, P.U.F., février 1968.
- *Qui est pour Jésus-Christ?*, Editions du Cerf, mars 1970.
- *Herbert Marcuse et la finalité de la société occidentale*, communication à l'Institut de France, Académie des Sciences Morales et Politiques, mars 1970.
- «Echec de l'économie moderne et chances du progrès moderne», *Faim et Soif des Hommes*, n° 4, 1970.
- «La crise intellectuelle du catholique français», *La Nation*, 1970 (sur le livre de Jean Lacroix).
- *François Perroux interroge Marcuse... qui répond*, débat Sup. de Co, Marseille, avril 1970.
- «La participation est une libération», *le Télégramme de Paris*, n° 44, janvier 1971.
- *Herbert Marcuse et la finalité de la société contemporaine*, Institut de France, Académie des Sciences Morales et Politiques, novembre 1970.
- La part maudite et le silence, réunion à Orléans pour Georges Bataille, publiée dans *l'ARC*, 12 mars 1971.
- *El recurso humano* (la ressource humaine), conférence à Malaga, mars 1971.
- *Aliénation des sociétés industrielles et libération de l'Homme*, conférence à la C.F.T.C. de Rouen, mars 1971.
- *Filosofia e teoria critica della società*, traduction italienne, Citta Nuova editrice, Rome, 1971, p. 152.
- *L'industrie et l'universalisation de la culture*, (traduction espagnole), Madrid 3-4 juillet 1971.

BIBLIOGRAPHIE

- «Témoignage» dans l'ouvrage *Points de vue*, consacré à Pierre le Brun, Paris, 1972.
- «La ressource humaine», *Communion n° 103*, Les Presses de Taizé, 1972/1973.
- L'agent économique (*structures mathématiques et structure du réel*), exposé à l'Ecole Supérieure d'Administration, le 12 juillet 1973, Bogota, Colombie.
- *Pouvoir et économie*, conférence au Centre des Hautes Etudes Militaires, le 17 juillet à Lima, Pérou.
- *Mathématisation de l'agent*, exposé à l'Académie des Sciences du Pérou, le 18 juillet 1973 à Lima, Pérou.
- *El equilibrio general restructurado por las unidades activas*, exposé au II^e colloque Franco-Espagnol, 2-4-avril 1974, Madrid, Espagne.
- *El agente economía: matematización y realidad*, conférence au Colegio Universitario de Estudios Financieros, le 3 avril, Madrid, Espagne.
- *L'analyse des échanges intérieurs et extérieurs: son unification par le recours aux espaces topologiques*, exposé au Colloque Franco-Polonais le 22 mai 1974, Paris.
- *La théorie topologique de l'équilibre englobant et la thermodynamique d'Ilya Prigogine*, exposé au Colloque «Sadi Carnot et l'essor de la thermodynamique», Ecole Polytechnique, le 13 juin 1974, Paris.
- *L'agent économique, mathématisation et réalité*; mélanges offerts à André Garrigou-Lagrange, 1974.
- «Au Nom de la Loi», *La Croix*, 6-7 juillet 1975.
- *Texte de l'intervention au Colloque International consacré à Teilhard de Chardin*, UNESCO, Publication UNSECO, Série Philosophique, 8 octobre 1983.

1986-88年の学会活動

(付1986年度会計報告)

1986-87年度(1986年4月-1988年3月)に、日仏経済学会は次のような研究会、講演会等を開催した。

1986年度秋季総会(於日仏会館会議室)

11月22日(土) 1時30分-2時

同研究会(同上) 2時-4時

「アフリカ飢餓・その後-食料生産と自立化の問題」 森本 栄二(明示学院大学)

「F.ペルーの経済思想における構造化(structuration)概念をめぐって」 竹内佐和子(日本総合研究所)

1987年度秋季総会(於京大会館)

11月21日(土) 1時30分-2時

同研究会(同上) 2時-4時

「社会民主主義の経済政策-スウェーデンとフランス-」 長岡 延孝(京大大学院)

「フランス革命と貨幣」 阪上 孝(京大人文研究所)

1986-87年度来日学者講演会(於日仏会館)

1986年6月26日(火) 午後6時

「西欧における地場産業」

J=P・ウーセル(リヨン第2大学教授)

1987年4月3日(金) 午後6時

「フランスにおける流通革命」

R・ド・マリクール(パリ高等商科学院教授)

1987年7月10日(金) 午後6時

「西欧における先端技術の諸問題」

P・コエンデ(ストラスブール第1大学教授)

1987年9月17日(木) 午後6時

「現代フランス社会風景の変貌」

E・マランボー(国立統計経済研究所所長)

1988年1月26日(火)

「科学革命から文化革命へ-啓蒙時代における政治経済学の教育をめぐって」

J・エシュト(国立人口問題研究所主任研究員)

また、1988年3月13日~4月3日の期間に、日仏会館の学術使節として、西川 潤(早稲田大学教授)をフランスに派遣した。西川はパリ第1大学のアジア太平洋教育研究センター(Centre d'Enseignement et de Recherche sur les Economies de la Région Asie-Pacifique)で同学部・研究所の教官・研究員、troisième cycleの学生を対象に次の3回の講演を行なった。

3月17日(木) 午後5時
「日本経済の選択—グローバリズムか、地域主義か」(Les choix du Japon d'aujourd'hui—le globalisme ou le régionalisme?)

3月22日(火) 午後5時
「日本多国籍企業のアジア太平洋投資」(Les multinationales japonaises en la région Asie-Pacifique)

3月24日(木) 午後5時
「日本、新興工業国、中国—2000年にむかっての経済関係」(La Japon, les Nouveaux Pays Industrialisés et la Chine—relations économiques vers l'an 2000)

この他にオルレアン市でも次の講演を行なった。

3月23日(水) 午後7時 於オルレアン市議会
「日本の内需拡大策と日仏地方経済の交流」(De l'élargissement de la demande intérieure du Japon et l'échange économique entre la France et le Japon)

この訪仏ではまた、社会科学高等研究院現代日本研究センター及び国際平和・軍事研究センター、数理応用経済研究所、経済計画庁の国際予測研究情報センター、協同組合大学、フランス防衛経済学会、経済思想シャルル・ジード学会、経済社会情報研究所などを訪ね、学术交流と研究連絡を行なった。

なお、本学会では、1988年10月8—11日に東京早稲田大学で、第3回日仏経済学会議を開催する。これは、日仏会館開催の第5回日仏シンポジウムの一環としてもたれるものである。第1回日仏経済学会議は1976年に東京で、経済計画を主題として開かれ、第2回会議は1985年クレルモンフェランで、経済協力を主題として行なわれた。今回は、民間海外投資の比較検討を主題とする。プログラムは別途のとおりであるので、会員各位のご参加を期待したい。

(事務局)

1986年度 日仏経済学会 会計報告

(1985年4月1日～1986年3月31日)

《經常会計》

(収入)	(支出)
前期繰り越し 2 8 0 2 5 5	会 合 費 7 0 2 4 4
会 費 1 2 0 0 0 0	交通・通信費 5 7 9 8 0
寄 付 2 0 0 0 0	事 務 費 1 1 2 3 0
日 仏 会 館 5 0 0 0 0	小 計 1 3 9 4 5 4
利 息 3 8 9	次期繰り越し 3 3 1 1 9 0
4 7 0 6 4 4	4 7 0 6 4 4

《事業会計》

(収入)	(支出)
前期繰り越し 1 6 6 6 7 7	Bulletin 1 5 7 0 5 0
寄 付 3 2 0 0 0 0	次期繰り越し 3 3 5 9 5 8
利 息 6 3 3 1	4 9 3 0 0 8
4 9 3 0 0 8	

《預貯金資産》

普 通 貯 金	9 8 0 9 0
郵 便 貯 金	2 3 3 0 7 0
3 3 5 9 5 8	
定 期 預 金	3 3 5 9 5 8

SOMMAIRE

(Essais)

OKAYAMA Takashi: La pensée économique de F.Perroux		1
NISHIKAWA Jun: Le géant s'est éteint		5
HORIKAWA Shirô: Claudel de l'économie politique		7
CHIYOURA Masamichi: Le temps de mon séjour à IEDES et mon souvenir du professeur F.Perroux		8

KATSUMATA Makoto: Le développement économique et F.Perroux		10
--	-------	----

SHIMIZU Kazumi: Sur le concept de <l'hétérogénéité> de F.Perroux		13
--	-------	----

(Études)

François Perroux: Pérégrinations d'un économiste et choix de son itinéraire ..	16
TAKEUCHI Sawako: Une étude sur le concept de <la structure> de F.Perroux	29
SUWA Sadao: Les fonctions d'importation en technologie de la France et fonctions d'importation japonaises de la France et des E.U.A.et politiques économiques	 35

(Bibliographie)

Le répertoire des ouvrages de F.Perroux	
(Rapport)	 46

La société franco-japonaise des sciences économiques en 1987-88 avec les comptes de l'année fiscale 1986/87	 93
--	----------

(Document)

Un nouveau service d'information bibliographique à la bibliothèque de la Maison Franco-Japonaise	 96
---	----------

(Le règlement de la société franco-japonaise des sciences économiques)	97
--	----

(La liste des membres de la société franco-japonaise des sciences économiques en juin 1988)	 98
--	----------

(La liste des membres du conseil d'administration de la société franco-japonaise des sciences économiques)	 102
---	-----------

(Le règlement sur l'acceptance des manuscrits au <Bulletin>)	 103
--	-----------